

爆豪勝己の幼馴染が結
城友奈だったら

ぬがー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつちやんがキヤラ的に好きなんだけど残念な部分も多いので、改善させられるよう
なキヤラを幼馴染枠に置いてみた。

目

次

プロローグ	戦闘訓練 1
中学時代 1	中学時代 2
中学時代 2	中学時代 3
中学時代 3	中学時代 4
中学時代 4	中学時代 5
中学時代 5	中学時代 6
雄英受験 1	雄英受験 2
入学初日 1	入学初日 2
戦闘訓練 1	戦闘訓練 2

67 61 54 49 43 37 32 26 20 12 6 1

学級委員長選挙	戦闘訓練 3
U S J ルーム襲撃事件 1	戦闘訓練 2
U S J ルーム襲撃事件 2	
U S J ルーム襲撃事件 3	
体育祭前 1	
体育祭前 2	
体育祭前 3	
体育祭開幕	
障害物競走 1	
障害物競走 2	
騎馬戦 1	

153 144 136 129 122 116 111 105 100 93 85 79 73

騎馬戦 2

騎馬戦 3

騎馬戦 4

一回戦 1

一回戦 2

二回戦

準決勝戦 1

準決勝戦 2

準決勝戦 3

準決勝戦 4

決勝戦

表彰式

コードネーム考案 1

241 235 227 221 213 206 200 194 188 181 174 167 160

打ち切り

プロローグ

人は、生まれながらに平等じゃない。

これが齢四歳にして皆が知る社会の現実。

爆豪勝己は幼いころより溢れる才能の片鱗が見えていた。

幼稚園児ながら親が書いているのを見て漢字を覚え、川辺で水切りをすれば誰よりも上手に投げられた。

だが頑張った結果出来るようになつたんじやなく自然と出来るようになつたため、周りの皆が出来ないことが不思議で仕方がなかつた。

そんなある日、周りよりも少しだけ遅れて発現した“個性”を皆に見せた。

「おおく、こりやまたすごい“個性”だなあ！ ヒーロー向きの派手な“個性”ね！
勝己くん！」

手元で起きる爆発を見て保育士たちが勝己を褒めちぎる。皆に“個性”が発現した時とはかなり違う反応だ。

勝己は大人に特別扱いされて自然とこう理解した。

「（俺がすげーんだ。皆俺よりすごくなない！）」

さらに後日、勝己は近所に住む“無個性”と診断された少女——結城友奈を見た。社会全体で“個性”持ちは8割程度だが、世代が下るにつれて“個性”持の比率は大きくなつており、勝己と同い年では唯一の“無個性”だ。

本人は気にしていなさうだが、周りが彼女をからかつている。

「（あいつがいつもやんすごくな）」

友奈が男なら見下して終わりだつただろう。だが友奈は可愛らしい女の子である。当然ながら反応は違つた。

「（じやあ困つたら俺が救けてあげないとな！）」

勝己もこの世代の多分に漏れず、ヒーローに憧れる男の子。気になる相手がいたら悪戯するより救けたいのだ。

そしてこの時、彼は初めて「他人を救ける」ことを意識した。多くのヒーローにとつて踏み出すまでもなかつた小さな一步だが、彼にとつては大きな一步を踏み出したのだ。

時は流れ、爆豪勝己中学2年生。

意外なことに彼は放課後の教室でクラスメイトに勉強を教えていた。

「だからここはこつち見りやいいんだよ。余計なことごちやごちや書いてるが無視して要点だけ見ろカス」

「えーと、つまり……こう?」

「それでいいんだよ。はよ次解け」

無駄な罵倒が入るが、クラスメイトは気にもしない。このクラスに居ればよく聞く言葉の為慣れきっているのだ。

爆豪勝己は自尊心が強く人の上に立ちたがる性格だが、それでもヒーロー志望で将来の夢が「高額納税者ランディングに名を刻むこと」と語る少年である。長者番付に乗るですらなく、社会貢献の大きさで評価されたいと思う性格なのだ。そんな訳でルールを破つて暴力を振るい屈服させるより、相手を救けることで自分が相手より上と実感するのを好んだ。勉強を教えるのもその一部であり、生来の口の悪さ以外は社会にうまく適応していた。

もしもの話だが、ヒーロー気質だけが強い無個性の幼馴染などがいた場合はこうはなれなかつただろう。

勝己にとつて「救ける」とは相手より上にいるからこそ行える行為。それを明らかに格下の相手にされるのはとてつもない屈辱であり、それが続けばメンタルはクソを放り込まれ下水で煮込まれたような状態になつていったはずだ。そうなれば人を救ける余裕などなく、粗暴なだけになつてしまつていただろう。

その後も勉強は続いたが、しばらくすると友奈がやつてきた。

「かつちやん、部長が次のヒーロー部の活動決まつたつて。今から打ち合わせするから部室行こう。皆もう集まつてるよ」

ヒーロー部はヒーローっぽい活動を行う部活であり、なんと地元のヒーロー事務所の協力を得て現場に行くことも多い部活だ。そこに勝己と友奈が所属している。

入学時期にはもつと多く部員が居たのだが、中学生が出ることを許される現場など清掃活動か幼稚園・保育園などのチャリティーアイベントの手伝い程度なので大半はすぐに退部してしまう。残っているのは彼ら含めて10人足らずの小規模な部活だ。

勝己もやめようと思つたが一緒に入部した友奈が楽しみながら続いているので、途中で投げ出した根性なし扱いされるのが嫌で今でも続いている。

「わかった。おい、残りはさつきまでの応用だ。ちょっと手順が多いだけで解き方は変わらんから自分でやつとけ。俺に手間取らせたんだから復習サボつたらぶつ殺すぞ」

「ああ、ありがとな。部活頑張ってくれ」

勉強を切り上げ、友奈と共に部室に向かう。

「かつたりいなクソが。せめて次は事務所の運営について聞けりやいいんだがなあ。俺はプロになつたらソッコー独立するし、ちんたらサイドキックする気はねーつてのによ」

「あはは、かつちゃんはすごいもんね。でも独立するまでだけでも事務所に来てほしつて気持ちも分かるし、今はじっくりやるしかないんじやない?」

「わかつとるわ。ただの愚痴だ。聞き流せ」

この日決まつた活動は近くの山の登山道の清掃活動。趣味が登山な勝己は珍しく黙々と清掃活動に精を出し、皆を困惑させることになつた。

中学時代1

中学生三年生の春。

クラス替えがある人数でもなく、勝己と友奈は同じクラスで授業を受けていた。

今 の 授 業 内 容 は こ れ か ら の 進 路 に つ い て だ。

「えー、お前らも三年生といふことで！」

本 格 的 に 将 来 を 考 え て い く 時 期 だ ！

“個性”が発現する以前の時代では大学まで進学することも多く、進学校でもない一般的な市立中学校の生徒が将来について考えるほどの時期ではなかつた。精々学力に合つた学校に進学する程度だろう。

だ が 今 は 高 校 で ヒ ー ロ ー 資 格 を 取 つ て プ ロ に な る 時 代 だ。大 学 ま で 進 学 す る の は “個 性 ” の 使 用 が 禁 止 な 職 業 を 目 指 し て い る 者 か、惰 性 で 進 学 し た 者 だ。“個 性 ” を 活 か し た 職 業 を 目 指 す な ら ば 進 学 す る 高 校 で 将 来 が 決 ま る。

「今 か ら 進 路 希 望 の プ リ ン ツ ト を 配 る が 皆 !!

だ い た い ヒ ー ロ ー 科 志 望 だ よ ね」

「「「ハ ー イ !!!」」

大きな石でできた腕に変える者、腕から炎を吹きだす者、牙をむく者に筋肉を隆起させる者。『個性』はバラバラだが全員元気よく先生の言葉に同意した。

理由としてはヒーローが人気の職業だというのもある。しかし一番大きい理由は仕事で『個性』を使うなら許可をとる必要があつて、許可をとるには『個性』の使用訓練が必要になるからだ。そのため農業高校などでも『個性』の訓練がカリキュラムに組み込まれたヒーロー科があり、『個性』を使用したい者は皆ヒーロー科を志望するのだ。

「でだ、爆豪と結城は『雄英校』志望だつたな。模試の方もいい感じだつたそうじやないか」

クラスメイト達がざわつく。

雄英高校といえば偏差値7・9の国立校、おまけに入学時点ですら高い戦闘能力が求められる。『個性』発現以前の時代の東大に相当する名門校である。一般的な市立中学でしかないこの中学校から進学した者は今までいなかつた。

「勉強の方はかつちやんが教えてくれてますから。あと先生、私は普通科志望です。

ヒーロー科は記念受験なので」

「俺は言つた通りヒーロー科だ。オールマイトも超えてN.O. 1まで駆け上がるから同じクラスだつたことを誇つていいぞ」

慣れきつた爆豪のビッグマウスはともかく、友奈の雄英受験に對して周りから嘲笑が漏れたりはしない。

座学で合格できるだけの学力があるというのもそうだし、記念受験と言い切つているのも大きな理由だ。だがヒーロー部で奉仕活動に精を出したりとヒーローっぽいことをやつてきてるので「受けるだけの資格がある」と周りから認められているというのも大きかつた。少なくともただのヒーロー好きであれば「身の程をわきまえろ」と周囲は思つただろう。

「そりゃ結城はなんで雄英狙いなんだ？ 雄英つてヒーロー科と開発科、経営科はネットでも見るけど、普通科つてただ勉強ができるだけじゃね？ もしくはヒーロー科の予備」

「そんなことないよ。ヒーロー事務所の事務員やるとき便利な資格の講座とか、裏方のスタッフとしての職場体験とかあるらしいし。将来はかつちやんの事務所で秘書とボランティア活動やつていくから色々知つておきたいもん」

「社会奉仕でヴィラン退治出来なくなつちや戦闘系ヒーローとしちや本末転倒だからな。俺は愛想よくとかやる気ねーし、友奈はそういうの上手いから任せる」「任されました！」

「爆豪に結城、今授業中だからその辺でやめとけ。まあ先生的に雄英入学者が出ること

は素直に喜ばしい。あと結城の方は放課後職員室まで来るようだ。『無個性』が受験できないって規定は最近無くなつたけど、個性無しで受験するには危ないからな。注意事項とか書いたパンフレット取り寄せたから』

「わかりました』

放課後、勝己にラインが届いた。

「……ああ？」

「どうしたカツキ？」

「友奈が女子会に誘われたとかでそつちに参加するだとよ。さつや」と言えつてんだ』

「何も言わずに勝手に待つてた奴の言うことじやねーと思うぞ」

「うるせえぞカス。俺は帰る』

「まーまー、落ち着けつて。やることないならカラオケ行こーぜ。元々結城さん帰つて来たらまとめて誘う気だつたし』

「……しゃーねえな。行くか」

友奈が戻つてくる前に誘つても無駄と理解しているクラスメイト達。彼らともかなり長い付き合いがあつたが、なくともこのクラスに居れば誰でも分かるようになつていただろう。

勝己としては断る理由もなかつたので参加することにした。

これが彼の運命に大きな影響を及ぼすことになる。

「やっぱカツキは何でも才能あるな。なんであんな点数取れんの？」

「リズム通りに腹から声出して歌えばいいだけだろうが。なんでききないんだ」

「誰でも同じこと出来ると思うなよてめー」

暗くなり始めた道を歩きながら、中身を飲み干したジュース缶を爆破でゴミ箱に放り込む。分厚い鉄板だろうが簡単に叩き壊せる個性で脆い缶を壊さず飛ばす、という無駄に技術が必要なことを平然とこなす。

簡単そうに日常的にやっているためクラスメイト達はその凄さに気付かないが、この日は気づく者がいた。

「良い“個性”的”の隠れミノ」

中学校時代2

爆
せ
る

爆ぜる。

爆発をまき散らし、勝己を取り込もうとするヘドロのような流体の敵を弾き飛ばす。

爆発をまき散らし、勝己を取り込もうとするヘドロのような流体の敵を弾き飛ばす。しかしヴィランもその程度では諦めない。勝己の抵抗が激しくヒーローも集まつてくるだろうが、この体と“個性”を乗つ取ることが出来れば蹴散らして逃げるのも簡単だと考えたためだ。それに駄目でも下水道が近いこの位置なら隠れミノを捨てればもう一度隠れ潜むことが出来る。やめる理由はなかつた。

爆ぜる。

爆ぜる。

爆ぜる。

道路が碎け、建物に火が付き、ヒーローと共に野次馬が集まつてくる。ヘドロヴィランが流動体の体を持つために対処できる者が限られる上に、爆破に怯

み、消火に手を取られ、飛び散る破片から野次馬を守るため集まってきたヒーローは一切手だしすることが出来ないでいた。

爆ぜる。

爆ぜる。

爆ぜる。

「(こんなドブ男にいい、俺が呑まれるかあああああああ!!!!)」

「ハハハ、えれえ力だ!! こりや大当たりだぜえ! この!!『個性』と力なら怖いモノなしだ!!」

ヘドロヴィランは通常であれば約45秒で完全に肉体の乗つ取りを完了できる。なのに勝己はもう10分以上抵抗を続けていた。

強力な“個性”を持つた隠れミノだとは思つたが、この持久力と暴れるほどに上昇していく火力は想定以上だ。それこそ偶然街に来ていた平和の象徴^{オールマイト}を力尽くで突破するのも可能と夢想するほどに。ヘドロヴィランはこの幸運に笑いが止まらなかつた。

爆ぜる。

爆ぜる。

爆ぜる。

「ダメだ! これ解決出来んのは今この場にはいねえぞ!!

誰か有利な“個性”が来るのを待つしかねえ!!」

「それまで被害を抑えよう。何！すぐに誰か来るさ！あの子には悪いがもう少し耐えてもらおう！」

ついにヒーロー達も勝己の今この場での救出を諦めた。オールマイトがこの街に来ているという情報もあるし、人質も自力で耐えられている。なら無茶して死人を出すより、安全策を取るというのも仕方がなかつた。

何人か今救出できることを悔やんではいるヒーローもいるが、大半はもう切り替えている。今の時代のヒーローはこんなものだ。

爆ぜる。

爆ぜる。

「つーかあのヴィラン……さつきオールマイトが追いかけてたやつじやね？」

「オールマイト!? 来てんの!?」

「にしちや現場来るの遅くね？」

他でも事件起きてるんかな」

事件を肴にワイワイと騒ぐ群衆。危険にさらされている被害者も、立ち向かつたり群衆を守るヒーローも完全にただの見世物感覚だ。ヴィランによる事件 자체は珍しいモノではないし、命を懸けずヒーローに守られた民衆はどこでも大体こんな感じである。

勝己はそれを気にしたことは今まで特になかった。モブキャラ相応の力しかない彼らが動かないのは当然だと。だが今ばかりはそれが勝己の心を追いつめる。

爆ぜる。

爆ぜる。

爆ぜる。

「（ドブ男が一向に剥がし切れねえ……ッ！　息をする余裕もなくなってきた……。俺がこんなところで死ぬってのか……？）」

勝己は今まで、誰かに救けてもらえるような生き方をしてこなかつた。自分は常に守る側で、救ける側で、何より倒す側であろうとしているためだ。格下、弱者に助けられてしまふ屈辱は理解できるし、なにより憧れたオールマイト^{ヒーロー}は勝己にとつてそういう存在だつたから。

だけどもう取り繕いきれない。

声を出すこともできないまま、思わず民衆の方を見てしまつた。

「（あ……）

目が合つた。

幼いころからずつと一緒にいた少女、結城友奈。

彼女にとつての救けるヒーローとしてもあろうとした、勝己の原点。何もこんな情け

ない姿を彼女に見せなくともいいだろうに、と勝己は自分の運の無さを恨んだ。

いくら幼馴染とはいえ幻滅されるだろうか、そう思っていたが友奈は勝己の想像を超えた行動を取った。

つい先ほどまで表情に浮かんでいた恐怖を一瞬で飲み、勝己に向かつて駆けだした。

「馬鹿ヤローッ!! 止まれ!! 止まれ!!」

「死にに来た馬鹿がいるな。オーケー、望み通り爆死だ」

ヒーローの制止を無視する友奈に、ヘドロヴィランが勝己の体を操つて攻撃しようとすると。

「かっちやん！」

「馬鹿ッ！ なんで來た!?」

友奈は勝己にまとわりつくヘドロを必死に払いながら答えた。

「私のヒーローが助けを求めてた！ ヒーローがピンチの時は、私が救ける！」

「………………」

は

？」

予想外の言葉に勝己の思考が停止した。

ヒーローとは最後には勝つからすごいのであつて、負けるどころか死ぬ間際になつて救けを求めるようなやつなどクソだ。少なくとも勝己の認識ではそうなつてはいる。

それに自分は実績だつてまだ立てられてはいない。倒すヒーロー見習いとしてやつてきたことなど、小学生の時に上級生を返り討ちにしたとか、ヴィラン未満のチンピラを撃退したくらいだ。救けるヒーロー見習いとして友奈がやつてきたことの方がよほど結果を残している。

だと言うのに友奈は本気で言つてはいるように見える。

本気で、勝己のことをヒーローと呼んでくれている。

ならいつまでも醜態を晒してはいけない。

最後には勝つのがヒーローなのだ。まだ最後は来ていらない。

「もう十分だ。どいてろ」

「あうっ!?

腕を振るい友奈を払いのける。ヘドロが連動して動いたせいで思つたより威力が出たが、怪我はしていない。

そのまま後ろから伸びた樹に引っ張られて安全圏まで退避できた。

「ハハハ諦めたか？ 安心しな、君は俺にとつてもヒーローさ！ こんないい“個性”

と体を渡してくれるんだから!!』

ヘドロヴィランが再び乗つ取ろうとしてくる。もうずいぶん体を覆われていた。このまま抵抗しなければ十数秒で乗つ取りは完了するだろう。

『腹くくつただけだバカが!!』

B O O O O O O O O M !!!

両方の掌を自分に向け、今日一番の大爆発を巻き起こす。

学校の制服に耐火性能などあるはずもなく、爆炎は体表を焼き払いながらヘドロを吹き飛ばした。

「ツ!!??

「ハリ、落ち着きやいけるじやねえかクソがあつ！ なんでこんなの相手に醜態晒してんだ!!』

乗つ取りは無理と判断し、マンホールから下水道へ逃げ込もうとするヘドロヴィランを爆撃で吹き飛ばし逃がさない。

流動体で掴むこともできない体でも、爆風なら吹き飛ばせる。核のようなモノは見当たらないが、分散して逃げたりもできないようなのでまとめて払えるため、一度引き剥がせば後は作業だ。

勝己が粘っていた間にヒーローが用意した拘束用の箱へ向けてヘドロヴィランを放

り込み、
事件は終息した。

中学時代3

「かつちやん！」

「カツキツ！ 包帯だらけじやんか！ 本当に大丈夫か!?」

「さすがにあれはヤバかつたんじや……」

「見かけだけだこんなの。家で薬塗つときや十分だつたつてのによ」

ヘドロヴィランが拘束されてすぐ、勝己は病院に運ばれた。

本人は大丈夫だと主張したが、体の前面がボロボロなので無視して救急車に放り込まれたのだ。ただ実際に大丈夫だつたので、薬塗つて包帯撒いただけで退院となつたが。

そして治療室から出て直ぐ、友奈とクラスメイト達に捕まつていた。どうもヒーローたちが友人が心配だろうと足を用意してくれたらしい。

「つーかお前らまで来てんのかよ。やりづれーな」

「？ 何？ なんかやんの？」

「あーもういい。友奈！」

「ん？ 何、かつちやん？」

「その、なんだ、救かつた。ありがとよ」

「ツ、うん！ かつちやんにそう言つてもらえて私も嬉しい！」

友奈は他人を気にし過ぎるところがある。助けられることを嫌う勝己に対し、結局自力で切り抜けられたのに救けに入つてしまつたと心配していた。

だが勝己からお礼を言われて、花が咲くような笑顔を浮かべた。

勝己の方は慣れないことを言つたのと、友奈の笑顔で包帯塗れでも分かるほど顔が真つ赤になつてゐる。しかしクラスメイト達は勝己の言動に驚き、いじることすら忘れている。

「おおう、カツキが礼言つてるよ。明日槍でも振るのかな？」

「生き延びられたら御の字だな……」

「てめえらな……！」

散々に言われているが、勝己には自覚もあるので言い返せず唸るだけ。

そんな会話が続く中、骸骨のような男が彼らに近づいた。

「ちよつといいかな？ ヒーロー事務所の者なんだけど」

「あ？ 誰だよあんた？」

「ああ、悪いね。私はこういう者でね」

骸骨男が不慣れな動作で友奈と勝己に名刺を差し出す。

勝己はそれを怪訝な顔で読み上げた。

「マイツプロ、第2秘書室、八木俊典…………マイツプロッ!!!!」

「はあつ!? マイツプロってオールマイトの事務所だろ!? なんでそんなとこから!?」「……もしかしてスカウト? すげーなカツキ。いつもの大口が現実味を帯びて来たぞ」

勝己とクラスメイト達が名刺を見て混乱する。友奈はと言うと呆けたような顔をして固まっていた。

「あのヴィランはオールマイトが追つて一度振り切られ、結局事件には間に合わなかつた。それを解決したのが勇敢な少年少女だと言うんだから話を聞きたいと思うのも仕方ないだろう? とはいえた人が質問するわけじゃないし、この名刺も偽装かと疑つてるんじゃないかと思う。だからこれから警察署で一部屋借りて話がしたいと思うんだが、どうかな?」

「そういうことなら、行く」

「私もお母さんに許可取ってきます」

オールマイトは超人社会において絶対の存在だ。彼に話が聞きたと言われて断る者などまずいない。警察署で行うなら詐欺の心配もないし、勝己も友奈も即座に返事をした。

「少年も親御さんの許可是取つておいてね。それじゃ行こうか」

「なるほど。そんな経緯で」

「はい、かつちやんは私のヒーローですから。いつも救けてもらつてる分、かつちやんがピンチの時は私も頑張るんです」

質問には友奈がほぼ答えることになった。

勝己からすれば自分の醜態について説明しないといけない上に、特に意識することもなく力があるからできていただけのことを褒め殺しにされていたのだ。オールマイトイガ後で内容を聞くのだからと、顔を真っ赤にして必死に部屋から逃げ出すことを我慢でききたことを評価すべきかもしれない。

一方、八木は友奈が“無個性”ながら危地に飛び込むことが出来たことと、その理由に感銘を受けたようだ。

「実に素晴らしいメンタリティだ！ 善良な市民の鑑だよ君は！ いい幼馴染を持つたね爆豪少年！」

「それは俺も分かつてる。これだけ俺は恵まれてるんだ、目標は絶対叶える」

「？ 目標とは？」

「これはしつかり伝えといてくれよ。俺はオールマイトも超えて一番のヒーローになる」

学校で笑いながら言つた時とは違う、真剣な言葉。
それを聞いて八木も表情を変えた。

「本気かい？ そんなことを素面で言う人はまずいないし、長年言い続けていたられたのはエンデヴァーだ。その彼すらもここ数年は言ってくれない。今日だつて痛い目を見たところだろう？」

N o. 2ヒーロー、エンデヴァー。不動の一位であるオールマイトを脅かすことこそできていなかが、二十年以上に渡り第二位を保持し続ける事件解決数史上最多の偉大なヒーロー。

N o. 3以下とは別格の力と実績を保有するかのヒーローですら唱え続けることができないほど絶対的な存在なのだ、オールマイトというヒーローは。

客観的に見て、いくら才能があろうと勝己には荷が重すぎる目標だ。

「俺が井の中の蛙だつたのは良くわかつた。あんな雑魚相手でも奇襲一つであのざまだ。そんな業界でずっとトップであり続ける難しさなんぞ想像もできねー。」

それでも俺はオールマイトが勝つ姿に憧れて、友奈にヒーローって言つてもらえたん

だ。オールマイトとは違つた形になるだろうが、俺なりの形で一番のヒーローになる。
これは絶対叶えるし、もうブレねえ」

声が震えることもなく、淡々と答える。すでに決意したことを口に出しているだけだからこそこの平静だ。迷いや不安があればこうは言えない。

しばし無言が続き、八木が静寂を破つた。

「…………もしやとは思つたが、まさか本当に見つかるとはね。君たち二人になら託しても良さそうだ」

「あ？」

「悪いがこれ以上の話はここではできない。オールマイトは色々と秘密が多いからね。
もう一度場所を移そう」

中学時代 4

「はあつ!?

「え、ええええええええつ!?

「H A H A H A H A H A、驚いているようだね少年少女! 私が、いた!」

警察官の塚内が運転するパトカーに乗せられ、着いた先はありふれたビルの一室。こ
こはマイツプロが保有する、オールマイトの秘密を知る者が会談する際に用いる隠れ家
的な場所らしい。

ここでオールマイトに会えるのかと、若干ソワソワしていた勝己を余所に八木の肉体
が膨れ上がりスースーがはじけ飛んだ。

画風が明らかに違うこの人こそ誰もが知るN o. 1ヒーローオールマイトであり、八
木の正体だったのだ。

「オールマイトの“個性”は不明だつたが、発動系の体格強化だつたのか。にしてもこ
こまで変わると全然わからねえな」

「んー、爆豪少年それは違う。パールでよく腹筋力み続けている人がいるだろう? ア
レと同じさ。怪我と手術で憔悴した体を力ませて全盛期と同じ体格に見せかけている

んだよ。ヒーローとしての活動時間は一日三時間程度が限界になつてしまつたしね

「…………マジかよ」

あつさりと告げられた「オールマイトの衰弱」と言う事実にさすがの勝己も動搖した。日本の敵^{（ヴァイラン）}犯罪発生率は6%程度であり、諸外国が軒並み20%以上なことを考へると治安はとてもいい国だ。これはオールマイトが平和の象徴として君臨しているからだといわれているし、実際に彼の登場以降敵^{（ヴァイラン）}発生率は目に見えて低下している。

そのオールマイトが弱体化していると知られれば、必ず治安は乱れる。オールマイトイ代わる者が未だいない状況では絶対に知られてはいけない内容だ。

そんな話がいきなり出てきて、まだ本命の話が出てきそうな雰囲気に勝己と友奈は睡を飲み込んだ。

「まあさつさと本題を話そうか。私の“個性”だ。

写真週刊誌には幾度も“怪力”だの“ブースト”だの書かれ、インタビューでは常に爆笑ジョークで茶を濁してきた。“平和の象徴”オールマイトはナチュラルボーンヒーローでなければならぬからね。

実際のところ、私の“個性”は聖火の如く引き継がれてきたものなんだ

「引継ぎだ？」聞いたこともねえが、あんたが言うんならマジでそうなんだな。そりや隠すしかねえか」

「ああ、この事実がばれれば“力”を奪わんとする者が現れるのは避けられない。大混乱の火種になりうるし、使わず隠すか消失させてしまうべきだと思うかもしない。それでも社会には必要なんだ」

「そりやわかるさ。あんたの功績を知らない奴なんていない。誰にも否定なんかできねえよ」

「ありがとう。でだ、私の体はもうこんなだし、後継者を探していきたんだ。そして君たちと話して決心できた」

「あ？」

「言つてくれたじやないか、私を超えると。結城少女もだ。君が彼を支えてくれるなら進むべき道を間違うことはないだろう。君たちなら“平和の象徴”の後継者に値する！」

あまりの急展開にしばし二人は呆けていたが、内容を理解してくると表情に抑えられない喜びが浮かんだ。普段不機嫌そうな顔をし続いている勝己も今ばかりは純粋な笑顔を浮かべている。

何しろかのオールマイトに後継として認められたのだ。喜びを抑えられるはずもなかつた。

「やつたねかつちゃん！ オールマイトが、かつちゃんのこと後継者に値するって！」

「すげえうれしい！　でもお前も言われてんだろ！　友奈が救けてくれたから、俺は決意を固められたんだ！　もつと自分のこと誇れ!!」

「わいわいと喜ぶ二人。そんな姿をオールマイトは微笑ましそうに眺めていたが、やがて咳払いの中斷を促した。

「すまない、まだ話が途中だからね。私の後継者になるにあたつて、この“個性”――“ワン・フォー・オール”を受け継いでもらいたい。とはいえた二人に分けて渡すなんて器用なことができる“個性”じゃないからね。どちらに渡すかと言う問題なんだが」

「なら友奈のほうに渡せ。俺は自分の“個性”がある」

「ええっ私!?　こういうのはかつちやんがもらうべきなんじや」

「結城少女の言うことも一理ある。爆豪少年の目標を達成するにあたつて、この力は大きな助けになるはずだ。それでもいらないと?」

「いらねえよ。元々自分の力であんたを超えるって決意したところだつたんだ。それよか友奈に自衛能力あつたほうが心労減るわ」

「……結城少女？」

オールマイトも怪訝な目を友奈に向ける。自衛手段が必要つてなにしてんの君、と言いたげだ。

「あ、あのですね、困つてる人がいて、私が頑張ればどうにかなるなら、やるべきじやないたげだ。

いかと」

「それで路地裏入つてチンピラに殴られて怪我したことあつたんじやねえか……ッ！」

困つてるヤツ見逃さずに救けられるのはすげえけど、体張りすぎなんだよお前は！」

「ああ、なるほど。よく死ななかつたね結城少女。いや、爆豪少年が頑張つたおかげか」
ヒーロー飽和社会と呼ばれ、多くのヒーローがパトロールをしている時代でも、人知
れずチンピラに絡まれたりと被害に合つてゐる人はいる。

というか“個性”を持て余し暴れたい人間が多すぎる時代なのだ。そういう人間が
見つかりにくい路地裏などに溜まり、職業ヒーローたちは袋叩きを恐れて手出ししなく
なる。そんな危険地帯は結構多いし、迷い込んで被害に合つてゐる人も同様だ。

そんな被害者を友奈は見捨てない。大通りまで逃げれば誰かしらヒーローがいるの
で追われないからと、路地裏に迷い込んだ人を助けようとする。

そしてそれが上手くいかないことも当然ある。一回殴られて怪我をしたが、相手が腕
力強化の“個性”持ちだつたらそのまま死んでいた可能性だつて十分あつた。

それ以降は勝己が本気で友奈を守るようになつたので同じことは起きていないが、よ
く体のできていらない少年少女が生き残れたものだとオールマイトイも感嘆した。

「あと俺だと元の“個性”があるが、友奈は“無個性”だ。今日の事件で今まで気づか
なかつた自分の“個性”を発動させるコツを掴んだつづ一方が“ワン・フォー・オール

“を使つても怪しまれにくい。

でかい力を持つて友奈が無茶しないか心配だが、危険なところには俺が行くし、譲渡可能な“個性”って事実を隠すほうが重要だ。

あとは雄英のヒーロー科を記念受験予定だつたが、そつちに本腰入れれば友奈も本格的な“個性”的な訓練時間確保できるぜ」

「なるほど。じゃあそれで行こうか」

「……勘はいいんだろうけどよお、もつと考えて行動しようぜオールマイトイオ」

中学時代5

オールマイトから“ワン・フォー・オール”継承の話を告げられた二日後の午前6時。勝己と友奈はオールマイトと共に地元の海浜公園に来ていた。

「こんなゴミ山に呼び出して、いつたい何の用なんだよオールマイト」

「それはアレさ、“ワン・フォー・オール”を受け継ぐための下準備だよ」

H A H A H A と笑いながらオールマイトは言うが、勝己と友奈は話が繋がらず？が浮かんでいる。

一しきり笑った後でオールマイトが説明を始めた。

「“ワン・フォー・オール”は身体能力強化の“個性”じゃなく、継承者が培つた身体能力をストックし引き継ぐ“個性”なのさ。いわば何人もの極まりし身体能力が一つに収束されたもの!!

生半可な体では受け取れず、四肢がもげて爆散してしまうんだ！」

「勘！なんとなく分かるんだよね、受け継げるくらい体ができるかどうかも含めてさ！」

怪訝な顔をした勝己だつたが、オールマイトは平然と言い返す。

こうも言い切られてしまうと返す言葉もないし、実際に今頼れる指標はオールマイトの勘のみなので勝己も黙つた。友奈が爆散する危機とか冗談ではないので、専用の機材でしつかりデータ取つたうえで“ワン・フォー・オール”継承をやつてほしいぐらいだが、それがダメだということは重々承知しているのだ。

「えつと、じやあ体を作るためのトレーニングとしてここのお掃除?」

「YES! この区画一帯の水平線を蘇らせる! それと並行してトレーニングを行えば、丁度清掃が終わるあたりで体は完成しているだろう! 結城少女は元々格闘技で鍛えていたようだし、半年くらいかな?」

「やつたー! こここの海浜公園、漂着物や不法投棄で荒れてたけど、撤去したゴミの処理費用が出せなくてどこのヒーロー事務所でも放置されてたんです。そのせいで地元の人は誰も近づきませんでしたし、綺麗にすれば遊べる場所が増えますね! 腕が鳴ります!」

「おお、やる気だね結城少女! 爆豪少年はどうだい?」

「トレーニングになるならやる。道端のゴミ拾うよかやる気は出るな」

「うーむ、爆豪少年のやる気の出し方は少しもやらやするなあ。ヒーローってのは本来奉仕活動なわけだし……」

「はっ！ 無償の奉仕なんぞ俺がやつても違和感デケエだけだろうよ。やりてえことをやりたいようにやって、それが社会のためになつてる。そういう姿で魅せるのが俺なりのヒーロー像なんだよ、今んとこな」

開始で若干ぐだりつつも、海浜公園の清掃活動とトレーニングの日々が始まった。ある日は、友奈がゴミを持ち上げて運び、勝己は腕を真横に伸ばした状態で大きなゴミを掴んで運搬した。

またある日は、友奈が走り込みを行い、勝己は重りを付けて逆立ちで飛び跳ねながら並走した。

また別のある日は、友奈が小休憩をはさんでいる間、勝己は“個性”を伸ばす訓練だと言われ熱湯に手を突つ込んで汗腺を開いた後に最大火力での爆破を繰り返した。

そんな日常が続いたある日、友奈は疑問に思つたことを聞いてみることにした。話さない理由があるかもしれないとも思つたが、それならそうと言つてもらえるとも考えたからだ。

「あの、かつちゃんの方のトレーニングきつ過ぎないですか？　男女の差じやすまないと思うんですけど？」

「ん？　そりや決まつて……そういえばこれ一般常識じやなかつたつけ。じやあ説明しておこうか！　爆豪少年、一旦中斷してこつちに来てくれ！」

どうも伝えるまでもないことだと勘違ひしていただけだつたようだ。

“個性”を使いこなすべくゴミを吊つて空路でゆつくりと揺らさず運搬する訓練をしていた勝己が降りてきて、説明が始まった。

「解説の前に質問だ。爆豪少年、君は自分の“個性”が何か理解しているかな？」

「“爆破”だろ。掌の汗腺から二ト口つぽい物質出してそれを爆発させてる」

「それは合つてる。でもそれだけかい？　爆破に耐えられる掌は？　同じく爆破を受けても折れない指は？　爆破の反動を抑え込む腕は？　体幹は？　爆破を至近距離で見聞きし続けても問題ない目や耳は？　どれも超常黎明期以前の人間のそれじやない」

「それは……確かにそうだな」

「改めて見るとかつちゃんの体すごい頑丈だよね」

「とまあこのように、世代を重ねる中で多くの“個性”が混じつた現代人は单一の力しか持たない場合はほぼない。パツと見“無個性”と同じ外見をしていても、異形型としての高い身体能力も持つてているつてことがよくあるのさ！」

そして異形型の“個性”を持った肉体は他の“個性”と同様に、高い負荷を長時間に渡つてかけることで成長する！」

“個性”を使用すると吐き気や腹痛に襲われる場合、鍛錬を積むと副作用を起こさない、あるいは起こしにくい体质に成長する。またメインとなる“個性”に関係なくとも、肉体を鍛え上げることで超人的な身体能力を獲得することも可能だ。

とはいえるそもそも存在しない機能を獲得することはできないし、成長率や成長限界は個人差がとても大きく、誰もが鍛えれば強くなれるわけではないのだが。

「ただ常人の体にそんなことしたら故障一直線だけどね！だから“無個性”な結城少女のほうは適度に休む必要があるんだよ。大きく伸びるのは“ワン・フォー・オール”継承を終えた後さ！」

「わかりました！今は焦らず、コツコツと！」

「そういう仕組みになつてんのか……。“個性”はあくまで身体機能の一つで特別扱いしてたつもりはなかつたが、つもりでしかなかつたつてことか。まだまだ体も伸び代デカそうじやねえか」

「その調子だ爆豪少年。じゃあそろそろ再開しようか」

中学時代 6

「おーい、力あるやつ誰か来てくれ！ デカいのがあつて邪魔してる！」

「わかった！ これ片したら行くから待つてくれ！」

「こつちはゴミ山が崩れそうだ！ 押さえながらゆっくり崩せるやついいのか!?」

「あつちにできたやついたはずだ！ 呼んでくる！」

友奈への“ワン・フォー・オール”継承も済んだ初冬、勝己と友奈はまだ沿岸のゴミ掃除を続けていた。

といつても二人だけではない。トレーニングには使い終わつたし、人を集めて指定していた区画以外もまとめて掃除しようということになつたのだ。どうせならそこまでやりたい、という友奈の要望である。

出資はマイツブロ。チャリティーやボランティアはよくあることだが、稀にオールマイトも清掃活動に参加すると言うのでかなりの人手が集まっていた。

さらにオールマイトとのコネ作りのためにいくつものヒーロー事務所協力を申し出があつた。その結果、監督員が十分確保できたので「申請し許可を得れば、清掃活動に“個性”を使用してもいい」という条件が付いたのも人が集まつた理由の一つと思われ

る。なんでもいいから大々的に“個性”を使いたいという人も案外多いのだ。

勝己は当初「人が来ない訓練場所がなくなる」と残念がっていたが、次第に清掃活動を楽しみ始めていた。というより別の楽しみが見つかったのだ。

「はははははつ、今日も俺が勝あつ!!!
〔度も負けるものかつ！ 黒影！〕

「アイヨ！」

勝己、友奈と同じく静岡県に住むカラスのような頭部をした少年、常闇踏影だ。案外家が近かつたらしく、オールマイト見たさに清掃活動に参加していた。

彼は伸縮自在な実体化した影っぽいモンスター“黒影”を宿すという“個性”を持つている。この“個性”にはダークシャドウがどれだけ物を持つていようと常闇自身には負荷が一切なく、起点である常闇が動けばダークシャドウも動くという性質がある。

そのためゴミの運搬で猛威を振るつていたのだが、対抗心を刺激された勝己が持ち前の身体能力とタフさに任せてそれ以上のペースでゴミを運んだ挙句盛大に煽ったのだ。

常闇も躊躇なく挑発に乗つて競いながらゴミを片付けていき、清掃活動終了の時間になれば駄弁つたり雄英受験者同士ということで情報交換をしたりとなぜか友人関係を築けていた。

「ちよつと、これ運ぶの手伝つてもらえない？」

「はーい！　えつと、ここ持てば行けそうですね。せーの！」

「よいしょ！」

一方、友奈は一般参加の人たちと協力してゴミ掃除に励んでいた。

オールマイトから“ワン・フォー・オール”を受け継いだとはいえ、すぐに使いこなすなど余程の天才でないとできはしない。発動させれば余りの力に耐えきれず、自滅してしまつていただろう。

なので意識的に発動することはやめ、普通の子供がそうであるように、体を動かす中で無意識に発動してしまう程度の出力から慣らしていくことになつたのだ。

この方法でもじわじわと、しかしこれまでとは段違いの速度で身体能力が上がつているので、時間があるなら間違つた手段ではないのだろう。

今日も一日がそうして終わり、さて帰るかという空気になつたときにオールマイトがトゥルーフォームでやつてきた。

「やあ、二人とも。元気にやつてるみたいだね」

「あ、オー……八木さん。はい！ 順調にゴミは減つていつてます！ このペースならこの区画もすぐ終わりそうです！」

「みたいだね。綺麗になると気持ちがいいものだ」

「おい八木、今回は間が開いたがなんかあつたんか？ まだ続くようなら訓練メニューを考えるのとかはもうこっちでやるが」

「気にすることはないさ。清掃活動の書類申請と、こちらの方を連れてくるのに時間がかかるつただけだから。グラントリノ、すみませんが自己紹介を」

「誰だ君は！」

白髪白髭の小柄な老人がオールマイトの言葉を無視して誰何をする。体もプルプルと震えているし、まともな状態には見えない。

「……この爺、ボケが始まつてんのか？」

「ボケたフリはこの方の定番のおふざけなんだよ。グラントリノ、話を進めましょう」

「つたく、ネタ晴らしが早いぞ俊典。俺あこいつの師匠の一人のグラントリノ。一応、ブ

ロヒーローの免許は持つてゐるが碌に活動してねえ隠居爺だ」

「御冗談を。まだまだ現役でしょ？」

「んでその隠居爺がどうしたつてんだよ？」

「……対外的には君たちと直接の関りがあるのは秘書の八木俊典だけということになつてゐる。マスコミとかヴィランとか、オールマイトとの直接の関りを公表されると色々問題があるからね。ただ“ワン・フォー・オール”の問題がある以上いつまでもそのままつて訳にもいかないし、私が君たちを気にかけても怪しまれないよう下準備をしておきたいわけだ」

「んで俺に白羽の矢が立つた。受精卵小僧、お前“爆破”的な戦い方するんだろう？　俺も足から空気噴出して似たような戦法を取る。弟子に取つてもおかしくねえし、兄弟子のオールマイトとコネを作らせても違和感はねえ。指導も手を抜く気はねえし、実戦形式でしごいてやる。小僧にとつても損はないと思うぞ」

ニヤリと勝己は裂けるような笑顔を浮かべた。

基礎トレーニングは嫌いではないし、常闡のような相手と競り合うのも楽しい。だが“個性”を使って戦うのはもつと好きなのだ。

「乗つた！　早々に底をさらすんじゃねえぞ爺！」

「はっ！　聞いた通り口が減らんな！　早速ボコつてやる！　場所移すぞ！」

「かっちゃんすつごい楽しそう！ よかつたね！」

「爆豪少年、頑張れ……！ 君なら乗り越えられると信じてる……！」

楽し気な子供一人を、ゲロ吐かされまくりトラウマになつたオールマイトイ震えながら見守つていた。

雄英受験 1

2月26日。

勝己と友奈は地下鉄を乗り継ぎ、雄英高校の一般入試実技試験を受けに来ていた。案内に従つて大講堂の席に着いて待ち、時間が来るとボイスヒーロー「プレゼント・マイク」が試験の説明を開始した。

「受験生のリストナード！ 実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ！！

入試要項通り！ リストナードにはこの後！ 10分間の模擬市街地演習を行つてもらうぜ！

持ち込みは自由！ プレゼン後は各自指定の演習会場へ向かってくれよな！！

持ち込み自由という辺りから、金のあるヒーロー家系優遇が見て取れた。高性能なサポートアイテムを持つていればそれだけでかなり有利だからだ。雄英としても基礎を家庭で仕込まれている者を育てる方が効率的だし、その差を覆せる者なら大歓迎ということだろう。

また勝己と友奈が指定された会場の番号を見せ合ったが、違う番号が書かれていた。同じ学校の出身者同士で組んで試験に挑もうとすることへの対策も取っているようだ。

「演習場には、『仮想敵』^{ヴィラン}が三種・多数配置してあり、それぞれの攻略難易度に応じてポイントを設けてある！」

各々なりの『個性』で、『仮想敵』を行動不能ポイントを稼ぐのがリスナーの目的だ

!!

もちろん他人への攻撃などアンチヒーローな行為はご法度だぜ！？

「……質問よろしいでしようか！？」

プリントには四種の『仮想敵』が記載されております！ 誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき痴態！ 説明願います！！

「質問していいとも言つてねえんだから黙つて最後まで聞けやカス」

質問をした受験生に勝己が自然と暴言を吐く。

受験生はいきなりカス呼ばわりされてカツとしたようだが、他は正論だつたので感情を抑えてプレゼント・マイクに頭を下げる。

「出過ぎた真似をしてしまい、申し訳ありません！」

「オーケーオーケー気にすんな！ そつちのツンツン頭もサンキューな！」

四種目の『仮想敵』は0ポイント！ そいつは言わばお邪魔虫！

各会場に一体！ 所狭しと暴れまわってるギミックよ！」

四種目は標的ではないため先の説明からは省かれたらしい。

ただのステージギミックなので避けて通るのが賢明だろうが、倒してはいけないとは言つてないので見かけたら記念にぶつ壊そと勝己は決めた。

「俺からは以上だ！」

最後にリスナーへ我が校の“校訓”をプレゼントしよう。

かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言つた！「眞の英雄とは人生の不幸を乗り越え

ていく者」と!!

“P^更₁ u^に_s U^こ₁ t^う_r a^へ_{!!}

それでは皆良い受難を!!』

スタート地点に移動し、合図に備える。

そしてそれは唐突に、軽い口調で来た。

「ハイスターートー！」

大半の受験者が呆ける中、数名は即座に動き出した。

勝己もまた爆発の反動で飛び上がり、空から演習場にいる“仮想敵”的実物をまずは観察する。

タイヤで移動する速くて脆い1ポイント。こいつでもコンクリートの壁を突き破つて移動する程度のパワーはあるようだ。

多脚で二本のアームを振るうバランス型の2ポイント。

装甲が厚く、遠距離攻撃を備えた3ポイント。

どれも近くの受験生に襲い掛かるようプログラムされているようだが、音にも反応するようだ。速度を出して振り切らない限り、爆発音を出す勝己を追いかけている。またきちんと補足していなくとも、音のする方に集まつてくるようだ。

「（これならわざわざ高速で移動しながら狩るより、移動は遅めで敵の多い方向に進みながら爆音まき散らして戦つた方が効率がいいか。集まりが悪くなれば場所を移しやい

い。まずは3ポイント狩つて強度を確かめる)」

空中から急降下し、3ポイントの“仮想敵”にドロップキックを叩き込む。

3ポイントはあっさりと拉げて碎け、行動不能となつた。

「硬化処理されてねえただの鉄クズ! これなら素手で殴つてもいけるな。パワーよりも射程、連射重視!」

砕けた3ポイントの破片を掴んで、爆風を乗せて近くの3ポイント達に投擲。粉碎。これで遠距離持ちは一旦消えた。

高速で近づいてくる1ポイントを爆破でまとめて薙ぎ払い、遅れてきた2ポイントの集団を蹴り、殴り、爆破してすり潰す。

“仮想敵”的残骸が増えて来る頃には、他の受験者は獲物を先に潰されてしまうと離れていき、勝己は弾が増えてハイエナが消えたとさらに暴れた。

ヴィランの大群が暴れ続けているのにヒーローが休むなどありえない。勝己は無尽蔵の体力でペースを落とすどころかドンドン上げて狩り続ける。

そうこうしているうちに勝己の体は温まつてしまい、本来の調子が出てき始めた。グラントリノにしごかれて寒冷地での“個性”使用訓練も行つたとはいえ、マシになつただけ冬場にスロースターターなるのは変わつていないのだ。

「ん?」

残り時間3分を切ったころ、遠くで大きな音がした。

“仮想敵”が近づいてくるまでの間に飛び上がってみてみると、0ポイントが動き出したのが見えた。ビルより大きくパワーはすごそうだが、関節部は細く壊そうと思えば多少手間がかかるだけで苦戦はないだろう。

しかも勝己からは多少距離があり、足元の1～3ポイントを始末する方が優先だ。実物を見れば倒すこと自体は簡単そうだし、わざわざ狩りに行く価値もなさそうだった。
「期待外れだな。気晴らしに残つた奴らは皆殺しだ！」

結局勝己はこのまま移動しながら“仮想敵”を迎撃し続け、他の受験者と関わらないまま受験を終えた。

雄英受験2

「んー通知まだかなー。ねえかつちゃん、私受かつてるとと思う?」

「筆記いけてんだから受かつてるだろ。てか自分ちに届く合格通知を俺んちで待つのはどうなんだ?」

雄英高校一般入試の実技試験から一週間後。

友奈は実技試験を終えてすぐは「やりたいようなやり方でベストは尽くした」と言つた雰囲気だったが、発表が迫るにつれて不安が増してきたようだ。

勝己は自分達の合格を全く疑つていないので、友奈を元気づけるため自作のお菓子を振舞う。本人が辛党なので甘いお菓子を作ることは多くはないのだが、今回は特別だ。

「だつて同じ会場になつた常闡君とかに比べたらポイントかなり少なかつたし……」

「あの試験は面接も兼ねてつから多少ポイント少なくとも問題ねーよ。ガチであれだけで合否決める氣なら試験担当の正気疑うわ」

勝己としてはなかなか楽しめたアトラクションだったが、あれではトップヒーローの候補を選ぶ試験としては不備が多すぎる。

状況把握のための情報収集力や判断力、敵を倒しに向かう機動力、対物戦での戦闘力

は判断できるだろう。だが「自由」を謳う雄英では、厳格な士傑と違つて思想の矯正が困難だ。勝己のようにとび抜けて優秀ならともかく、半端な実力の問題児は弾きたいし、実力はまだ未熟でも精神面では優れた者は確保しておきたいはずだ。

なので事前に説明されたポイント以外にも、試験中の行動と言うふわっとした定義が上手くできないものを評価されることになるだろう。

そこが評価されれば友奈が不合格になるなどありえないと勝己は確信していた。

「勝己！ 雄英から合否通知届いたよ！」 友奈ちゃんにも届けに行つてたし、向こうで見てきなさい！」

「うつせ、叫ばんでも聞こえとるわ！ 行くぞ友奈！」

「待つて！ 先にこのお菓子食べ切らせて！」

「……緊張しどたんと違うんかい」

『私が投影された!』

「オールマイト!?!』

「……もしかしてコレ合格者全員分やつたんか? 最近連絡取れなかつたのそういうことかよ』

『実は来年度から雄英で務めることになつていてね。一部受験者への通知を任せてもらえることになつたんだ!』

で結果だが、筆記試験は合格! 実技試験も24Pと結構な記録だ。

しかし先の試験! 見ていたのはヴィランPのみにあらず!

結城少女の行動で怪我を免れた受験生や、想定以上の脅威に勇気を持つて立ち向かえた受験生の多いこと!

0Pが暴れ始めた時、転倒した少女を助けに引き返したのなんか試験官たち特にほめてたぜ!』

人助けした人間を排除しちまうヒーロー科などあつてたまるかつて話だよ!』

「おー、かつちゃん、合つてたよ!』

「予想通りじや驚けねーし、喜べねーよ」
『^{レスキュー}救助活動P!! しかも審査制!!』

我々雄英が見ていたもう一つの基礎能力!!

結城少女、42P! 今年度の受験者で最高値だ!

合計66P 文句なしの合格さ! ようこそ雄英が君のヒーローアカデミアだ!』

合格通知が終わり、投影されていた映像が消える。

友奈はようやく肩に入っていた力が抜けたようだ。

「良かつた!。落ちたらどうしようつて思つてたよ」

「だから問題ねーつて言つただろうが。信じろや」

「かつちやんは信じてるけど自分はねー。かつちやんの方も早く見よ。何点取れてるかな?」

「見りやわかんだろ。そら」

勝己の合否通知の投影を開始する。

こちらでもオールマイトが出てきて説明を始めたが、友奈の時の比べて表情が曇つて
いる。

なんだこれと二人は怪しみだが、その理由はすぐに分かつた。

『先の試験ではヴィランP以外に実はレスキューPも見ていたわけなんだが……』

……すまない、君は〇Pだ。まさか仮想敵の競合を恐れて、受験者が完全に君の周囲
からいなくなるとは思わなかつた。

「あちゃー……」
救ける相手いなくちゃレスキューもクソもないよね！』

「まあそんなもんか。他がついてこれるペースで狩らなかつたしな」

『しかしどオロ一を入れなかつたのには理由がある！　君のヴィランPは113P！
ぶつちやけこつちだけでぶつちぎりの首席合格だ！　フォロ一に入る必要性なしつ
て判断された！　おめでとう！』

「やつたねかつちゃん！　首席合格だつて！」

「当然だ。こんなどこで躓いてられつか。ま、ババアやおばさん達は騒ぐだろーし、人々
にガチで晩メシ作つたるか」

「（あ、かなり喜んでる）じやあお買い物しながらメニュー考えよう！　頑張るぞー！」

入学初日1

春。

それは高校生活の始まり。

勝己と友奈は時間に余裕をもつて、広すぎる雄英高校の廊下を歩いていた。

「これからも同じクラスだね。頑張ろうねかつちやん！」

「おう。しつかし、2クラスしかないつたつて同じ中学の奴固めたままとは思わんかったわ。中学時代確執あつたら引きずるじやねえか。何考えてんだろうな」

二人とも1—Aクラスになつたことを喜びつつ、なぜそんな振り分けかを訝しむ。その気持ちはクラスメイトが集まるにつれ、徐々に強くなつていった。

「爆豪か。久しいな」

「常闇か。お前もこのクラスかよ」

「あ、友奈！ 久しぶり！」

「響香ちゃん！ 韶香ちゃんもこのクラスになつたんだ！」

海浜公園のゴミ掃除で勝己と競り合つた少年、常闇踏影。

同じくゴミ掃除に参加はしていたものの、重量物の運搬で輝く“個性”ではなかつた

ため目立たなかつた少女、耳郎響香。

二人とも雄英ヒーロー科志望ということで勝己、友奈と親交を結んでいたのだが、ボランティア活動の報告は内申書で雄英にも伝わっているはずだ。接点がある者がまたまとめられていた。

「そこ集まつてどーしたのー！」

「いや、知り合いで集まつてただけ。ウチは耳郎響香。アンタは？」

「私、芦戸三奈！ そつちも知り合いで同じクラスに集まつたの？」

「そつちもつて？ あ、私結城友奈。こつちは私の幼馴染の爆豪勝己と、イベントで知り合つた常闇踏影君」

「男二一人もよろしくー！ あとあそこの赤いツンツン頭、切島つて言うんだけど、同中出身なんだ」

軽く視線を向ける程度で済ませる男二人に元気よく挨拶する芦戸。

そして知り合いでまとめられた事例が増えた。

「親交のある人達は一まとめにしてるのかな？ でもなんで？」

「偉い人は何か考えてるのかなー。先生に聞いたら教えてくれるかな？」

女子三人で少しの間話は続いたが、正解なんてわからないので直ぐに別の話題に移つた。

そしてすぐ蒸し返された。

「む！ 君は！」

「あ、？ 誰だてめえは？」

「ボ……俺は飯田天哉、実技試験で君に指摘を受けた者だ。あの時は手を煩わせてすまなかつた。だが君も言葉遣いには注意した方がいいと思う」

「…………あん時のか。本当にクラス分けした奴ア何考えてんだ？」

受験で諍いを起しかけた者も一まとめとか何を考えているのか。集まつた者が本気で怪しみ出した時、答えられる人物がやつてきた。

「お友達ごつこしたいなら他所に行け。ここはヒーロー科だぞ。

…………ハイ、静かになるまで7秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね。

担任の相澤消太だ。よろしくね」

「「「「（担任！？）」」」」

始業時間が来たとかではなく、寝袋に収まつた不審者が出て黙つた生徒達は不審者からの言葉に驚いて言葉を失い続いている。

黙つた理由はどうでもいいのか、相澤はしゃべりだす者がいる前に指示を出した。
「早速だが、体操服着てグラウンドに出ろ。個性把握テストを行う」

「「「「個性把握……テスト?」「」」」

「入学式は!? ガイダンスは!?」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事に出る時間ないよ。書類読んどけば十分だろ」
高校生活というものを楽しみにしていた女子生徒の言葉をにべもなく切り捨てる相澤。

そしてとどめのよう続けた。

「雄英は自由な校風が売り文句。そしてそれは先生側もまた然り。

さつきそこの連中が騒いでいた理由も含め、テストが終わるころには実感できるだろ。じゃ、早よ着替えろ」

体力テスト。

超常黎明期以前から行われており、現代でも行われている“個性”禁止のテストだ。

異形型などの場合は普通にやつても優れた結果が出すぎて“個性”使用扱いとなるため、画一的な記録を出させて一応の平均を作るためだけのテストである。

それを“個性”を存分に使用して行い、自身の「最大限」および「何ができる」「何ができないか」を知るのが個性把握テスト。

相澤曰く、それがヒーローの素地を形成する合理的手段、らしい。生徒達も楽しみつつも真剣にこなしていく「型破りだけど面白い先生じやんか」などと思い始めていた。

「ハイ、これで全員の測定が終了。これ結果ね」

相澤が持った装置からトータルの順位が空中に投影される。

一位は生物以外なら何でも作れる万能の“個性”である“創造”によつて、種目に合わせた道具を作つた推薦入学者の八百万百。

二位は“爆破”的“個性”による投擲や高速移動と高い身体能力で好成績を残した一般入試首席合格者、爆豪勝己。

三位は氷の連続精製や氷塊による圧迫、勝己に迫る身体能力を持つ推薦入学者、轟焦凍。

この三名の名前が大きく表示され、そこからは皆同じ大きさだ。

そして最下位は峰田実となつてゐる。自分にはくつかずに跳ねる“もぎもぎ”を

作れる“個性”で反復横跳びでは好成績を残したものの、小柄すぎる体格が仇となり他の成績は低かつたためだ。

「えー先生の当初の予想通り、推薦入学者と首席合格者がぶつちぎり。ぶつちぎり過ぎて問題だと思うわけだ。これじゃあ切磋琢磨することも難しい。

そこで思い出してほしいんだが、テスト開始前俺は何て言つた？ 葉隠」

「え、えーと、雄英の校風は自由。先生側もまた然り、でしたつけ？」

「そう。生徒の如何は先生の自由。

というわけで最下位の峰田」

「オイラ？」

「そうお前。成績不振によりヒーロー科から除籍処分とする」

空気が凍つた。

突然の除籍宣告に生徒たちは茫然としている。

そんな中、一般受験を受け、クラス分けに疑問を持つていた勝己だけは担任の裁定に納得していた。

「なるほどなア。受験が雑だつたのも、クラス分けが適當なのもそういうことか。ヒーロー科からの除籍と普通科からの移籍が繰り返される前提ってわけだ」

「察しがいいな。とはいってここ数年の一般受験が雑だつたのは関係ない。ただのクレー

ム対策で合理的な試験ができなくなつてただけだ。今は現場で修正してゐる状態でな。

話を戻すが、峰田には明日から普通科に通つてもらう。

それを見て普通科の奴らも察するだろう。ヒーロー科の席に空きができたことを。実力を示せば席を奪えるチャンスがあることを。

入学の段階でこれだけ差ができるしまつてゐるんだ。下位の16名には緊張感を持つて取り組んでもらいたい。

上位3名もうかうかしてると追い抜かれて蹴落とされることを忘れるな。

諸君らが一名でも多く残り、試験担当の教師の目が節穴でなかつたと証明されることを願つてゐるぞ。去年のようにクラス総入れ替えは勘弁してほしいし。

以上だ。個性把握テストはこれにて終わり。

教室にカリキュラム等の資料あるから目え通しとけ』

勝己以外は誰も言葉を発することができないまま、相澤は去つていった。

入学初日2

雄英高校の初日が終了した。

勝己が自由な校風を満喫すべく、職員室で雄英のルールについて色々と聞き出してから教室に戻ると、まだ多くのクラスメイトが教室に残つていた。

ただし重苦しい空気はそのままだ。復帰のチャンスはあるとはいえヒーロー科でい続けた方が訓練等で有利なのは変わらないし、何よりクラスメイトを弾き出してしまつたというのが存外堪えたらしい。不意打ちじやなければ多少はマシだつたと思うが、その想定はしても無駄だろう。

友奈が頑張つて空気を紛らわそうとしているが、皆暗い表情を浮かべ消沈している。勝己としては面白くない光景だつた。

「なんだこの空氣！ 通夜かつ！」

「似たようなもんじやね……？」

「つーか爆豪お前どこ行つてたん？ あんなのあつた直後に元気すぎねえ？」

「これ貰いに行つてたんだよ。てめえらがウダウダやつてる間にな！」

ゾンビのような表情で蠢くクラスメイトに勝己が貰つた書類を突き付ける。

書類には「体育館・運動場使用届」と書いてあった。

「何だコレ」

「見たまんまだ、体育館とグラウンドの使用届。授業で使つて設備の説明受けるまではダメらしいが、それ以降ならコレ出して教師の許可取れば使用可能だとよ。放課後訓練するかどうかどころか、できるかどうか調べる時点から生徒の自由つてすげえだろ」

聞きにすら来ない奴には本来教えないらしい。雄英は潤沢な資金を持つているが「自分から行動しない奴には注ぎ込んでも無駄」という考えによるものだ。

「俺アこいつで今日の状況をさらに加速させる！」

「「「「はあっ!?」」」

「この使用届出せるのはヒーロー科だけだがな、練習相手を普通科から募集することもできんだよ！ 受験は不合格だつたのに雄英に来た、諦めの悪イ対人特化に援護特化、搦め手特化！ 確に訓練受けてねえ現状じやヒーロー科で相手見繕うよかいいのが見つからあ！」

でもつてこれは危険がないか教師が見張る！ 受験じや評価されなかつた連中が日の目を浴びるんだ、受験に受かつただけで浮かれた連中なんぞガンガン抜かれていくだろうよ！」

一呼吸入れて、息を落ち着ける。全員注目してゐるし、もう怒鳴る必要はなかつた。

「今んとこ俺らは受難を一つ越えただけだ。まだ特別な立ち位置つてわけじやねえし、競う相手が多いに越したこたあねえ。上がつてくる奴がいること喜べや。

それに落ちたやつにしたつて気にする必要もねえ。てめえらだつて落ちたら這い上がるだろうが。心配とかするだけ無駄だ。

わかつたら辛氣臭い顔やめてさつさと帰れウゼエんだよクソども」

なんでここまで言つて最後に無駄な罵倒はいるかなーという呆れ顔を全員が浮かべた。笑つてるのは友奈だけだ。

とはいえ全員ある程度元気は取り戻したらしい。勝己の言葉は最後だけ無視して質問攻めを始めた。

「なあこの書類俺らももらえるのか？ それとも成績上位者だけ？」

「普通科に人員募集つてどうやつてんの？」

「申請は何日前くらいまでにやるんだ？ てかもう予約入れたりした？」

「一気に喋んな！ 書類はヒーロー科なら誰でももらえる！ 人員募集は教師申請書出しどきや学校のサイトに掲載か、条件に合った奴に教師から連絡がいく！ 体育館とかは一週間前から申請出来て、手が空いてる教師がいれば当日申請でも可！ ……てかこんななん俺じやなくて職員室行つて聞いてこいやつ！」

俺アもう帰るツ！ 行くぞ友奈!!」

「うん。じやあ皆、また明日」

「皆元気になつてよかつたね」

帰りの地下鉄で揺られながら、友奈が会話を切り出す。勝己もニヤリと笑つて答え
た。

「踏み台の跳ねが悪くちや俺が困るからな。せつかく先公がピリピリしたいい空氣作つ

たつてのに、腑抜けどもが湿らせやがつてよお。あのままじやこつちまで萎えら。

ま、クラスの意識が足引きや蹴落としじやなくて競争に向いた。あんなんあつた後と
しちや上出来か。足止めはしてくれてて良かつたわ」

「私はクラスの子とお話ししてただけだよ？」

「じゃあそういうことにしどく。それよか職員室でいい話が聞けたぞ。クラスの連中に
話すのはまだ早いやつ」

「？ 何？」

「仮免試験だ。本来なら二年の六月に受けるらしいが、実力が足りてると判断されりや
一年の九月の試験を受けられるつてよ。おまけに仮免取つた後なら一年でも『
郊外活動』^{インターン}で現場に出ていいんだと。

要は結果さえ出しやカリキュラム前倒しにしまくるつてのもイケる。雄英卒業して
即事務所立ち上げるつもりだつたが、これなら予想より準備はやりやすそうだ。自由な
校風を売り文句にするだけはあつたな

「おお、やつたね！ ジやあ私、普通科の子から一緒にサイドキックやれそうな子探して
みる！ „個性“ があればチャリティーや奉仕活動だけじやなくて、救助活動とかもい
けるもん！」

「サイドキックか。救助活動するならチーム単位で動けた方がいいし、メイン業務に加

えるなら一人二人抜けても機能するようになねえとな。となると初期投資多めにかかりそ
うだし、スポンサー探しに割く時間増やすべきか?」

「そういうのこそ先生に聞いてみるべきじゃない? 卒業生で色々見てきてるだろう
し」

「それもそうだな。ならこの話はここまでだ。帰つたら明日の予習すつぞ。終わつたら
菓子出してやる」

「はーい」

戦闘訓練 1

雄英高校生活二日目。

今日からは通常の時間割に沿つて授業が行われる。

午前中は必修科目、一般教養の授業。

内容こそ予習しているのが前提で難解だが、筆記試験を通った生徒だけあつて程度の差こそあれど皆問題なく授業に付いていている。なので感想としては「普通」というのがA組の総意だろう。

それが終われば昼休憩を挟んで午後の授業、ヒーロー基礎学の時間だ。

「わーたーしーがー!!

普通にドアから来た!!」

オールマイトが来ただけで生徒たちはざわざわと興奮して教室の空気が変わる。超人社会に生きる生徒たちにとつてオールマイトは現人神みたいなものなので、その教えを受けられるとあれば興奮を抑えるのはまず無理だ。冷静なのは推薦組と教わり慣れた勝己と友奈だけである。

「ヒーロー基礎学！」

ヒーローの素地を作る為、様々な訓練を行う課目だ！！
単位数も最も多いぞ！

早速だが今日はコレ!!

戦闘訓練!!!

オールマイトの言葉に勝己の他、戦闘に愉しみを感じる者がニヤリと笑う。“個性”の使用が原則禁止されている超人社会において、“個性”を用いた戦闘はヒーローに与えられた最大の特権であり最も華のある仕事だ。そして世間から最も期待されている仕事でもある。これを楽しみに思わない生徒はあまりおらず、表情を変えない生徒も内心では昂っていた。

「そしてそいつに伴つて……こちら！」

入学前に送つてもらつた『個性届』と『要望』に沿つて眺めた『戦闘服』!!!

「「「「おおお!!!」」」

コスチュームもまたヒーローに認められた特権の一つ。壁からせり出してくるケースに収められたソレに興奮しない者は轟だけだつた。

「恰好から入るつてのも大事なことだぜ少年少女！」

自覚するのだ!!

今日から自分はヒーローなんだと!!!

じやあ着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ！」

「「「「はーい!!」」」

男女に分かれてコスチュームに着替える。

勝己の戦闘スタイルはグラントリノに師事した結果、接近戦なら蹴りを主体としたモノになつてゐる。通常であれば蹴りを放てば踏ん張りが効かず態勢が崩れたりもするが、腕で移動や態勢の保持が行える勝己には使いやすいものだつたのだ。

なので下半身のコスチュームは耐久性を特に高めている。

靴は頑強で切断や貫通に強く、ズボンは防刃、防弾、耐熱など様々な耐性を持たせてある。その他にも膝には攻撃を目的としたプロテクターも付いており、相手が棘だらけだろうが炎を纏つていようが蹴りつけられるようになつてゐるのだ。結果、相応に嵩張

りダボついた様に見えるようになった。

上半身は肌を晒さない薄手のスース。

オールマイトから指導を受けていた時に過去のヴィランとの戦闘経験について聞いていたりもしていたのだが、攻撃を当てればそれで勝利が決まるような“個性”が存在することを知った。なので回避動作が取りやすいように薄手で、多少の攻撃では破ることが出来ないスースを用意することにしたのだ。頭部はデザインの問題でカバーできていないが、そこに攻撃を食らえれば薄手のスースではどのみち死ぬのでそれほど気にしてはいない。定番のヒーローマスクと爆発を模した飾りで十分だ。

また肩には首をカバーするプロテクターがついている。

“個性”持ちの人間は身体構造自体はバラバラだが、共通した弱点もあると知っているためだ。具体的には首の後ろ。超常黎明期以前からコミックなどによくある「首トン」だが、あれが“個性”持ちを氣絶させるには有効なのである。勝己自身やグラントリノも積極的に狙う場所なため、対策も当然立てているのだ。

そして最後に手榴弾を模した大きな籠手。これの機能は多少悩んだ。

初めは二トロのような汗を溜め、最大火力の砲撃を放てる機能にしようと思った。だが態勢を崩さない範囲での最大火力なら腕のダメージを覚悟すれば道具無しでも撃てるし、精度の高い攻撃ができる。何より市街地で使えばヴィランが暴れた以上の被害が

出かねない。そんな訳で別の機能を付けた。

籠手を腕に取り付けギミックを作動させると、掌にピンポン玉サイズのボール——
超躍弾スーパー・ボールが数個出てきた。見た目よりはるかに重量があり、壁に投げつけると良く弾む。握つて爆破しても全く溶けない。依頼通りの性能だ。

これを爆破で飛ばせば威嚇射撃や行動の阻害には十分。銃とかだと銃口の向きと指の動きで強いヴィランやヒーローだと見切れる奴ばっかりだが、これなら射線が読まれづらく実践的だ。なかなか満足のいく仕上がりだった。

勝己が着替えと動作確認を終えたのでグラウンドに向かうと、同じく着替え終わつた切島が歩きながら話しかけてきた。

「爆豪も着替え終わつたか。なかなかいい感じじゃんか」

「たりめえだ、ヒーローが格好つけねえでどうする。思い入れ重視で素人の手作りみてえなの着てるヤツいたら爆破するわ」

ヒーローとは命懸けで行う職業であり、民衆からの人気が大事な職業だ。

だからこそそのための道具であるコスチュームは機能的で見栄えのする、出来るだけ性能の高い物を使うのが鉄則だ。力が足りず負けるなど言語道断だし、見た目が悪くては救けられた民衆が安心できないのだから。

そこらを考えない者は意識が低すぎるか、自分の“個性”に過剰な自信を持ち慢心し

てしまつている者だろう。勝己にとつては味方にしたくないし、ライバル視などされば酷い侮辱だと感じるレベルだ。

「ははっ、さすがにそんな奴いねえだろ。で俺のはどうよ!?」
「……ほぼ上半身裸に何言えってんだ。強いて言やあその肩の、腕動かしにくいやねえか?」

「製造元の独断で付いたんだけどよ、案外動きの邪魔にならないんだよコレ。見栄えいいし、便利な道具仕込んでるし、いい仕事してんだぜ?」

「マジか。パツと見じやわかんねえもんだな」

グラウンドβまでの道のりを遅れてきた常闇、上鳴、瀬呂も含めて話しながら進む。予想より長かつた道を通り過ぎグラウンドβに着くと、先に来ていたオールマイトが出迎えてくれた。

「始めようか有精卵共!!!」

戦闘訓練のお時間だ!!!」

戦闘訓練2

「今回の戦闘訓練は屋内での対人戦闘訓練だ！」

「ヴィラン退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内の方が凶悪ヴィラン出現率は高いんだ。」

「監禁・軟禁・裏商売……このヒーロー飽和社会、真に賢しいヴィランは屋内に潜む！
そんなわけで君らにはこれから「ヴィラン組」と「ヒーロー組」に分かれて2対2の屋内戦闘を行つてもらう！」

オールマイトの説明が一区切り着く。そこで蛙吹が質問をした。

「基礎訓練もなしに？」

「その基礎を知るための実践さ！」

「ただし今度はぶつ壊せばオツケーな口ボじやないのがミソだ。
では状況設定を説明するぞ！」

「ヴィラン」が廃墟に「人質」を連れて逃げ込み、「ヒーロー」はそれを追いかけている！

「人質」は虚弱で抵抗する力はないが、「ヴィラン」の目的が誘拐なので「人質」の安

全には気を使わないといけない！

「ヒーロー」は制限時間内に「人質」を保護し「ヴィラン」を捕まえれば勝利。

「ヴィラン」は制限時間まで捕まらないか、「人質」を奪還されなければ勝利。両方の条件を達成するするか、「ヒーロー」を捕まえれば大勝利だ。

なおこの制限時間つてのはヴィラン側の黒幕が派遣した回収用の人員が到着するまでの時間だから、ヴィラン側だけが知っている。
何か質問は？」

オールマイトがスラスラと設定を告げた。

カンペも一応用意してあつたが、使わずに済んで内心ホッとしているオールマイトである。

なお元々はヴィランが持つてているのは「核兵器」の予定だつたが、生徒視点で作戦を考えてみて断念することとなつた。ヴィラン側もヒーロー側も作戦立案のために必要な詳細な情報が多くすぎたのだ。さすがにこれでは作戦を立てる段階だけで授業時間が終わってしまう。

オールマイトの質問要求に対しては、芦戸が真っ先に意見を述べた。

「ヒーロー側に不利すぎませんか？　あとヒーロー側に大勝利条件つてないんですか？」

「ヒーローが圧倒的に不利なのはいつものことさ。あと大勝利条件もないよ。事件起きた時点で一度負けたようなものだし、ヒーローは民衆を守り続けていくお仕事だからね！」

ついでに言うとヒーローはこの事件だけ解決してお終いってわけじゃないから、後に残るような怪我をせず職務を完遂するのもとても大事だ！

とはいえることは演習だから、怪我についてはそこまで気にしないでいい。後方支援が万全な状態で職務に挑める場合を想定してくれればいいよ。

後はそうだな、ヴィラン側には積極的大勝利を狙つてほしいかな。

他に質問は？」

「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか？ 現状このクラス、人数が奇数なのですが？」

「コンビ及び対戦相手、人質役はクジだ。人数については……仕方ないしあぶれた子は一人でやつてもらおうか。ヒーローもヴィランもいつでもグループで行動してるわけじゃないし」

「適當なのですかつ！？」

質問をした飯田が驚きの声を上げる。それに対し博識な八百万が指摘を入れた。

「まだ出会つたばかりで誰と組んでも大差ない、と言うのはあると思います。ですがあ

えて言うならプロは他事務所のヒーローと急造チームアップをすることも多いそうで
すから、先を見据えた計らいではないでしようか」

「なるほど……そこまで考えてくださつてはいるとは。失礼致しました！」
「いいよ！ 他に質問はないかい？」

「ないなら始めようか！」

出席番号順に箱からクジを引いていく。

結果、このようにグループに分かれた。

Aチーム：結城友奈、麗日お茶子

Bチーム：轟焦凍、障子目蔵

Cチーム：爆豪勝己、八百万百

Dチーム：飯田天哉

Eチーム：芦戸三奈、青山優雅

Fチーム：砂藤力道、口田甲司

Gチーム：耳郎響香、上鳴電気

Hチーム：常闇踏影、蛙吹梅雨

Iチーム：尾白猿夫、葉隱透

Jチーム：切島銳児郎、瀬呂範太

「いきなり、一人……！」

「ま、まあ貴重な経験が積めると思おうぜ。しかし個性把握テスト一位、二位でコンビか」

「どつちも強『個性』でファジカルも強いし、対戦相手きつすぎじゃね？」

「U mm……」

この組み合わせにはオールマイトも唸る。

生徒たちは正確には把握できていないうが、万能性で最高の個人と単体戦闘力でトップの組み合わせだ。ヴィラン側として準備を整え待ち構えられると、誰も突破できない可能性が高い。Bチームの『個性』出力でトップの轟と戦闘力のみならず索敵要員としても優秀な障子のコンビならどうにかというところだろうか。

少し悩んだ末、オールマイトもこのコンビに対しては特別ルールを追加した。

「Cチームはヒーロー側で固定とする。また予想はできるだろから先に言うが、制限時間も厳しめにしようか。

じやあ最初の対戦相手の抽選だ！ 左手がヒーロー、右手がヴィランだ！」

オールマイトが箱に手を突っ込み、大きな動作で引き抜いた。
左手にはI、右手にはCと書かれたボールが握られている。

「あー、いきなり来ちゃったか。仕方ない、切り替えよう！ でえーと人質は……口田少

年だ。

ではヴィランチームは先に建物に入つてセッティングを！

5分後からヒーローチームが潜入を開始する！

尾白少年と葉隠少女はヴィランの思考をよく学ぶように！

これはほぼ実戦！ 保健室にはリカバリーガールもいるし、

怪我を恐れず思いつきり

な！」

戦闘訓練3

「CチームもIチームもお疲れ様！　早速だが講評の時間だ！」

まずはそれぞれ感想を言つてもらおうか！」

戦闘訓練終了後のモニタールーム。

そこには視聴していたオールマイトイクラスマイト、そして暗い表情をしたCチーム、Iチームの四人が揃つていた。

オールマイトイクラスマイトから問いかけに、八百万が口火を切つて話を始めた。

「……何もできませんでした」

「八百万少女は仕方ないさ。君は1階から、爆豪少年は5階から潜入り、速攻で人質の保護とヴィランチームの確保を狙つていたんだろう？　それなら位置次第で遭遇しないことだつてあるさ！」

それより最初にサーモグラフゴーグルを創つたのはグッドだ！　確保テープを巻けば捕まえたことになるルール上、葉隠少女への対策は必須だつたからね！　いい判断だと思うよ！」

「！　ありがとうございます！」

八百万の顔が明るくなつた。

次いで尾白が反省を始めた。

「……爆豪が5階の窓から入つてくるのは想定できていませんでした。そのせいで奇襲くらつてあつさりリタイアです」

「うん、”個性”で飛べるからと言つて”個性”無しで高所に登れないわけじやないからね。窓の桟があれば登るには十分だ。あの飛び方はインパクトが凄いけど、それに惑わされちやつたのが尾白少年の敗因だね」

個性把握テストにおいて、制御が難しそうな”爆破”でブレることなく空を飛ぶ勝己の姿は印象的だつた。尾白と葉隠もその記憶が強すぎたのか、勝己が飛ぶなら音がすると思つてしまい奇襲を受けることとなつたのだ。

「……授業だからつて氣イ抜けてた。手加減した攻撃じゃなく、多少やり過ぎても一撃で意識を落とすべきだつたわ」

「アレで手加減してたの!? すごい痛かつたんだけど!?’

「痛みで人質手放すように攻撃したんだから当然だ。だつてのに手放すどころか人質攻撃しやがつてクソが」

「アレはまあ、ただ負けるの癪だつたしね?」

3階から4階への階段で頭上からの不意打ちを仕掛けようと待ち伏せをしていた尾

白を捕獲した後、連絡がつかないことを葉隠が怪しむ前に勝己は速攻を仕掛けた。

だが扉を開けた部屋が外れだつたため、結局葉隠が気付いて人質を盾にする時間ができてしまつたのだ。

いくらヴィランチームが人質を傷つけられないルールとはいえ、追い詰められればなんでもするのがヴィラン。人質を奪還したいヒーローチームとしては強硬姿勢を続けるわけにもいかず、悔しさで表情を歪めながら八つ当たりのように爆発を起こした。

その爆破に紛れて手元に出したスーパーボールを打ち出し、部屋の壁で跳弾させ死角から葉隠を攻撃したのだ。

痛みで拘束が緩んだ隙をついて葉隠を人質から引き離そうとしたのだが、あろうとかこの女、人質を思いつきり殴つた。

人質役が頑丈な口田だつたためダメージはほぼなかつたが、設定だと虚弱な人物とうことになつてゐる。そのためオールマイトより人質に大怪我との判定が下つた。

訓練はヴィランは確保したものの人質が大怪我したため、かなり甘く見て引き分けとすることになつた。

「葉隠少女の言う通り、ヴィランには後先考えず「癪だから」という理由だけで全部無茶苦茶にしようとするやつがいる。授業でこれを体験できたのは幸運だつたね爆豪少年。現場に出てから遭遇するよりずつといい」

「……うつす」

「葉隱少女もだ。ヴィラン側を演じてみて、その心理を多少は理解できたと思う。君の“個性”は今回のような事態を防ぐにはうつてつけだ。これからも精進していってほしい」

「わかりました！」

「他の皆からは何か意見ないかな？」

「でしたら先生、このルールのままだとある程度戦った後、人質作戦で時間稼ぎするのがヴィラン側の安定手になってしまいます。設定を「人質」から「ヴィラン側の組織の重要な人物であり、ヒーロー側のターゲット」に変更してはどうでしょうか？」

「そうだね。人質作戦を一例くらいは見せたくてこのルールにしたし、変更しようか。他にはないかな？」

「……ないようだね。じゃあ次の組、行つてみよう！」

初戦で想定外が起こった以外は授業は順調に進行していった。

第2戦のDチーム対Aチームでは、Dチームの飯田がヴィラン側。

一人でターゲットを守りながら戦うことになつた飯田だが、隠れたり罠を仕掛けるこ

とが出来ないうえに“個性”を使えばエンジン音で居場所がばれるという詰みっぷり。しかも直線が短い室内では最高速を出すこともできない。一階から虱潰しに捜索する友奈と麗日に発見され、そのままターゲットもろとも確保されAチームの勝利となつた。

第3戦のBチーム対Hチームでは、Hチームの常闇、蛙吹がヴィラン側。

この戦闘ではBチームの組み合わせが良すぎた。音で素敵が行える障子と抜群の戦闘力を持つ轟を前に、足音を立ててしまふ常闇がまず確保された。足音を立てず、舌でターゲットを持ち上げられる蛙吹は懸命に逃げ時間を稼いだものの、氷結による気温の低下から動きが鈍り確保され、Bチームの勝利となつた。

第4戦はFチーム対Jチームでは、Jチームの切島、瀬呂がヴィラン側。

クラスでもトップクラスの体格を有する砂藤、口田コンビだが、確保テープを巻けばOKなルールではそれを活かすことが出来なかつた。瀬呂が肘から射出するテープに確保テープを張ることであつさりと二人の確保に成功。Jチームの勝利となつた。

第5戦は残りのEチーム対Gチーム。Eチームの芦戸、青山がヴィラン側を務めた。

途中青山が味方のはずの芦戸にマントを溶かされると、いうアクシデントこそ発生したもの、耳郎のイヤホンジャックによる索敵と上鳴の放電攻撃によつて順当に撃破されGチームの勝利で幕を下ろした。

「お疲れ様！」

大きな怪我もなく、皆真摯に取り組んだ！

初めての授業とにしちゃ皆上出来だつたぜ！」

「相澤先生の後でこんな真つ当な授業……何か拍子抜けというか……」

「真つ当な授業もまた私たちの自由さ！」

しかし真つ当な授業か……！

教師としては新人な私にそれができるか不安だつたんだ！ 何これ凄く嬉しいな!!」

オールマイトの本気で嬉しそうな表情で場の空気が一気に緩んだ。活躍できないまま負けてしまった者も、勢いに飲まれて笑っている。こういうことが出来るのもオールマイトの強みの一つなのだろう。

「じゃあ今日の授業はここまで！ 皆着替えて教室にお戻り！ コスチュームを置き忘れないようにね！」

学級委員長選挙

雄英高校の始業から三日目、オールマイトが雄英の教師に就任したという情報がついに公開された。

「この情報は全国を驚かせ、連日マスコミが雄英高校に押し寄せる騒ぎになつていた。
「オールマイトの授業はどんな感じですか!?」

「『平和の象徴』が教壇に立つてているということで様子など聞かせて!」
「教師オールマイトについてどう思つてますか!?」

正門の前でマスコミが集まり、登校する生徒たち——特にマスコミ対策の授業をまだ受けていない一年生——を質問攻めにしていた。

嬉々として質問に答えている者も何名かいたが、大抵はどう答えていい物か困り果てなかなか進めないでいる。

それを遠目で確認し、勝己はげんなりとした表情を浮かべた。

「クツソウゼエのがいるなあ。あいつら遠慮知らねえのか

「知つても放り捨てるんだろうね……」

ヘドロ事件の後、勝己同様にマスコミに粘着された友奈も嫌そうな顔をする。

一年近く経つた今でも勝己と友奈の顔を覚えている人がいるくらいの大事件だつたので仕方ないと言えば仕方ないのだが、あまりに酷かつたものだから寛大な友奈ですら関わるのを嫌がるようになつていた。

「仕方ねえ。突つ切るぞ。質問は全部無視だ」

「うん！」

正門に近づくとマスクが群がつてくる。非常にうつとおしいが所詮は一般人。勝己が人垣の間に肩を割り込ませ、友奈の手を引いて無理やり進めば突破できた。

それでも追いかけてくるしつこい奴はいたが、勝己と友奈が正門を通り過ぎると四重の障壁が正門を塞ぎマスクを遮断した。

「こういう時は便利だな雄英バリアー」

「危ないからあんまり使いたくないけどね」

雄英バリアーとは学生証や通行許可IDを身に着けていない者が門をくぐろうとするとき作動するセキュリティのことだ。校内のいたるところにセンサーがあり、ある程度は侵入者を自動で撃退する仕組みになっている。

まあある程度といつても正門の時点では手足を挟んで千切れたりとか起こりうるレベルなのだが、これでもこの時世だと気を使つてゐる方なのである。「じゃさつさと行くか。今日ホームルームと一限目連続してやるらしいしなんかある

ぞ」

「なんだろうね。テストとかじゃないといいなー」

「今日は君らに学級委員長を決めてもらう」

「「「「「学校っぽいの来たーーーーッ!!」」」

安堵で息をつくとともに、歓声が起ころる。

普通科などでは学級委員長といえば雑務に近いが、ヒーロー科では「集団を導く」というトップヒーローの素地を鍛えられる役割だとされている。自己研鑽の為にやつておくべき役職であり、国内最難関の雄英でクラスのまとめ役をやつたという実績はプロになつても影響を及ぼすのだ。

とはいへ実態は「率いられるより率いたい」「まとめ役をやりたい」と思うような人間がヒーロー科を志望するというだけかも知れないが。

「委員長！ やりたいですソレ俺!!」

「ウチもやりたいス」

「ボクの為にあるやつ☆」

「リーダー！ やるやるー！」

Aクラスでも例年同様自薦が相次ぐ。勝己も皆と同様に挙手していた。

そんな中、一際大きな声が上がつた。

「静肅にしたまえ！」

“多”を牽引する責任重大な仕事だぞ……！

「やりたい者」がやれるモノではないだろう!!

周囲からの信頼あつてこそその聖務……！

民主主義の則り真のリーダーを皆で決めるというのなら、これは投票で決めるべき議案!!」

「そびえ立つてんじやねーか!! 何故発案した!!!」

発案者の飯田も立候補したいのか手を大きく挙げていた。それでも正しいと思う方法を提案したことを見直すべきなのだろう。

そして一人提案者が出了ので、友奈も続けて意見を発した。

「ヒーロー科つてこれからも普通科と入れ替わりがあるんだよね? それなら除籍になりますにくそな人から投票で決めるのがいいんじやないかな?」

「あー……確かに学級委員長除籍でまとめ役不在はまずいわな」「なら推薦二人と爆豪か? この三人以外で投票やつて、一番多かつたのが委員長、二番が副委員長つて感じで」

「せんせーコレでいいですか?」

「時間内に決まるんならなんでもいいよ」

で結果。

「爆豪12票、八百万4票、轟0票。決定だな」

「つしやあ！」

「うーん、悔しいですがあの後ですし仕方ないですね」

「……」

勝闘を上げる勝己と、若干悔しそうな八百万、無関心を貫く轟をクラスメイトが眺め

る。

轟は委員長をやる気は初めからなかつたようなので文句なさそうだが、飯田はこの結果に疑問を感じたようだ。

「えらく票が偏つたが、何かあつたのかい!? 僕には口の悪さが目立つたのだが!?」「そりやお前……つてそういうや飯田初日終わつてすぐ帰つたつけ。後で説明してやるよ」

「うむ、頼んだぞ切島君!」

この後、飯田は気が緩んだ時の一人称が「僕」なことでクラスメイトからいじられることになるのだが、勝己も友奈も見かけなかつたので省略する。

相澤はまとめ役が決まつたのでいそいそと寝袋に收まりながら、委員長と副委員長に最初の指示を出した。

「じゃあ委員長、副委員長、残りの委員決めよろしく。俺はその間寝る」「それでいいんですか先生?」

「こつちで決めていいってんだから、それでいいじゃねえか。問題になりや丸投げした先公のせいにすりやいいんだし、さつさとやるぞ。」

他の委員は立候補制でやるぞ! ただし引継ぎに備えてA組用の活動記録を付けさせる! 俺がチエツクして弾いたときはやり直しだ! 異論は認めねエ! それでも

やりてエ奴ア手工擧げろ!』

U.S.J.ルーム襲撃事件1

委員会決定から数日後、PM 0:50。

週に2回ある実習の時間だ。まだ雄英内の設備については説明を受けていない場所も多いため、教室で授業は始まる。

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう一人の三人体制で見ることになった。

内容は災害水難なんでもござれ、レスキュー
人命救助訓練だ」

相澤が「RESCUE」と書かれたプレートを掲げる。

それを見て人助けには不向きな“個性”持ちの上鳴が厳しそうな顔をした。

「レスキュー……今回も大変そうだな」

「ねー！」

「バカおめー、これぞヒーローの本分だぜ!? 嘴るぜ！ 腕が！」

「水難なら私の独壇場ケロケロ」

上鳴に芦戸が同意したが、逆に切島と蛙吹はやる気満々で答えた。

だが話の途中で私語をされて相澤は不機嫌そうだ。ギロリと睨みつけられ、四人とも

背筋を正して話を聞く体勢に戻った。

「今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。」

訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗つていく。以上準備開始」
相澤は遅れた者がいれば置いていくタイプの教師だ。皆、手早く準備しようとコスチュームを担いで更衣室へ向かつた。

勝己も更衣室に着くなりコスチュームを広げ、取捨選択を開始した。

「コスチューム、正直スーパーボール入りの籠手が邪魔だ。完全に戦闘用だし、救助活動するならない方がいいな。」

だが先公が三人体制に『なつた』って言つてたし、こないだのこともある。片方だけでも持つてくか。邪魔なら捨てて授業終了後回収すりやいい」
つい先日、雄英高校に侵入者が現れた。

結局のところ侵入したのはただのマスコミだつたとのことだが、一マスコミ程度に雄英バリアーを突破できるとは勝己には思えなかつた。教師たちは何も言わないと、きな臭い事態に発展しているのだろう。

そこへ本来の予定から変更しての三人体制での授業。何か起ると警戒はしているが、何が起るかはわからぬいため一応の措置といった感じだと勝己は予想した。

「(友奈と――八百万辺りには一応伝えとくか。他は知つても無駄に混乱するだけだ。
あの二人が知つてればクラス中が混乱することあねえだろ)」

考え方をしながらテキパキと準備を進める。これが杞憂なら普通に授業があるので。
N o. 1ヒーローとなるため全てを自らの糧にしないといけない。遅れて置いてけば
りを食らうなど御免だつた。

「すっげー！」

「U S J かよつ!?」

演習施設に到着すると、それを見たクラスメイト達が歓声を上げた。

実際に体験すれば地獄なのだろうが、遠目に見る分にはまるでテーマパークの^のとき施設だったのでそんな感想でも仕方ないだろう。

「水難事故、土砂災害、火事 e t c.

あらゆる事故や災害を想定し僕がつくった演習場です。

その名もウソの事故や災害ルーム！」

「「「「（U S J だつた！）」」」」

宇宙服のようなコスチュームに身を包んだ教師の解説に、生徒たちはまさかそのままとは思っておらず驚愕した。

また一部の生徒は説明よりも教師の方に興奮し盛り上がっていた。

「スペースヒーロー 「13号」 だ！

災害救助でめざましい活躍をしてる紳士的なヒーロー！ 私好きなの13号！」

「わかる！ かつこいいよね！」

「13号、オールマイトは？ ここで待ち合わせる予定だが」

盛り上がる生徒をよそに、相澤はこの場にいるはずの同僚について13号に尋ねる。

その結果は芳しくないものだつたようで、何か言いながら指を三本立てていた。

周りにその意味はわからないが、勝己と友奈は理解した。オールマイトはおそらく活動制限時間の3時間をほぼ使い切つてしまつたのだろう。事件が起こつていていたのでつい駆けつけてしまつたのだろうが、それで教師としての職務を放棄している辺りオールマイトにヒーロー以外の仕事をする適正はなさそうだ。

「仕方ない。始めるか」

「そうですね。では始める前にお小言を一つ、二つ……三つ……四つ……」

「「「「（増えてる）」」」

長話が来そุดと生徒たちは身構えたが、すぐに相澤が寝袋に入ろうとしないのに気づいた。どうやらこれは13号なりの冗談の類のようだ。

冗談に気付かれた13号はカウントを切り上げて本題に入つた。

「えー皆さん」存知かとは思いますが、僕の“個性”は“ブラックホール”。どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます」

「その“個性”でどんな災害からも人を救い上げるんですよね！」

「ええ。

しかし簡単に人を殺せる力です。ヒーロー科に入学できた以上、皆さんも同様の力を持つていいことでしょう。

超人社会は“個性”的使用を資格制にし厳しく制限することで一見成り立つてゐる
ように見えます。

しかし一步間違えば容易に人を殺せる“いきすぎた個性”を個々が持つていてること
を忘れないでください。

相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦
闘でそれを人に向ける危うさを体験できたかと思います。

この授業では心機一転！

人命の為に“個性”をどう活用するかを学んでいきましょう。

君たちの力は人を傷つけるためではなく、救けるためにあるのだと心得て帰つてくだ
さいな。

以上！ご清聴ありがとうございました！

「プラボー！ ブラーボー！」

「ステキー！」

生徒たちから拍手が響く。友奈も大きく拍手していたし、勝己も一応拍手していた。
こういう考え方もヒーローには大切と理解はしているのだ。

拍手がやむと、手すりに腰かけていた相澤が授業を開始しようとした。

「そんじやあますは……」

開始しようとしていきなり止まつた。生徒たちも相澤が注視する方を見てみると、何やら黒いモヤのようなものが発生している。

モヤは広がり、中から人影が現れた。

「一塊になつて動くな！」
血相を変えた相澤が、初めて聞く大声で生徒たちに指示を出す。

「13号！」 生徒たちを守れ！

アレは敵ガイランだ!!」

U.S.J ルーム襲撃事件2

「ヴァイラン敵ンンンッ！」

バカだろ？

ヒーローの学校に入り込んでくるとかアホすぎるぞ！？」

相澤の言葉を受けて生徒たちに動搖が走る。

だが一部の生徒は落ち着いたまま対処を開始していた。

「先生！ 侵入者用センサーは!?」

「もちろんあります！ ……ですが機能してないみたいですね。外と連絡も取れませ

ん」

八百万が13号に尋ねるが、いい返事は返つてこない。どころか連絡用の機器を操作しても繋がらないままだつた。

「現れたのはここだけか学校全体か……。何にせよセンサーが反応しねえなら、向こうにそういうことが出来る“個性”がいるってことだな」

「雄英全体つてどれだけ戦力インだよ？」 教師はもちろん、上級生なら上位のヒーローとだつて戦えんぞ。んな大組織目立たずにいられるわけがねえ。

何年もなかつたつーマスゴミの侵入騒動もこないだあつた。アレに乗じたか起こさ

せたか、アイツらも侵入して情報掴んで決行つて感じだろおな。なら十中八九ここだけだ」

轟と勝己が所見を述べる。

オールマイトがヴィランの組織に単身突撃→壊滅を繰り返したこのご時世、大規模なヴィラン組織など残つていないし組織的な犯罪自体もかなり減つてゐる。そんな状況で学校全体に戦力を送り込める大組織がマークされていないわけがない。

そのうえ状況も校舎から離れた訓練施設に少人数が入つていてタイミングで現れるなど、明らかに何らかの目的をもつて行われた計画的な奇襲だ。

ならばヴィランはここにいる連中のみと考えるのが妥当。

相澤もこの予想に異論はないようだ。

「13号避難開始！ 奇襲に来たのがここだけなら、時間をかけると脱出できなくされる可能性がある！」

「上鳴、お前も“個性”で連絡試せ！ 一度繋がらなくても試し続けろ！」

「ツス！」

「先生はどうすんの!? 一人で足止めする気!？」

「問題ない。数が多いだけでやられるようじや雄英の教師は務まらん。

13号任せたぞ！」

言葉と共に相澤はヴィランが現れた広場の方へ、階段を飛び降りて突っ込んでいく。プロヒーローでもある教師が問題ないと言つたのだ。なら生徒は教師を信じて早々に避難し、救援を呼ぶことが最大の支援になるだろう。

勝己個人としては戦いたい。いくら学生の身とはいえ、危険な役割を他人任せにして逃げるなどやりたくない。

だがそれを実行すれば「問題ない」と言つてのけた相澤を軽く見ていることになるし、勝手な行動で統率を乱して避難を邪魔するわけにはいかない。友奈、八百万と共に13号に協力してクラスをまとめあげ、出入り口へと急いだ。

「させま「邪魔だ死ねえつ！」

行く手を遮ろうと転移して現れたモヤを、ノータイムで先頭を歩いていた勝己が爆破する。

ヘドロヴィランの時もそうだったが、不定形の相手だと拘束も撃破も難しい。おまけに現れ方からして“個性”はモヤのワープゲートを作ることだろう。最早厄介というレベルではない。

13号の“ブラツクホール”なら殺す気なら対処できるだろうが、対処が終わるまで足止めを食らうことになる。更に言うと、13号の“ブラツクホール”は殺傷性能が高すぎる。万が一ワープゲートで13号の手元と生徒の付近を繋がれれば、多数の死者が

出ることになるだろう。

ならば何かされる前に勝己が“爆破”で吹き飛ばして進路からどかし、避難を優先するものが現状の最善だ。もつといい案もあるのかも知れないが、この場合は巧遅よりも拙速でがいいだろう。

だが現実は勝己の予想を下回った。

「ぐあつ!?

「ああ、!? 勝手口が前に出て来といて実体あんのか！ ならこのままくたばれや！」

勝己の爆破の威力が想定以上だつたのか、モヤを吹き飛ばされるだけでなく実体の方も吹き飛ばされ転倒した。単独で足止めをしに来た以上、かなりの実力者かと思つたがただの自信過剰だつたようだ。

ついでに言うと人手不足もあるのだろう。普通なら転移系“個性”持ち自身が足止めするんじやなく、手駒を転移させて足止めさせるはずだ。それをやらないところを見るに、強いのはいても層はかなり薄いのだろう。相澤が「数が多いだけなら問題なし」と言つていたのも納得だ。

そしてヴィランが晒した隙をむざむざ見逃す勝己ではない。再度の爆破で残つたモヤも吹き飛ばし、スーパーボールを叩き込んで怯ませる。

怯んだ間に距離を詰め、念入りに蹴る。本来ならグラントリノに教わつた首への蹴り

で昏倒させるところだが、その首から上がモヤになつてゐるため何度も胴を蹴り付けた。

「反撃を許さぬ速攻を受け、モヤのヴィランは何か言う前に意識を失つた。
「爆豪君！ 先走り過ぎです！」

「遅いよかマシだろが！ 反省文は後で出す！ 避難誘導続けてくれ。いつ意識戻るか

わからんねえし、俺アこいつ引きずつてくる」

「——ツ、今回だけですよ！ 皆さん、早く避難を！」

結果的には問題なかつたため、叱る時間を惜しんだ13号が避難誘導を再開する。U
S J ルームから離れた時点で連絡も可能になつたため、救援を呼びながらの移動だ。

U S J ルームの外にはヴィランもおらず、生徒たちは安全域まで避難し、一人の怪我人も出さず他の教師達と合流することが出来た。

「僕はU S J ルームに戻り、先輩の援護に向かいます！ 君たちはこのまま校舎まで避
難を！」

「よくやつたぜ学生共！ 後はプロに任せとけ！」

モヤのヴィランを教師に引き渡し、学生たちの実戦は幕を下ろした。
後は教師を信じ、待つだけである。

U S J ルーム襲撃事件3

U S J ルーム襲撃事件の翌日、雄英高校は臨時休校となり、プロヒーローでもある職員たちは警察と共に後始末のための会議が行われていた。

「えー、では先日の事件の結果から。

主犯の死柄木という男とワープゲート——黒霧という男、主力と思しき脳無という男ですが、無事確保。バラバラに搬送し、どこにいるかも知られぬよう拘禁しています。いずれも無戸籍かつ偽名……個性届を提出していない裏の人間でした。

その他の72名のヴィラン、全員検挙出来ました。

こちらは路地裏に潜んでいるような小物ばかりで大物もいませんでした。

後は校舎を隅々まで捜査させていただきましたが、危険物や発信機等も見つかっていません。どころか侵入した形跡すらありませんでした。

なので今回の事件の実行犯は全て逮捕出来た、ということになります

「まあU S J ルームにいたやつは取りこぼしは出さなかつたはずだしな。

脳無つてやつはもう暴れてないのか？」

教師の一人が警察を代表して説明に来た塚内に尋ねる。

脳無はオールマイトに迫る身体能力を持つていた。あれがまだ暴れるつもりなら生半可な拘束は引きちぎって悠々逃走を成功させただろう。

先日戦った時はオールマイトが相手と手四つで組み合い、そこにミッドナイトが“眠り香”を放つて即座に昏睡させることが出来た。“平和の象徴”オールマイトと殴り合いができるよう改造されていたが、それ以外への対策を盛り込めるほど余裕がなかつたためだ。故にヴィラン側の襲撃前の想定では他の教師陣が到着した時点で撤退するということになっていた。肝心の黒霧が既に捕まっていたので出来なかつたが。

結果、教師たちに怪我人は一人も出なかつた。それでも「オールマイトと力比べができる」という時点で脅威的だ。侮れる者はいなかつた。

「ええ、異常なほど無抵抗でおとなしいです。ただこちらからの問い合わせに全く反応しないので口がきけないどころか、意識そのものがないのではないかと。

主犯の死柄木曰く、彼は対“平和の象徴”用の『改人』らしいです。オールマイトとも戦える身体改造がメインなのでしょうが、操作しやすいよう意識を消去するような改造を受けていてもおかしくありません」

「……胸糞悪い話だな。それで助かつたとは言えよ」

「全くです。一刻も早くこの改造を施した技術者、そして黒幕を捕えなければなりません。

幸い死柄木は顔に着けていた手にやたら執着しているらしく、武装解除のため没収しようとすれば取り乱して色々と話してくれます。近々裏にいる者の情報も集まり、裏を取れるかと。

その時は協力お願いします

「もちろんだよ！ 我々は教師だが、同時にヒーローでもあるからね！ ヴィラン退治を断つたりしないさ！」

校長が代表して塚内に答えた。

雄英高校のヒーロー科の教師陣は皆優れたヒーローだ。一人の例外もなく、校長の言葉に賛同した。

とはいえたまだ疑問も残っていたようで、ある教師が周囲に問い合わせた。

「……しかし黒幕は何がしたかったんだろうか？

今回の襲撃事件、上手くいけばオールマイトを襲えたかもしれないが殺せたとは思えない。

ヴィラン側は貴重な転移能力者を失い、改造人間を作る技術を持つてることがばれてヒーローに目を付けられただけだ。我々だつて襲撃を受ければセキュリティの強化を行うから、二度目の襲撃を狙うことだつて難しくなる。

ヴィラン側にメリットがなさすぎる。

俺には何がしたかったかさっぱりなんだが、想像できるやつはいるか？」

全員が黙り込む。皆ヴィランの思惑がさっぱり理解できなかつたためだ。

あわよくばオールマイトを殺したいという狙いはあつたというのは当たつてゐるが、脳無がろくに戦闘を行わないまま眠らされたので“ショック吸収”と“超再生”的複数“個性”持ちなどとはまだ知らないのだ。そのため周到な準備を行う黒幕がこの程度の戦力に全賭けなどするだろうか、という思いが教師たちにはあつた。

また今回の実行犯は皆あつさりと捕まつたので、今回の襲撃犯は鉄砲玉だと認識されていた。撤退要員の黒霧が前に出てこなければ違つたかもしれないが、早々に出てきて鎮圧されたのでこう認識されたのだ。

なので黒幕が死柄木の成長を願い、失敗を経験させるために襲撃させたと思ひ至れる者はいなかつた。

黒霧が撤退すらさせられないとは想定していなかつたため、死にかけの体に鞭打つて死柄木を捜索しているなど欠片も想像できないだろう。

「考へても結論は出そくにないかな。

ではこの話題はここまで！

セキュリティ強化の内容について詰めていくよ！　草案は考へてきたから、修正案があれば言つておくれ！」

「お疲れ様オールマイト。慣れない会議の感想はどうだい？」

「凄く疲れたよ。専業ヒーローの時も目先の事件優先で、会議とかは「出た結論に従う」とか「警察側の要請に応じる」とかですっぽかすことが多かつたからなあ」

「ははは、これから教師をしていく以上、慣れないと駄目だよ。

それでだ、オールマイト。実は君には追加で伝えないといけない情報があつてね」

「？ さつきの会議で話しちやマズイ内容なのかい？」

「ああ、確定情報でもないしまだ早い。だが君には知らせておくべきだと判断したんだ。

死柄木から『オール・フォー・ワン』の名前が出た。そいつから教育を受け、戦力を

もらつて今回の事件を起こしたらしい」

「?? あいつは確かに私が仕留めたはず……ッ!?」

「らしいね。だが君も言っていたように、アレは何でもありだつたそうじやないか。なら生き残っていてもおかしくない。

偽名やはつたりの可能性もあるが、警戒は怠らないでくれ」

「……わかった。これから荒れそうだな……」

オール・フォー・ワンの後継者を逮捕し荒らす余裕など無くならせたことを自覚しないまま、『平和の象徴』とその友である警官は予想よりはるかに遅れて来る動乱に向けて覚悟を決めた。

体育祭前 1

「お早う」

「相澤先生無事だつたんですね！」

「情報来ないんで心配しましたよ！」

「事後処理とか色々あるし、全員無傷でヴィランも残らず逮捕出来たから今後の予定も変更なしだからな。さすがに授業できないうほど怪我してれば連絡入つたぞ」

U.S.J. ルーム襲撃事件の事後処理のための臨時休校明けの朝、相澤は相変わらずぼさぼさの髪に無精ひげ、寝袋というスタイルで現れた。

全員無傷でヴィランも逃がさなかつたと聞いて、生徒たちは色めき立つ。数が多いだけなら何の問題もないというのは誇張でもなんでもなかつたのだ。厳しくおつかない教師としか見てなかつた生徒たちの視線に尊敬の色が色濃く表れた。

「まあ俺のことはどうでもいい。

それよりまだ戦いは終わつてねえ」

「戦い？」

「まさか……！」

「雄英体育祭が迫つてゐる！」

「「クソ学校っぽいの来たああつ！」」

半数近くの生徒が歎声を上げた。残る生徒は除籍のかかつた抜き打ちテストラッシュなどでなくてホツと一息ついていたが、大イベントの告知に興奮も混じつてゐる。「いくら全員捕まえたつて言つても、ヴィランに侵入されてすぐ開催つて大丈夫なんですか？」

「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す……つて考えらしい。実際警備も例年よりずっと増やすらしいからな。

何より雄英の体育祭は生徒達にとつて最大のチャンス。

「ヴィランごときで中止していい催しじやねえ」

それもそうか、という感情が生徒たちに広がる。

なにせ雄英体育祭は日本屈指のビッグイベントの一つ。超常黎明期以降は規模も人口も縮小し形骸化したオリンピックに代わる、と言われるイベントだ。

一年生のそれはあくまで添え物で、メインは資格習得間近の三年生とはいえバカにはできない。一年生の方もスカウト目的のプロは見に来るし、年一回、計三回だけのアピールチャンスなのだ。ヒーローを志すなら外すわけにはいかないイベントである。

「卒業後はプロ事務所にサイドキック入りが雄英生の進路としちゃ一番多い。
相棒

当然名のあるヒーロー事務所に入つたほうが経験値も話題性も高くなる。

ここで目立ちプロに見込まれればその場で将来が拓けるわけだ。

開催は五月第一週の土曜日、あと2週間少々つてとこだ。気合い入れて行けよ」

「気合い入れんのはいいが、俺の特訓相手はどうなつたんだよ。

申請してから一週間以上経つてんぞ」

相澤の激励に、痺れを切らした勝己が口を挟む。

運動場やグラウンドの使用許可こそ下りているものの、特訓相手が未だに選別されていない。

普通科はC、D、E組の三クラス、各40名。その中から有用な“個性”を持つ者——やる気がなければ勝己の訓練でふるい落とされるのでそつちは条件なし——を選んで声をかけるだけだ。

ヒーロー科の予備として面接を通つた連中なので条件を満たす者が多いとは言え、入試と違つて母数が多くすぎるわけではない。選別にここまで時間がかかるとは想定外だつた。

「それか。実は一昨日にお前に話通してから進める予定だつたんだが……まあいいか。今話そう。

まず爆豪、お前の真似してグラウンド使いたいって申請が多い。手透きの教員はそん

なに余つてねえし、学級委員長として全員分まとめて出せ。一グループ扱いで監督員も少人数で済ませる」

「それはわかった。他は?」

「サポート科からも訓練に参加させてほしいって話がパワーローダーから来てる。ヒーロー科の実技試験は持ち込み自由だが、金銭的な問題で用意できず不合格つて連中も多い。そういう連中はサポート科に進んで自作のサポートアイテムを用意し、体育祭で目立つて移籍を狙つたりもするんだ。大半はサポート科のテストパイロット役で固定されちまうがな。」

そいつらも入れてやつてほしいんだが、そうなると人数がさらに増える。一グループだから教員は最悪一人でもいいが、指導もするとなるととてもじやないが手が足りん。

なんで2年、3年で余裕があるやつらに声かけて人手を集めのつもりだ。

去年俺が担任したクラスなんかはほぼ13人元普通科、4人元サポート科だから協力は得やすいとは思う。一昨年のも似たようなもんだしな。

これをやると結構な大事になるし、お前が途中で抜けるのは認めづらくなる。それで

も進めて問題ないな?」

い。一応は疑問形だが、ほぼ承諾確認のための質問だ。拒否されることは想定していな

雄英の校風は「自由」だが、それには責任も伴うということだろう。自分で始めたことで他人に夢だけ見せ、無責任に投げ出すことなど逃げることは許さないと言いたげな目だ。一般入試を落ちてもまだ雄英を諦められないような連中を誘つたのだからこうなることも想定できただろう、と言うのもあるかもしれない。

とはいえ勝己にとつては問題ない。逃げる気はないし、こういう緊張感のある空気も嫌いではなかつた。

「問題ねエ。それよか上級生借りて大丈夫なのかよ？ 2年は仮免試験近いんだろ？」

「直前で詰め込み教育しなきやいけないほど雄英の教育の質は低くない。そつちは心配ない。」

じやあこの方向で話詰めとく。明後日にはいけるはずだ。名簿とかは放課後に職員室に取りに来い。

長引いちまつたが朝のH.R.はここまで。一限目の用意始めろ」

体育祭前2

昼休み。

小休憩中は大人しかった生徒たちも、興奮冷めやらぬ様子で一か所に集まつて話し込んでいた。

「なんだかんだテンション上がるなオイ！」

活躍して目立ちやプロへのどでけえ一步を踏み出せる！」

「ああ！ ヒーロー志望として燃えないわけがないな！」

「私もー！ 子供のころからの憧れの舞台だし、やっぱ目立ちたいよねー！」

ヒーローを志す少年少女にとって雄英体育祭は特別だ。3年生の体育祭が超常黎明期以前のオリンピックなら、1年生のそれは甲子園だろうか。それくらい憧れるイベントなのである。

だがこの雰囲気に乗れない者も当然いた。

「私は透明人間として目立つべきか目立たずにいるべきか悩むところなんだよねー。好成績狙えば目立たない感じになっちゃうし、目立とうとしたら強みなくなっちゃうからさー」

「おおう、割と深刻な悩みだな……」

葉隠の悩みに一同困る。あちらを立てればこちらが立たず、どちらを選んでも問題が残る悩みだからだ。目立たない行動をしても問題ないくらいの順位が取れる身体能力があれば良かつたのだが、個性把握テストでは峰田に次いで下から二番目。これでは楽観のしようもない。

皆が黙つてしまつた時、友奈が単純明快な意見を出した。

「私はカメラとか気にせず全力で挑んだ方がいいと思うな！　だつてそつちの方が絶対楽しいもん！」

「お、おー。友奈ちゃん的にはそんなもんなの？　体育祭つて大イベントだよ？」

「？　私はそんなものだと思うよ。やりたいことやりたいようにやつて、心から笑つてる人は強いんだから！　ね、かつちゃん」

将来を左右する大イベントで楽しさを優先する友奈に葉隠は結構押されている。周りも迷うことなく楽しさ優先な友奈に若干引き気味だ。

友奈はその空気に気づくもスルーして、勝己に話を振つた。

「まあそうだな。渋々やるよか楽しんでた方がいい結果は出る。だから俺は本当にやりたくないことはやらねエ。結果に繋がらねえからな。

だけどそれ以前に氣にすることあンだろうがアホか」

「アホとはなんだー！ そこまで言うからには理由あるんだよねツ!? 教えて!!」
 「プライドねえのかてめえ？」

簡単なこつたる。観客とスカウトは何を見に来んだ？ 僕らが“個性”ガンガン使つてガチでやりあつてるとこ見に来んだろおが。だつてのに目立つの重視でふざけてる透明人間いたら白けるわ」

「あ、ああーっ!! それはマズイ！ やらかしたら将来詰むうつ!??」

雄英体育祭は大イベントだ。功績は勿論、失態も全国放送で流れてしまう。

“個性”を制御しきれず全裸を晒すくらいならまだ「未熟」で片づけてもらえるが、ふざけた言動や奇抜な髪型などで悪目立ちしてしまつたら目も当てられない。初回で付いた悪評はなかなか消えることなく汚点として残るだろう。

「鼻眼鏡とか考えてたけど無し！ 真つ当に行こう、真つ當に！」

「……考へてた日立ち方鼻眼鏡だつたのか。どつちみち普通にやつた方がましだつたっぽいな」

葉隠の目立つための策を聞いて真剣に聞いていた男子たちの空気が弛緩する。

そんな中でも友奈はマイペースを崩すことなく、次の案の相談を女子たちに持ち掛けていた。

「でもさ、競技以外では目立つていいんだよね？ たしかそういうのあつたはずだし」

「ええ、全員参加のレクリエーションがあつたはずです。ですがアレはルールで動きが決まつていていますし、その範囲内で変わつたことをした程度では目立てないのでですか？」

「だよねー。去年の放送だと差が大きくならないように“個性”に制限付いてるのかつたし。ヒーロー科としてはいまいち？」

「んん／なんかないかなあ？」

「なんかやんならさ、チアリーダーとかどう？ 衣装揃えて応援したら結構目立つと思うぜ」

「上鳴、あんたそれ自分が見たいだけじゃないの？」

女子の相談に上鳴が軽い調子で割つて入る。

下心を隠そともしていなかつたので耳郎に突つ込みを入れられたが、他の女子たちの反応は割と良かつた。

「あ、それ良さそう！ 透ちゃんと動き大きくて動作で感情表現上手だし、透明だから衣装も目立つよ！」

「私もそういう得意ー！ 案外いいんじゃない!?」

「確かにレクリエーションの間中やることあるわけじゃないし、いいじゃない!! やつたろ!!」

「ケロケロ、透ちゃんこういうの好きね」

「あの、私、そういうのはちょっと……」

「私も……」

「えー、ヤオモモも耳郎ちゃんも一緒にやろーよー。ほら、盛り上げ上手もヒーローの資質の一つだつて！ 麗日もなんか言つてやつて！」

「……アピールチャンスは一つも逃しちゃダメ！ 皆で頑張ろう!!」

「う、麗日？ 顔が全然麗らかじやないよ……？」

否定的なのが二人いるが、八百万は押しに弱いようだし、耳郎は服装が嫌なだけでヒーロー志望だけあつて目立つのが嫌いなわけではない。女子の話し合いはチアリーだーやる方向でまとまりそうだ。

「俺ら男子はどうすんだ？ オイ尾白、砂藤、なんか言いたいことありや言え」

「うえつ！ なんで俺ら？」

「テメエらは目立てなさそだから親切で言つてやつてンだ。活躍しても流されそうなモブ面しやがつて。影薄いんだよ」

「尾白はともかく俺は濃い方だとと思うんだが……」

「俺はともかくつて酷くないか……？ それに顔は言うなよ！ どうしようもないだろ！」

「タラコ唇なだけじやねエか。『個性』も性格も技能もヒーロー科としちゃ特徴がねエ
うえに華がねエんだよテメエらは。このまま埋もれたくないきや俺が協力してやる気にな
つてるうちになんか考えとけ」

考えた結果、結局男子は特に何もやらないことに。

尾白曰く、実力をアピールするのに専念したいとのこと。放課後、一緒に特訓をする
ことが増えました。

体育祭前3

「話し込んだじゃつたねー。食堂まだ席残ってるかな?」

「時間結構経つたし、むしろ食べ終わつた奴いなくなつて空いてるんじやね?」「こういうときお弁当組だと便利ね。好きな時に食べられるもの」

八百万と耳郎が押し切られ、話がまとまつたところで一旦解散となつた。午後からも授業があるので、空きつ腹でいるわけにもいかない。

勝己と友奈も食堂へ向かおうとしたところ、オールマイトが角から現れた。

「爆豪少年と結城少女が、いた!

「乙女や!!!」

巨躯にふさわしからぬ動作とかわいらしい包みの弁当箱に麗日が噴き出す。
勝己と友奈は断る理由もなかつたので、購買で弁当を買ってオールマイト専用の部屋と化しつつある仮眠室に向かつた。

「急に言つて悪かつたね。クラスメイトと約束とかあつたかな?」

「いえいえ、大丈夫です。それで今日はどうしたんですか?」

「体育祭について話をしておきたくてさ。まず雄英体育祭のシステムについては知つて
いるね?」

「はい。

「学年ごとに別れて全生徒が各種競技で予選をやつて、勝ち抜いた人が恒例の一対一の
試合を行う学年別総当たりですよね。毎年テレビで見てました」

「そう! それが全国に放送される大イベントだ!! つまり全力で自己アピールできる
!!!

「こういう時、爆豪少年は逃がさずきつちりアピールしてくれると信じてるよ!」

「はつ、たりめえだ! 僕が取るのは完璧な一位! それ以外ありえねエ!!」

「その意気だ! とはいえ私は他の子も応援させてもらうがね! 君と張り合えるなら
“^わ^た^し^し平和の象徴”を継ぎ、“^わ^た^し^しN.O.・1ヒーロー”を超える逸材ってことだ! そういう
子はたくさんいた方が社会の未来は明るい!!」

「跳ねのいい踏み台が出てくんなら俺としても大歓迎だ! それでこそ俺が勝ちどる一
位に価値が出るつてもんだ!!」

H A H A H A H A H Aと大笑いする勝己とオールマイト。

一しきり笑った後、オールマイトは急に真面目な顔をして友奈を見た。

「でだ、結城少女はどうする? 言つた通り体育祭は全国が注目する大イベント。しか

も本戦は戦闘系だ。チャリティーや救助活動をメインにしたいなら、目立ちすぎると人口になつた時に知名度が邪魔になるかも知れない。

ゆつくり習得したし訓練する場所もなかつたから入学時は大したことなかつたけど、雄英の設備を使えば堂々と訓練ができる。出力を上げるコツさえ掴めば、体育祭までには10%くらいは安定して使えるようになるんじやないかな。これでも1年生レベルでなら驚異的な出力だし、本気を出せば目立つのは避けられないだろう。それを考慮するなら、体育祭は賑やかに徹するのも有りだ。

そこまで考えたうえで、君はどうしたい?」

目先のことだけではない、将来も見据えたオールマイトの真剣な言葉。勝己も笑いを引つ込め、真剣な表情で友奈の答えを待つている。

しばらく友奈も悩んだ後、ゆつくりと想えていたことを口に出した。

「答える前に聞きたいことがあるんです。この間U.S.Jルームにヴィランが襲撃してきた時のことなんんですけど……」

「ああ、確かに軽々しく喋つていいことじやないな。とはいへ話しても問題ないことなら答えよう。どのみち君もみだりに口外しないように指導を受けてるし、話せない内容が増えるだけだ」

「ありがとうございます。……あの事件、私たちはかつちやんがヴィランを倒してくれ

たから無事でした。でも上位ヒーローの先生たちがあれだけの人数動員されてたし、すごい大事件だつたんですね？」死んじやう人が出てもおかしくなかつたくらいに」

U S J ルーム襲撃事件は友奈にとつて衝撃だつた。今までテレビで稀に見ることこそあつたが、現実ではまず起きたことがなかつた。「多数のヴィランが少数のヒーローを襲撃する」という事件。多くのヒーローが街を守り、限りはないが単独か少数のヴィランが各個逮捕されるという今までの常識が通じないと証明されたのだ。

「……まあそうだね。U S J ルームにいなはずの教師には対応できなかつたとはいえるのがバレてた私、相澤くん、13号の三人ではきつかつただろう。特に脳無といふ男だ。私の不在に対応して、テレポート使いが生徒たちを分断するのではなく、アーツが皆殺しにするという風に行動を変更されていたら爆豪少年も含め全員死んでいた可能性も高い。

「ツ！」

ヴィラン側の慢心に救われた感じだつたね。襲撃の準備を行つた黒幕が出張つていれば途方もない被害が出ていただろう」

逮捕後の調べで脳無から“ショック吸収”、“超再生”的“個性”も持っていたことが判明した。これらを使って生徒を巻き込むように戦われたらオールマイトといえど危険なほどの事件だつたのだ。死傷者が出ないどころか、テレポート使いを含むヴィラン全員を逮捕出来たのは奇跡だつたとしか言いようがない。

想像以上の事態だつたという話に友奈の顔が強張る。勝己なら数が多くだろうが相手が強かろうが笑つて勝つて帰つてくると信じているが、戦い続ければ万が一の「最悪」にいつか遭遇するのではないかと不安だつた。だがそれがもう訪れかけていたという事実に背筋が凍る。

しかし自身の想像を超える事態だつたことはありえるとも思つていたため、どうにか平静を取り戻す。

息を整え、覚悟を決めて答えた。

「なら私は体育祭には全力で挑みたいと思います。

今までずっと、かつちやんに救けられてきました。かつちやんは根っからの英雄気質

で、怖い物、辛いことがあつたら笑顔で挑んで解決してくれるようなすごい人なんです。

だから私も皆のためになることを勇んで行う、ただし無理のない範囲で。これがかつちやんのサイドキックとしての考え方で、私なりの勇者としての姿でした。でも“ワン・フォー・オール”を譲渡してもらって、欲が出ちゃつたみたいです。

私も、かつちゃんと肩を並べて戦いたい。後ろで守られながら支えるんじやなく、隣にいて助け合いたいって思うんです」

「俺は反対だぞ」

「——ツ！」

友奈が語った目標に対し、間髪入れずに勝己が異議を唱えた。

友奈は表情を歪め、オールマイトは友奈を擁護しようとしながらそれより早く勝己が言葉を続けた。

「友奈の強みは笑顔と言葉だ。友奈が大丈夫だつて言えば安心できるし、励まされりややる気が出せる。ヴィランと殴り合うことなんかより、困つて連中救けてる方がずっと輝けるだろお前は。」

それを戦闘ごときのために駆り出せるわけねえ。ただでさえ友奈は危ねえことに首突つ込むつてのに、なんでこれ以上危険にさらさにやらねえんだ」

「でもツ！」

「友奈が戦闘に出たいつたら俺ア止める。それが嫌なら認めさせろ。ちょうどおあつらえ向きのイベントが迫つてるだろおが」

「！ わかった!! 頑張るツ!!!」

「H A H A H A H A H A ! 体育祭が本気で楽しみになつてきたな！ これで優勝を他

の誰かが搔つ攫つていつたら赤つ恥だ!!

死ぬ氣でやりな有精卵共!!!』

体育祭開幕

参加種目の決定。

それに伴う個々人の準備。

2週間はあつという間に過ぎ、ついに迎えた雄英高校体育祭当日。1年A組のメンバーは控え室に集まり、入場の時を待っていた。

「コスチューム着たかったなー」

「公平を期すために着用不可なんだよ。鍛えた自分の“個性”だけで挑めってさ。サポー卜科も自作したアイテムだけらしいし」

「となると挑む気がない経営科は置いといて、強みがない普通科が一番不利なはずなんだよな。なんか今年はおつかないの何人もいたけど」

「普通科もヒーロー科に編入できるよう強“個性”持ちを直接で通したりしてたらしくからなあ。氣い抜いてたら俺らもやべーよ」

緊張を紛らわせるため雑談に興じる者がいる。

無言で精神を研ぎ澄ます者がいる。

落ち着けず掌に人と書いて飲んでいる者もいる。

そんな中、入場直前に轟が勝己と友奈に話しかけた。

「爆豪、結城、お前らオールマイトに目えかけられてるよな。

成績か将来性か他に何かあるのか、理由を詮索する気はねえが……お前らには勝つぞ」

「おお!? クラス最強決定戦か!? なんでか結城巻き込まれてるけど」

「無愛想な感じだつたけど轟も案外熱いじやん! 楽しくなってきた!!」

突然の宣戦布告に盛り上がるクラスメイト達。

しかし当の本人たちはそんな空気ではない。

轟の目はここにはいない誰かへの憎悪で曇り、勝己と友奈を無視してその後ろにいるオールマイトへと喧嘩を売つていた。

友奈は轟の目を見て心配する気持ちが隠せず表情に現れ、勝己は苛立しさを隠しすらしない。

「俺に宣戦布告すんのは望むとこだけどよお……どこ見て言つてんだクソが」

「あ?」

「喧嘩売んなら相手見ろや。んなよそ見したままじや他の誰かに足元掬われて終いだ。買う価値もねえ」

「んだと……ツ」

「ちよ、落ち着けって！ 爆豪もあんま煽り過ぎんな！」

上鳴が轟を抑えるも、勝己は気にもかけず取り合わない。特に煽つてゐる氣もないからだ。

「本戦上がつてまだ言えりや受けたらア。それまで精々気イ張つとけ。他の連中も行くぞ、入場時間だ」

『雄英体育祭!!

ヒーローの卵たちが我こそはと鎧を削る年に一度の大バトル!!
どうせテメーらアレだろこいつらだろ!!!

ヴィランの襲撃を受けたにもかかわらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!!
ヒーロー科!! 一年!! A組だろおお!!』

「持ち上がり過ぎて申し訳ないんだけど」

「俺ら避難しただけだつたもんなあ……」

「公表されてる情報だけだとそういう評価になるのはわかるんだけどさあ……！」マイ
ク先生事情知ってるんだから手心加えるとかないの？」

盛り上がる会場とは裏腹に、A組のテンションは一気に下がった。

先日のU.S.J.ルーム襲撃事件、対外的には「オールマイトがA組の指導中にヴィラン
が襲撃。生徒の迅速な行動もあり全員逮捕」くらいしか情報が流れていかない。なのでA
組全員が頑張ったみたいに思われているのだ。

実際のところ活躍したのは黒霧を倒した勝己、通常の機器よりジャミングに強いサ
ポートアイテムによつて早期に連絡を入れた上鳴、避難誘導を手伝つた八百万と友奈く
らいである。他は避難誘導に従つただけだ。

パニックを起こさず、先走つて殴りにも行かず誘導に沿つて行動できたというのは評価ポイントなのかもしれないが、ヒーローの卵としてそれで納得できる者はいなかつた。

『次ヒーロー科B組！ 続いて普通科C・D・E組！ サポート科F・G・H組も来たぞー！ そして経営科I・J・K組だ！』

A組に比べ明らかに雑な紹介で他のクラスの生徒が入場していく。

当然不満はあるようで、B組はひそひそと相談を続けていた。

「……物間、やっぱ俺も参加するわ。さすがにこれは我慢できねえ」
「オッケー。大人数でやつた方が効果は大きいだろうからね。歓迎するよ」

一方普通科。

彼らは反応が真っ二つに分かれていた。

かつたるそうな態度を隠すことなく、嫌々勝ち目のない体育祭に参加している者が7～8割。名門校という理由で入学し、ヒーロー事務所の事務員や警察などの公務員を目指している者たちだ。彼らにとつて体育祭は他の誰かが称えられるだけの面倒なイベントである。

残りの2～3割は称えられたA組を見て瞳をギラつかせている者達だ。A組と共に放課後の自主訓練を行つた連中であり、体育祭が終わるころにはあの歓声を自分の物に

してやるという欲望が抑えきれずに表情に出ていた。

そんな風にざわついた空気を引き締めるように、主審を行う教師――――18禁ヒーロー「ミツドナイト」――が鞭を鳴らして開会式を進行した。

「選手宣誓!! 選手代表!! 1――A、爆豪勝己!!」

勝己が呼ばれ、檀上に上がる。ヒーロー科一般入試首席合格者が選手宣誓を行うのが毎年の恒例だ。なお2年生以降は昨年の優勝者が選手宣誓を行うのだが、今年は昨年度優勝者がヒーロー科を除籍になっていたのでもめたとオールマイトが愚痴つていた。

A組一同嫌な予感がする中、勝己が選手宣誓を行つた。

「宣誓。俺が一位になる」

「絶対やると思つた!!」

「調子乗んなよA組オラアツ!」

「どんだけ自信過剰だよ!!」

A組からのツッコミと、B組からのブーイングが響く。そんな中、ヒーロー科以外からも大声を上げる者がいた。

「僕だつて負けやしない!! 君も乗り越えて一位を取つてみせるツ!!」

一人が一位を取る宣言をしたのを皮切りに、サポート科と普通科から次々と名乗りを上げる者が現れた。始めブーイングしていたB組が引くほどの熱量だ。

それを聞いた勝己の顔には心底楽しそうな凶悪な笑みが浮かんでいた。

「上等だッ！ ブルスウルトラ
雄英の校訓忘れんじやねエゾテメエら!!」

障害物競走 1

「さーて、それじゃあ早速第一種目行きましょう！」

いわゆる予選よ！ 每年多くの者が涙を飲むわ!! さて運命の第一種目!!

今年は……コレ!!」

ミッドナイトの司会に合わせ、モニターにでかでかと『障害物競走』と表示された。

「計1-1クラスでの総当たりレースよ！ コースはこのスタジアムの外周約4km!

我が校は自由さが売り文句！ ウフフフ……コースさえ守れば何をしたつて構わないわ！」

なお去年も予選で似たような説明がされたが、レース中は何をしても許されたが体育祭終了後に除籍になつた生徒もいる。ヒーロー候補がダークティすぎる戦法取るのはアウトだつた。当然である。

「さあさあ位置につきまくりなさい……」

スタートゲートが開き、明かりが一つ消える。スタートゲートはヒーロー科の生徒が並んでいた場所の後ろにあり、ヒーロー科有利な状況だ。

明かりがさらに一つ消える。サポート科、普通科もスタートゲートに近寄つてくる。

経営科だけは少し離れて観戦の構えを崩さない。

そして妙に時間がかかつたように感じる中、最後の明かりが消えた。

「スタ——ト！」

ミッドナイトの合図を受け、選手たちが一斉に駆け出した。

人数に対して小さなスタートゲートでは人が詰まり、思うように前に進むことが出来ないでいる。

そんな中、人混みも無視して真っ先に突き進む者がいた。

「ハツハ——！ 先頭走ンのは俺だア!!」

勝己は掌で起こした爆発でゲートに殺到する者達の頭上を飛び越え、そのまま着地することなく空へと上昇していく。どうやら走ることなく空路で行くつもりのようだ。

他の者がどうにかゲートを超えたとき、勝己は一人グングンと加速していく。スタート早々、完全な独走状態だ。

「させる、か……クソ！」

轟が勝己を追おうとしたが、スタートゲートを超えた途端に目に入つた第一の障害を見て断念した。

『さあいきなり障害物だ！ まずは手始め……

第一関門、ロボ・インフェルノ!!

つていきなり一人飛び越えやがった！ せつかくの障害無視はひでーぜ！』
プレゼント・マイクの解説通り、巨大なロボットがコースを埋め尽くす。

一般入試の時の0P仮想敵「エグゼキューター」だ。その足元には1P仮想敵「ヴィクトリー」が待機しており、地上を進む限り迂回できるスペースなど一切残っていない。対口ボットだと“個性”が活かせないから普通科やサポート科に入り、体育祭で逆転を狙つた生徒には嫌がらせとしか思えない閑門だ。

しかしこの金がかかつた閑門も勝己にとつては障害になり得ない。スタートゲート同様にロボットたちの頭上を既に悠々と通り抜けている。

巨大なロボットの脅威と先頭に振り切られる焦りから皆が悩み足を止める中、一人駆け抜ける者がいた。

「勇者、パ———ンチ！」

友奈の拳がヴィクトリーを吹き飛ばし、ピンボールのように数体まとめて破壊する。オールマイトの予想通り、10%まで引き出された“ワン・フォー・オール”であればこの程度は簡単なことだ。

そのまま流れるようにパンチとキックで群がつてくるヴィクトリーを破壊し、エグゼキューターの足元を突き進む。友奈が通つた後にはヴィクトリーのいない空間が出来上がつていた。

『勇者パンチつてブレイブのフォロワーか!? しねえ! だがこいつあ悪手じやねえか!?』

友奈が切り開いた道を大勢の選手が走る。

エグゼキューターはその巨体ゆえに小回りが利かず、こんなに多数を狭いコースに並べればなおさらだ。その隙を埋める予定のヴィクトリーがいなくなつたことで、一般入試を潜り抜けたヒーロー科は勿論、A組と訓練を受けていた普通科やサポート科の生徒も簡単に通り抜けることが出来ていた。

傍から見ると友奈だけが疲労して、振り切るどころか他の選手をアシストしてしまつた状況だ。

『他人を蹴落とそうとしてねえんだろうな。先頭を追いかけるのに最速の手段がコレだつたつてことだろ』

『あくまで狙うは一位つてか! いいじやねえかそういうの! だが先頭はすでに第二関門突破してるぜ!! 気張りなリスナー!!』

ロボットに手間取る間に勝己はガンガン進んでいるとアナウンスが流れる。
ゲートを出ていきなり第一関門だつたのだから、実は第十関門まであつて、第二関門

突破でもそこまで進んでいない可能性はある。だがその逆の可能性だつてあるのだ。

喧嘩を買う価値もないと言い切られた轟は、その言葉が事実だつたと証明するかのよ

うな状況を打破すべく最速での移動を開始する。

『おおつ!? 氷の連続精製で移動か! 速え上に残つた氷が後続にとつてすげー邪魔!

『ロボットがいなくなつたから取れる手だな。障害物がある状態だとぶつかつて怪我、最悪脱落もありうる』

友奈と轟が勝己を追いかけ、後続を振り切つて突き進む。

しかしまだまだ“個性”を掌握しきれていない友奈と本領は固定砲台な轟。彼らでは高速機動タイプの勝己の背中を発見することはできなかつた。

『1—A爆豪、二位以下に大差をつけて今ゴール!! 空飛べるつてのはやつぱりずりいな!』

『プロの世界でも空を飛べるつてのはデカい武器だ。それを使って何が悪い』

『クソツ、ゲート越える前に足止めしておくべきだつたか?』

『1—A轟、音声拾われてるぜー。 実際どう思うよイレイザー?』

『まあ一位を取らせたくないならそれしかなかつたな。他の奴は爆豪もろとも轟に凍らされるの警戒して足止めはやらなかつたし。ただその場合、轟も予選で脱落することになつただろうが』

『どのみち防ぎようなかつたか! まあ気にすんなリストナーチ! こりやあくまで予選!

通過の定員に入ればそれでオーケーだ!!』

『ここでの順位は大きな影響はないと実況は語るが、そんなことで納得できるような奴は首位争いをやろうとしない。』

とはいえた決まつた順位を覆す手段もない。友奈も轟も二位を勝ち取るため次の障害物に備えて余力を残して走り続けた。

『トップ素通りのせいでようやく紹介だぜ第二閨門！ 落ちればアウト！ それが嫌なら這いずりな！ ザ・フォーリール!!!』

長い階段を上つた先では峡谷のごとく地面が掘られており、数十の足場がロープで繋がれていた。これを伝つて移動しろと言うことだろうが、空を飛べる勝己には何の障害にもなつていない。あの速度での突破も納得だ。

この障害を見て轟は進むことを躊躇つた。氷をロープに纏わせて道幅を広げれば難なく進めるが、友奈に殴り碎かれ揺らされると落下してしまう可能性がある。迂闊に先行はできなかつた。

友奈はと言うと轟を警戒する必要もなく、助走をつけて大ジャンプで近くの足場に飛び移つた。そのままピヨンピヨンとロープを無視して足場を飛び進んでいく。
『結城一步リード！ 轟も結城が進んだのを見て進み始めたぞ！』

『ここで轟が先行するのは危険過ぎるから、合理的な判断だな。……つと、ロープに纏わ

せた氷は溶かして進むのか。ここでは結城に近づけない以上、後続に道を残さず順位を維持するのもまた合理的だ』

相澤の解説は間違えてはいないが、半分しか当たっていない。ロープの氷を溶かしたのは後続に道を残さないと共に、氷結の使い過ぎで下がつた体温を戻すためだ。後の追い越しを狙つての行動である。

「……ツ！」

だが友奈の進む速度が想定より速い。障害物競走も終盤に入つて温存はやめるのは予想していたが、それを超える速さだ。体温の調整をしていては間に合わない可能性が高い。

最初から炎と併用していれば、今のように立ち止まる必要もなかつた。憎き父や宣戦布告を受けることすらしなかつた勝己の言葉通りの現実に歯噛みしながら、轟は行動を縛つた上での最適解を出すことに専念した。

そして迎えた最終関門。

『最終関門！　一面地雷原!!　怒りのアフガンだ!!!

地雷の位置良く見りやわかるし威力は大したことねえ！　だが音と見た目は派手だから失禁必至だＺ……つて結城地雷無視して進んでやがる!!』

『爆豪と幼馴染らしいし、あのくらいの爆発なら慣れてんだろうな。言つた通り威力控えめで、結城ならバランス崩しても立て直しは簡単で探す方が面倒なくらいだし』

友奈の爆走が止まらない。轟との差を詰めさせることなく、ゴールゲートを潜り抜けた。

『1——A結城、第二位！　1——A轟、第三位！　ここからは団子状態だし、順位などは後でまとめるからとりあえずお疲れ!!』

障害物競走2

「ようやく終了ね。

それじゃあ結果をご覧なさい！」

主審のミツドナイトの言葉と共にモニターに順位が上から順に表示されていく。

『一位 ヒーロー科 A組 爆豪勝己

二位 ヒーロー科 A組 結城友奈

三位 ヒーロー科 A組 轟焦凍

四位 ヒーロー科 B組 塩崎茨

五位 ヒーロー科 B組 骨抜柔造

六位 ヒーロー科 A組 飯田天哉

・
』

「友奈ちゃん、だいぶ入学したときから出力上がったねえ！ 悔しいよちくしょー！」

「ふふふ、負けないからね！」

「この“個性”で後れを取るとは……。
やはりまだまだ僕……俺は……！」

「飯田は直線なかつたし、障害物あつたししゃーなくね？ つっても納得できないんだ
ろうけど」

『「勿論だ！ 爆豪くんの選手宣誓通り、プルスウルトラを心掛けなくては!!」』

一六位	普通科	D組	摸武 <small>もぶ</small> 乃子 <small>のこ</small>
一七位	ヒーロー科	A組	麗日お茶子
一八位	ヒーロー科	A組	八百万百
一九位	普通科	C組	峰田実
二〇位	サポート科	G組	赤谷海雲 <small>あかたにみくも</small>
二一位	ヒーロー科	A組	芦戸三奈

・
・
・
・
』

「普通科もサポート科も結構上位に食い込んでるなあ……」

「峰田は普通科扱いなんだよな。ルール違反なしだから問題にはならなかつたけど、あれじやあ移籍無理だろ」

「お尻のところに『もぎもぎ』でくつつかれるの、ヤオモモ嫌がつて本気でビンタしてた
もんね。後で慰めたげよ」

三七位	ヒーロー科
三八位	普通科
三九位	普通科
四〇位	普通科
四一位	ヒーロー科
四二位	ヒーロー科
B組	D組
B組	C組
黒色支配	柳レイ子 くろだれいす 黒田時覚 くろだときさと おののききふょうすけ 慄木恐介 おびきおそれすけ
拳藤一佳	心操人使

「予選通過は以上の42名
「はあ～～～～～～つ
!!??!!」

どこにこんなに普通科とサポート科隠れてたの!?

僕らはきつちりヒーロー科の人

数と同じくらいの順位に収まるように走つてたはずだ!!」

B組の物間が荒ぶる。

雄英体育祭では毎年予選でヒーロー科以外はほぼ落とす。多めに残して50名ほど予選通過はあるが、40名を切ることはほぼなかつた。

そのため彼らB組は、本戦でA組を蹴落とすために後方からの情報収集を行つていたのだ。

しかし普通科やサポート科から大量の通過者が出了ことで半数がふるい落とされることとなつた。自分たちの前にはA組以外になかつたような記憶があるのにである。

それについて解説が役目を果たすべく話し出した。

『I—B物間が荒ぶつてゐるが、理由はI—D摸武の“個性”だ。

こいつの“個性”は“モブキャラ”。名前の通り自身及び接触した相手をモブキャラ——個体の識別が困難で、存在感が薄い存在に変える“個性”だ。他に注視しているやつがいれば、なおのこと発見しにくくなる。今回だとA組の連中とかな。

モニター越しでも確認するのが生物なら効果があるのが強みの“個性”だ』

なおここでは摸武が不利になるのでわざわざ言わぬが、識別が困難なだけで注意力の高い者なら見分けることが可能だし、存在感が薄いと言つても消えてゐるわけじやないでの発見もできる。要は確実性の低い“個性”なのである。

それでも今回大活躍したようにうまく使えば大きな成果が見込めるし、目の前の相手に集中し過ぎないための訓練相手には最適だ。そのおかげで勝己の訓練相手に駆り出され、二週間の間にかなり度胸が付けられていた。

『……わーお。俺も気付かないとかすげえなおい。ハイテンションな俺も思わず真顔になつたぜ。

目立つてなんぼのヒーローにや向かない“個性”だが、使い方次第じやおつかないことになんぜ』

『そうだな。連携次第じや大化けするし、アングラヒーローとしちやああいう後輩が出てくるのは歓迎だ。ヒーロー飽和社会であつても、こういうのは需要に供給が追い付いてないからな』

顔を真っ赤にした物間がヴィラン顔で摸武を睨む。摸武は笑つて煽り返した。

「聞いてるよ。ブラド先生は生徒を除籍とかせず、きつちり育ててヒーローにするつてのが教育方針なんでしょ？ でもここで結果が出せば「除籍、移籍受け入れは担任の自由」とか言つてられない。

特権階級気取りは今日まで。ヒーロー科の枠は私たちが貰う」

B組が過剰に高く評価されているA組を敵視したのと同じように、普通科もB組を敵視していた。除籍の心配がなく、放課後の設備利用を自分たちだけで独占しているためだ。後者の方は監督に動ける人員をA組が先手でほぼ確保したためなのだが、そんなのは普通科やサポート科には知りようがなかつた。

勝己達A組が訓練に誘い夢を見せなければこうはならなかつたかもしけない。だが野心に火が付いた以上、自分たちを見下しライバルとすら見ていないムカつく連中の足元を掬うのに躊躇はない。

『言うなあ摸武！ 移籍狙う気満々か!! 一般入試の担当としちや耳が痛エーーーツ
!!!』

『元々一般入試は非合理な内容だつたし、こういうやつも出てくるさ。

ただし来年以降に雄英受ける連中に言つとくぞ。普通科やサポート科がここまで進められるだけの訓練が出来たのは、ヒーロー科の生徒の協力あつてのモノだ。来年以降は去年までと同じ待遇に戻つても俺らは知らん。トップヒーロー目指すなら、最初からヒーロー科に入学するのが一番確実だ』

『とりあえず校長に試験内容改善の意見は上げとくぜ！ 予算とか時間とかマスコミとかの問題で通るかは微妙だけどな！』

『実況に解説、しゃべり過ぎ！ いい加減、本戦始めるよ！ ここからは取材陣も白熱してくる!! 選手一同気張りなさい!!!

そして第二種目の内容は————コレツ!!!

『騎馬戦』

第一種目同様にモニターに大きく表示される。

障害物競走とは異なり、集団で行う競技だ。

「参加者は2～4人のチームを自由に組んで騎馬を作つてもらうわ！」

基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど、一つ違うのが先ほどの結果に従い各自にボ

イントが振り分けられること！そのポイントの合計が騎馬のポイントになるわ！
与えられるポイントは下から5ずつ！ 四二位は5P、四一位は10Pと言った具合
よ。

そして上に行く者にはさらなる受難を。雄英に在籍する以上何度も聞かされるよ。
これぞ "Plus Ultra" !

予選一位通過の爆豪勝己くん！ 持ちP1000万P!!
もチームのポイントには加算されないわ!!!
上位の奴ほど狙われちゃう、下克上サバイバルよ！」

ただし自分で持つていて

騎馬戦 1

騎馬戦で予選一位通過の勝己は持ちPが1000万、しかも自分で持つていてもポイントにならない。

つまりここでも一位を取るなら自分のポイントを奪われることなく保持し続け、かつ誰よりもポイントを奪わなくてはならない。わかりやすく逆境だ。勝己にとつては望むところ、トップ故の重圧、試練はさらなる高みへと導いてくれる有難い物なのだから。逆に周囲の選手は嫌そうにしている者もいた。勝己からポイントを奪えれば一位通過は決まつたようなものだが、空を飛べるため奪うのがそもそも難しく、しかも積極的に他からポイントを奪いに来ると言う。一位通過安定のポイントを持たせ、ポイント争いから浮いた状態にして放置できなくなつたのは辛い。

「細かいルールを説明していくわ！」

制限時間は15分。

振り分けられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり、騎手はそのポイント数の表示されたハチマキを装着！ 終了までにハチマキを奪い合い保持ポイントを競うのよ。なお勝ち上がるチームの数は終わつてから発表するわ！

取ったハチマキは首から上に巻くこと。取れば取るほど管理が大変になるわよ！

そして重要なのはハチマキが取られても、騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ！ ただしそれで時間稼ぎ狙うようなら独断で失格にするからね！」

選手たちがざわつく。

ルール通りなら最低で11組、最大で24組の騎馬がずっとフィールドで居座ることになるからだ。特にハチマキを持たない騎馬は反撃を恐れず突つかかってくる。かなり荒れる試合になるだろう。

「“個性”発動アリの残虐ファイト！』

だけどあくまで騎馬戦！ 悪質な崩し目的での攻撃などはレッドカード!! 一発退

場とします!!!

そして障害物競争の結果を受けての追加ルール！

まず騎手が騎馬から離れるのは禁止！ 騎馬ごと空を飛ぶのもダメ!! 大ジャンプくらいなら認めます!!! ただし判断基準は他と同様に私の独断なので、グレーゾーンを狙つた行動連発してたら唐突にレッドカードでも知らないわよ!!!

追加ルールがすがすがしい程勝己を狙い撃ちにした。現時点で空を飛べるのは勝己だけとわかっているのに、騎馬から離れての攻撃や騎馬ごとの飛行禁止など露骨過ぎる。

そう思つた選手たちにミッドナイトの容赦ない口撃が浴びせられた。

「こうでもしないとチームメイト関係なしに、上空から爆豪くんが強襲をかけてハチマキ荒稼ぎして終わりそだつたからね。厄介なのは後に回せばいいし。

彼にとつての試練にも助力にもなれない、あなたたちの不甲斐なさ故の追加ルール
よ。存分に恥なさい」

「「「「ツ!!」」」」

選手一同の表情に怒りが浮かぶ。

空を飛ぶ前に押さえる手段が有つた者、撃ち落とす手段が有つた者、降りてきたタイミングで返り討ちにする算段を立てていた者。いずれも共通して自分たちが軽く見ら

れたことに腹を立てていた。ここまで行動を縛らなくては見世物になりすらしないほど自分たちは弱く見えるのかと。しかし主審の判定はもう覆せない。ならばその判断が間違いだつたと、現トップを下して証明するまでだ。

「それじゃこれより15分！ チーム決めの交渉タイムスタートよ！」

「おい障子、俺と組め」

交渉タイム開始早々、勝己は周りを無視して障子に声をかけた。

当の障子はと言うと予想外の申し出に驚きを隠せていない。

「意外だな、結城辺りと組むと思った。結城なら一人で騎馬ができるだろうし、その方がお前も動きやすいだろう?」

障子の意見は的を射ている。実際友奈を騎馬に勝己が騎手の一人チームを作れば、縦横無尽に跳ね回りハチマキを荒稼ぎすることもできただろう。だが今回は少々事情が違うのだ。

「そりやそうだが、今回友奈は俺に挑んでくるつもりだかんな。俺も別でチーム探してんだ。お前が友奈以外じゃ一番相性がいい」

「ほう、先に理由を聞いてもいいか?」

理由を聞いた後で「やっぱ組むのは無し」と言えば、勝己はこの騎馬戦において主軸となる戦法を敵に知られてしまうことになる。それでも話すかという問い合わせに、勝己は躊躇なく答えた。手の内と対応策がバレた程度で負けはしないという自負があるからこそその判断だ。

「俺の“個性”は掌から二トロっぽい汗を出す。あくまで二トロっぽいだけで実際は別

物でな、成分いじりやすげえ光るだけ、すげえ音がするだけ、みたいな運用も出来んだよ。

接近戦だとこの二つを主軸に戦うが、テメエなら“複製腕”で潰れた目や耳を作り直しや立て直せんだろ？

ついでに言や、複数の手が迫つてゐるだけで相手の騎手にプレッシャーは与えられるしな。で、どうすんだ？ 僕倒して一位狙うか、僕と他なぎ倒して一位狙うか

「一位狙い以外あり得ないという前提で話すのがお前らしいな。

……わかった、組もう。自分でやつておいてなんだが、手の内を聞いてからお前を狙うというのは気が乗らなかつた

「よし、決定だ。なら次スカウトに行くぞ」

「目星は付いているのか？」

「たりめえだ。

この騎馬戦じやハチマキ持つてねえ連中のゾンビアタックが一番厄介だ。だから拘束が出来る八百万か瀬呂で一杵。爆破で大ジャンプしたり爆速ターボ使つても大丈夫なように固定する仕事もあんな。

あとは逆にハチマキ取るまで逃がさねえよう、こつちの騎馬が拘束されるかもしねえ。そん時や拘束を壊して離脱できるようにするやつもいる。これにや芦戸が適任

か

「それなら問題なさそうだな。では早くスカウトに行くとしよう。他に取られてしまうかもしない」

騎馬戦2

『よーし組み終わつたな!!?

準備は良いかなんて聞かねえぞ!!

いくぜ!! 残虐バトルロイヤルカウントダウン!!』

『3!!』

「よーし、行つくよーーーっ!」

「ええ結城さん!」

「騎手は俺なんだがな」

「元気出セヨ」

常闇チーム

TOTAL	520P
・常闇	180P
・結城	205P
・摸武	135P
『2!!』	
「狙いは一つだ……」	

「勿論、わかっているとも！」

「せっかく別のチームになつたのです。一矢報いてやりましょう」

「俺も試合中にアホにならない程度に頑張らせてもらうわ」

轟チーム

・ 轰	200P
・ 飯田	185P
・ 八百万	125P
・ 上鳴	70P
TOTAL	580P

『1!!!』

「やることあわかつてんなテメエら」

「ああ、狙うは総取りの一人勝ち」

「足を止めずに動き続ける！」

「相手の足は何度でも止めてく！ 基本を忘れず攻撃的に、だろ！」

爆豪チーム

・ 爆豪	1000万P
・ 濱呂	175P

・障子 145P
・芦戸 110P

TOTAL 10,000,430P
『START!!!』

誰とも組めなかつた峰田が早々にロボットから伸びたワイヤーアームで回収される中、いよいよ騎馬戦が始まる。

まず最初に狙われるのは当然勝己だ。

「実質それの争奪戦だ！」

鉄哲が騎手を、骨抜、泡瀬、塩崎が騎馬を務めるB組チームの騎馬が真っ先に突つかる。その左横からは蛙吹チーム（騎馬：耳郎、砂藤、口田）が隙を狙っている。

「いきなり二組。どうする爆豪？」

「飛び越えてついでにハチマキ奪う。着地に備えろ。障子は舌と耳警戒だ」

言うや否や勝己が手を下向きに構えると、骨抜が地面を柔らかくするより先に前転するように飛び上がった。

「んなつ！」

「ハチマキ寄こせやオラアツ！」

頭上を飛び越えながら、鉄哲のハチマキを奪いにかかる。

鉄哲は騎馬に負担をかけ過ぎないよう、腕部と頭部だけを鉄化して迎撃するが当然ながら踏ん張りが効かない。慣れない頭上からの攻撃と言うのもあって、迎撃は軽く受け流されハチマキを奪われることになった。

「幸先いいなア高得点ハチマキゲットだ！」

「舌もイヤホンジヤツクも来なかつたな」

「この速攻ならそりやそうだ！ 反転めんどいし梅雨ちゃんより先に他取りに行こう！」

「後ろ騎馬の脚だけでもテープで縛つとくぜ！」

ところ代わつて実況席。

「ヒュー、やるなあ！ 爆豪チーム早々にハチマキ奪取ウツ！」

「爆豪の本領は空中戦だ。重りが付いていようが頭上取られた時点で分が悪い。迎撃じゃなく体を屈めてハチマキを守ることに徹すべきだつたな」

モニターには開始早々にハチマキを奪い取る爆豪チームが映し出されていた。

しかしそれだけではなく、フィールドの各所でハチマキの奪い合いが発生している。

開始早々乱戦状態だ。

「そういうやよおイレイザー？ 選手宣誓で真っ先に爆豪に挑戦状叩きつけたやつどうなつてる！？ 俺どいつか忘れちまつてよ！」

「忘れんな。あいつだ、赤谷チームの騎手」

相澤の指示に従い、カメラロボが赤谷チームを中心に映像を流す。

そこでは騎手が盾を構えて相手の攻撃を防ぎ、もう片方の手からワイヤーを射出しハチマキを狙つたり騎馬を地面に縫い留めたりと器用に立ち回つていた。

「サポート科だったか！ 便利そうなアイテム使つてんな！ あいつの“個性”は？」

「ねえよ。『無個性』だ」

「!!!!!!」

プレゼント・マイクと画面の向こうの視聴者たちに動搖が走る。

“個性”持ちと“無個性”的肉体的な違いを超常黎明期以前の常識で例えると「猛獸」と人間」になる。つまり遊びでじやれついても死にかねないくらいの差だ。そんな肉体しか持たない者が雄英体育祭でこうして活躍できているのだから目を疑うのも当然だろう。

「まあ、『無個性』と言つても騎馬の三人が上手く援護している。今の状況も他より連携が上手いだけと言えるな」

後ろ騎馬の慄木恐介の“個性”は“恐怖”。文字通り標的に自身のことを怖いと思わせる“個性”だ。これにより相手の騎手は赤谷に碌に集中できていない。

もう一人の後ろ騎馬は黒田時覚。“個性”は“体内時計”。自身や周囲にいる者の体内時計を狂わせ、走馬燈のごとく思考を加速して考える時間を稼いだり、逆に遅くして全てが超スピードで動いていると思わせたりできる。これによつて赤谷は考える時間が与えられ、冷静に最善手を打つことが出来ていた。

最後に前騎馬の尾白。後ろの二人が肉体的には強い方ではないので、騎馬の要になつてゐる。またピンチになれば彼が尻尾で赤谷を動かして一旦距離を取り、すぐに戻して

反撃に移らさせていた。

「それにしたつて無謀過ぎるぜ！ 軽く殴られただけで死にかねえぞ!?」

「そうだな。だが、”無個性”の身でヒーローを目指す手段としては合理的だ。サポートアイテムを作るにも金が要るが、ただの”無個性”に金を出してくれるスポンサーなんかいない。それするくらいなら同じ道具を”強個性”持ちに渡すからな。だが雄英体育祭優勝っていう肩書があればワンチャンくらいはある」

「……お前見込みのない奴は早々にヒーローになるの諦めた方がいいって考えじやなかつたっけ？ キヤラ違くね？」

「俺が何言おうが諦める気ねえだろアイツは。それにヒーローを目指す手段も真っ当な方法、騎手を任されるだけの準備も運もあつた。開発者になるにしてもヒーローの視点を知つてることは無駄にはならないし、ルール違反しない限りは応援してるさ。応援だけならタダだ。」

何より夢を叶えられたならアイツは誰より雄英生の鑑だつたつてことだからな」

「……んなガキもいるんだなオイ。今年の一年はA組だけじゃねえな!!

つて言つてる間に赤谷ハチマキ取られてんじゃねえか!!」

「頑張つてはいるがそんなの全員同じだからそういうこともある。時間はまだあるんだ、気にするほどでもない」

騎馬戦3

「クソツ、やられた……ツ！」

騎馬戦も折り返しを過ぎた頃、轟チームは窮地に陥っていた。1000万Pを有する爆豪チームは機動力があり過ぎて捕捉できず、常闇チームは摸武がいるせいでどこにいるのかすら判然としない。

そのせいで数チームを返り討ちにし、ハチマキを奪取した轟チームに0Pが群がつてきていたのだ。特に厄介なこの騎馬も含めてだ。

「案外簡単に沈めたね。じゃ塩崎、あとよろしく」

「ええ、任せてください」

B組の鉄哲チームだ。

骨抜の“柔化”によつて轟チームの騎馬は足が沈み固定され、塩崎の“ツル”によつて休みなく攻められ続けている。

轟がツルを凍らせて碎くことでどうにか防げているが、“個性”の発動にデメリットのない塩崎の方が持久力が高い。攻め落とされるのは時間の問題だろう。「後先考える余裕はねえか……。八百万、棒をくれ！」

「はい！」

渡された棒を鉄哲チームがいる左側の地面に当て、逃げ場を残さない大規模な凍結で鉄哲チームをまとめて氷漬けにする。騎馬戦をしている間は溶かす余裕などないだろうし、爆豪チームを追うとなれば邪魔になるかもしれないがこのままやられるよりはマシだ。

他の騎馬が凍結を警戒して及び腰になつてはいるうちに地面から抜け出さなくては勝ち目がない。幸い地面を固くするのはできないようなので、脱出自体は妨害がなければ容易だろう。

だが現実はそううまくはいかなかつた。

「冷てー。でもそんだけだね。相性良かつたみたい」

「なんだとつ!?」

氷塊全てではないが、鉄哲チームの騎馬が通れる程度の量の氷が柔らかくなり崩れて道が出来た。

骨抜の言う通り相性が悪すぎる。轟が炎を使わない限り、この相性差を覆すことは不可能だろう。

「じゃ再開ね」

『いつまでやつてんだ轟チームに鉄哲チーム、あとハイエナ共!? もうとつくにハチマキなくなつてんぞ!!』

「ツ??!!」

轟が慌てて頭と首元を確認する。

プレゼント・マイクの実況通り、そこにはハチマキが一つもつけられていなかつた。
「また摸武の奴か! もうこいちらに構つてる場合じやねえぞ!」

「わかつた! じゃあこれで最後の嫌がらせだ! 塩崎!」

「ええ、わかつてます」

骨抜が柔らかくした土を塩崎のツルで掬い上げ、大波を作り出す。それは轟チームに降りかかり、氷で防がれた。その防いだ氷ごと地面に沈んでいく。
「よし、これならもう動けないでしょ。早くハチマキ取らないと」

「常闇チームはどこいるかわからんねえ！」

爆豪チーム狙うか！」

「いや、分けて考える必要はなさそうだ」

「あ？」

「見りやわかる。それより早くいくぞ！」

「俺のために集めてくれてありがとよ！ 貰つてくぞオラアツ！」

「くつ……！」

「モウヤダ！ 逃げタイ！」

残り時間もあとわずか、勝己が閃光と爆音をまき散らして猛然と攻め立てる。

対象は爆豪チーム以外で唯一のハチマキ持ちの騎馬、常闇チームだ。

モブキャラ化したまま友奈の機動力と常闇の射程でハチマキを荒稼ぎしていたが、終盤に入つてついに爆豪チームに捕まつた。モブキャラ化はあくまで見分けづらくするだけなので、友奈を勝己が見分けられないはずもなくあつさりと看破され追い詰められてしまつたのだ。

そこからはもう一方的だ。

常闇のダークシャドウは閃光ですっかり萎縮し、騎馬が離脱しようとしても障子の腕が邪魔で逃げきれない。

どうとう勝己の指が常闇の持つハチマキに引っかかつた。

「……ぐうツ！」

「ああ、!?」

常闇が強引に体をよじり、全てのハチマキが取られないよう動く。

結果、ハチマキは一つだけ外れて地面に落ち、常闇チームの騎馬が崩れることになつた。

「審判！ この場合どうなる!?」

「落ちたハチマキは今からロボットが放り投げるわ！ 落下し始めたら取つてよし！ キヤツチしたチームのモノよ！」

爆破で近づいてくる騎馬を牽制しつつ発した質問にミッドナイトが答えた。

見てみると先ほどまで遠巻きに撮影していたロボットが猛スピードで近づいてくる。こいつが打ち上げるのだろう。

「どうする爆豪！？」

「どうするもねえ！ 僕ア復帰し次第常闇のハチマキを狙う！ 濑呂！ テメエが上の

ハチマキ狙え!」

行動方針はあくまで全取り。そこはブレない。

一方他の騎馬はとすると、無理して勝己と常闇からハチマキを奪うより空中のハチマキの奪い合いに備えた。2チームを除き0Pの現状、これを取れば3位で勝ち上がれる可能性が高いからだ。

「塩崎、頼むぞ!」

「お任せを!」

「梅雨ちゃん、頑張つて!」

「ちよつと遠いけどやつてみるわ」

未だ拘束されておらず、近づけた騎馬たちからツルや舌が伸ばされる。

そしてその全てが空を切つた。

「全員速めたあと任せたぞ!
CだおsgんヴօsんVじよsVf s!」

「黒田くん無理させてゴメン! でもこれでハチマキ、取れた!」

後方の赤谷チームからワイヤーが伸び、ハチマキをさらっていく。

他の騎馬たちはまだ黒田による妨害——体感時間の短縮。赤谷への援護とは逆に、全てが高速で動いているように感じる。——によつて動くことが出来ない。

そして常闇チームは妨害に巻き込まれたことで騎馬を組むのに失敗。立て直しもで

きていない。

爆豪チームは動き出していなかつたので転倒こそしていないものの、身動きが取れる状況ではなさそうだ。……なさそうなのだが勝己だけは赤谷チームをしつかりと見据えている。体育祭前の訓練でも思考できないまま反射だけでボコられたことすらあつたし、何らかの対策を身に着けていてもおかしくない。危険は冒さないという選択肢を赤谷チームは選んだ。

赤谷チームは他の騎馬から距離を取り、ようやく他の騎馬たちが元の感覚に戻つたところで主審からの宣言が響いた。

「TIME UP!! 全員プレーをやめなさい！ 結果発表を行うわ!!」

騎馬戦4

「じゃあ早速、最終種目進出者を上から順に実況が読み上げていくわよ！」

『第一位爆豪チーム！』

「ハチマキ集まんなかつたクソアツ！」

「おしかつたな。まさか黒田があそこまで出来るのは」

「確かにすごかつた。あんだけの人数いつぺんに止めるとか無茶苦茶だわ」

「手疲れたー」

まず最も多くのハチマキを集めた爆豪チームが呼ばれた。

1000万Pのハチマキを誰にも取られないままの勝利なので十分すごいことなの
だが、騎手の勝己が本気で悔しがっているのでいまいち喜べていない。

『第二位、常闇チーム！』

「どうにか、残せたな……！」

「モウヤリタクナイヨ!!」

「ごめんなさい、私が結城さんに付いていけば爆豪くんからも逃げられたのに……」「乃子ちゃんのせいな訳ないよ。最後のは障子くんの包囲もすごかつたし、何より……」

までハチマキ集められたのも乃子ちゃんのおかげなんだから！」

第二位はアサシン戦法でハチマキを荒稼ぎした常闇チーム。

閃光で体力^{やみ}を削られまくつたせいか、ダークシャドウ的には勝己はもうトラウマのようだ。半泣きどころかガチ泣きしていた。ダークシャドウからも水分は絞れるらしい。

『第三位、赤谷チーム！』

「やつた……ここまで来れた……！」

「赤谷イ！ 一番攻撃受ける騎手をよくやり切ってくれた！ 黒田も尾白もありがとな

！」

「俺もお前らと組めて良かつたよ。てか黒田のやつ大丈夫か？」

「…………」

第三位は最後の最後でハチマキを獲得した赤谷チーム。

最大の功労者である黒田は目が虚ろで話しかけようが何の反応もない。一人で立つことすら出来ないため、赤谷と慄木で肩を貸していた。

「で次は最後までハチマキ持つてた轟チームなんだけど……生き埋めにされて進出させるのも問題ね。それに常闇チームが三人だから一チームだけ進出させると数が半端だわ。

つて、そういうれば赤谷チーム、黒田は午後の部までに復帰できそう？ 無理そうなら

代わりの人員選んどかないと駄目なんだけど?」

「えーと、ちょっとここまで大人数の時間を操作してたどこ見たことないんでなんとも……」

「ただ人数多い程復帰に時間がかかるし、復帰しても本調子とはいかないんで予備を選ぶつて感じで処理してもらえると助かります」

黒田の個性“体内時計”は自身の体感時間を操作して考える時間を確保したり、他人の体感時間を持つて行動を阻害することが出来る。ただしやり過ぎると自身の体感時間が乱れ、正常に周囲を認識できなくなってしまうのだ。その上意識がある程度戻った後も、酔つたような感覚が結構長く続く。

その報告を聞いたミッドナイトは少し考えた後、鞭を鳴らして判決を告げた。

「んー、悪いけど予備とかは無し! 黒田くんはここでリタイアとして扱わせてもらうわ! さっきのアレでアピールとしては十分だし、彼が全力を出したことを後悔しないよう報いることを約束します!」

と言うわけで! 第四位の轟チームと彼らをギリギリまで追い込んだ鉄哲チームから六人!! 最終種目に進出してもらうわ!!!

OP同士、衆人環視の中で蹴落とす人間を選びなさい! ミッドナイトが煽るがこれで本当に言い争いになれば恥の上塗りだし、最終種目で

パツとしない結果で終わればさらにドンツである。当然ながら言い争いにはならない。むしろ自分が進出することが納得できず、辞退するものが現れた。

「なら僕がリタイアする。骨抜くんの柔化に捕らわれたのは機動力担当の僕の落ち度だ。これで進出するわけにはいかない」

「なら俺もやめとく。騎馬の一人つてだけで活躍はできてねーし、タイマンなら鉄哲の方が多い。勝ち目があるやつに賭けるさ」

飯田と泡瀬がリタイアを申し出た。

飯田は自責の気持ちが強いが、泡瀬はもつと打算だ。触れているモノをくつづける“溶接”という“個性”を使うのだが、例年通りだと最終種目のガチバトルでは余計なものが何も置いていない。道具の持ち込みもなしなので、本領発揮とは程遠いのだ。なので恥の上塗りを避け、仲間思いな面を押し出すアピールを行つたのである。

「じゃあこれで決まり！　時間もないし、もう異論は認めないわ！」

「じゃあこれで決まり！ 時間もないし、もう異論は認めないわ！」

『以上16名が最終種目へ進出だあああ————!!』
一時間ほど昼休憩を挟んで午後の部だぜ！ じやあな!!

昼休憩終了。

『さあさあ皆楽しく競えよレクリエーション！』

それが終われば最終種目、総勢16名からなるトーナメント方式!!
一対一のガチバトルだ!!!』

「それじゃあ早速組み合わせ決めのくじ引きしちゃうわよ。組が決まつたらレクリエーションを挟んで開始になります！」

レクに関しては進出者16名は参加不参加は自由よ。息抜きしたい人も温存したい人もいるしね。

では一位のチームから順に来て頂戴！』

勝己からくじを引いていき、結果がモニターに映し出されていく。
最終的に組はこうなった。

第一試合	障子	V S	爆豪
第二試合	塩崎	V S	上鳴
第三試合	尾白	V S	鉄哲
第四試合	結城	V S	骨抜
第五試合	赤谷	V S	八百万

第六試合 常闇 VS 摸武

第七試合 轟 VS 桃木

第八試合 瀬呂 VS 芦戸

勝己は第一試合から騎馬戦のチームメイトとの試合だ。

友奈はB組の骨抜との試合。普通に強いんじやなく、支援タイプの強さなので圧勝か完封されるかのどちらかになるだろう。

勝己としては友奈には赤谷と戦つてもらいたかったが、別のブロツクになつてしまつたので戦うことはないだろう。

勝己が友奈と関わらせたくないのは、強いヴィランより狡い奴、卑怯な奴だ。根が善良過ぎる友奈にとつてそういうやつは天敵なのである。

しかし他人の夢を踏み潰してでも我を通す強かさを身に着けることが出来れば、辛くともやりあえるようになるかもしれない。

だから勝己は友奈が赤谷に勝てれば肩を並べて戦うことを認めるつもりだったのだが、こうなつては仕方がない。試合の中で直接気持ちをぶつけ合い、どちらが我を通すか決めるしかないだろう。

『これで決まりだあっ！

じやあトーナメントはひとまず置いといて、イツツ束の間楽しく遊ぶぞレクリエー

ショーン!』

「よーし、後のことばは忘れて遊ぶぞー!』

「余興だろおが手工抜かねえぞ! 何の勝負だろおが勝つのは大好きだ!』

一回戦1

『ヘイガイズアアユウレディ!?

色々やつてきましたが!! 結局これだぜガチンコ勝負!!!

頼れるのは己のみ! ヒーローでなくともそんな場面ばっかりだ! わかるよな!!
心・技・体に知恵知識! 総動員して勝ち上がれ!!

一回戦第一試合!

第一種目、第二種目、両方一位と強すぎるぜ! 優勝候補筆頭ヒーロー科A組、爆豪
勝己!!

対するは物静かなマスクマン! 試合中に素顔見れねエかな! ヒーロー科A組、障
子目藏!!

「よお俺対策は考えてきたか?」

「勿論だ。勝算もないままこの場に立つものか」

『ルールは簡単! 相手を場外にするか、戦闘不能にする、あとは降参させれば勝ちのガ
チンコだ!』

怪我上等! こちとら我らがリカバリーガールが待機してつからな! だが頼り過

ぎると次の試合に出れなくなんぜ!!

ただし命に関わるようなのはクソだぜ!! 当然アウトだ!! ヒーローはヴィランを捕まえるために拳を振るうもんだからな!!

そんじや早速始めよか!!

レディイイイイイ、START!!』

「小手調べだ」

開幕と同時に収束させた爆撃が放たれる。

障害物がなくある程度距離を取った状態で合図と共に戦い始める試合において、中・遠距離攻撃手段を持つ者が圧倒的に有利だ。これを凌げない者に勝己と戦闘を行う資格はない。

そして障子には戦う資格はあつたらしい。

“複製腕”で触手2本と皮膜を複製し、それを盾にして受け流すように爆撃を捌いた。

当然その代償として触手は焼け焦げ、皮膜は破れて血が流れる。しかし複製を解除すれば触手の先端が少し焦げている程度になり、再度複製すれば傷もない触手と皮膜を盾に使えるのが障子の強みだ。なお痛覚は普通にあるのでとても痛いのだが、我慢することでデメリットを無視している。

攻撃が防げているうちに間合いを詰めようと障子が進むが、勝己としては少々手緩い。

「ジャブ一発防いで氣イ緩めるたア余裕だな！」
「ツ!?」

収束爆撃の乱れ撃ちが繰り出される。

単発なら防げた爆撃もこうも多ないと防ぎきれない。触手は火傷だらけになり、前進どころか距離が開いていく。

「ツ、オオオオオオオオオオオオ！」

このままではジリ貧と判断し、障子は触手と皮膜を多数複製し、一息に間を詰めようと駆け出す。

だが先ほどまでとは威力の違う爆撃が連打に紛れ込み、態勢を崩されことになつた。

そうしてできる隙を勝己が見逃すはずもなく、威力を上げた爆撃と同時に逆の手で爆発を起こして跳躍。障子を飛び越えて再度爆破してブレーキをかけ、掠めるように障子の首を蹴り抜いた。

『障子ダウヽヽヽヽン！ クリーンヒットはしてねえみたいだが、当たり所が悪かつたか！』

『立つていられなくなるようなとこ狙つて蹴つたんだよ。プロでも出来る奴は少ない高等技術だ。大抵の奴は殴り過ぎて大怪我負わせるか、上手く当てられず反撃を受ける。この大舞台で狙つて出来る精神は大したものだ』

「障子くん戦闘不能！ 一回戦進出爆豪勝己！」

第二試合 塩崎VS上鳴。

『瞬殺!!』

あえてもう一度言おう、瞬・殺!!』

プレゼント・マイクが塩崎を「B組からの刺客」扱いして反論されたり、開始直前に上鳴が油断したままナンパしたりと問題行動のあつた試合はあつさりと勝負がついた。

塩崎の“ツル”による壁張りと拘束によつて上鳴の電撃が封殺され、一発逆転を狙つた大放電も防御を抜けずアホになつた。

相性が悪いなりに立ち回りを考えればもつと善戦できたはずだが、“強個性”ゆえの慢心と素の考えなしが合わさつてこうなつた。

それでも“個性”的出力はアピールできたし、今後の精神面での成長を期待してかなりの数のスカウトが来るだろう。体育祭の趣旨を考えれば悪い内容ではなかつたと言える結果だつた。

第三試合、尾白VS鉄哲。

「降ろせ戦えゴラアツ！」

「嫌だよ、殴り合いならそつち有利じやんか。セメントス先生も戦闘は如何に自分の得意を押し付けるかだつて言つてただろ？」

こちらも早々に決着がついた。

尾白が大きな尻尾で鉄哲を持ち上げ、そのまま場外に投げ捨てたのだ。殴り合えば本人が言う通り鉄哲が有利だつただろうが、硬いだけなら持ち上げてしまえばそれで済むのだ。

切島のような尾を巻き付けづらい鋭さを活かした斬撃や、B組の回原のように尾を彈き飛ばす手段というのが鉄哲にはなかつた。その分“スティール”によつて重量は増しているのが持ち上げへの対策だつたのだろうが、尾白なら持ち上げられる程度だつたためこうなつたのだ。

自分の強みをアピールできないまま負けた鉄哲は、上鳴とは違つていい内容の試合だつたとは言えないだろう。

そして迎えた第四試合、友奈VS骨抜の試合だ。
『続けていくぜ第四試合！』

第一種目二位、第二種目二位と爆豪に続く優等生、ヒーロー科結城友奈！
対するはB組のイケメン君、支援・連携向くな柔軟な対応力はタイマンで活かせるのか？！ ヒーロー科骨抜柔造！』

「（この前水面走りはできたし、これでもイケるはず！ でも攻撃を空振りしたら立て直しへきないし、一撃で決めるしかない！）

「（肉弾戦だけつぱいし埋まればそれで終わりのはずだけど、なんかありそうな顔してんね。速攻狙うよりじっくり行くか）

「ではスタート！」

主審の合図と共に骨抜が動き出す。

フィールド全域へと“柔化”を発動させ、相手を生き埋めにする戦法だ。空を飛んで移動できるか、コンクリートに埋められても壊して這い出すことが出来るほどに怪力でもないと攻略は難しいだろう。

これに対して友奈は思い切り地面を踏み飛び上ることで対応した。

「マジで!」

元々“ワン・フォー・オール”は出力が20%も出ていれば空気を殴り飛ばして遠距離攻撃が出来るほど強力な“個性”だ。ゆえに10%も発揮できていれば空気より遙かに重たい液状化したコンクリートを蹴つて飛びあがるくらいなら出来た。

とはいえて飛びあがれるだけで自由に動けるわけではない。骨抜側に塩崎や拳藤などの味方がいれば液面を波打たせて足を掬つて拘束できただろうし、友奈に味方がいればフォローに回つたせいで攻めきれずいずれ沈んだだろう。

だが今回は一対一の戦闘だ。援軍なんて言う要素が混じることはなかつた。

「勇者キーック！」

「ぐはっ！」

隙を見つけた友奈のドロップキックが骨抜にクリーンヒットし、そのまま失神。ミツドナイトより戦闘不能判定を受け、友奈の勝利となつた。

「まずは一勝！ 次も勝つよ！」

一回戦2

『一回戦もようやく折り返し！ 第五試合を開始するぜ！

今年度の選手の中でも指折りの万能“個性”持ち、ヒーロー科八百万百！
対！ バーサス 雄英の歴史の中でも異常な成績！ “無個性”的身でここまで勝ち上がった、サポート科赤谷海雲！』

「両者用意はいいわね？ スタ——ト！」

まず仕掛けたのは赤谷。

騎馬戦の時とは装備を換えたのか、ワイヤーではなく弾丸が打ち出されるサポートアイテムを使用しての牽制。銃弾と同程度の速度は出ていたが、発射までの動作が不自然だつたため“創造”した盾で防がれる。

赤谷もヒーローの卵相手に銃もどき程度では通用しないのは想定済みであり、盾の推進器スラスターで体当たりをし、一気に押し出そうとする。

当然八百万も無抵抗ではなく、弾丸を防いだ盾で受け流して新たに作った武器で反撃をする。

『赤谷が速攻を仕掛けるも八百万も譲らず！ 今んとこ武器の性能差分赤谷が若干有利

か!?

『八百万は毎回創らないといけないが、赤谷はあらかじめ色々と仕込んでおける。その差が出たな。』

とはいえ最初で一息に押し切れたのは失態だ。すぐに状況が変わるぞ』

実況の言う通り、時間の経過とともに状況が変わっていく。

赤谷がいくら攻めても八百万に通じなくなつていき、逆に八百万の攻撃は赤谷にガンガン当たるようになつていつた。

『おー、一方的。なんでアレからこうなんの?』

『赤谷は金の問題でサポートアイテムを手にしたのは入学してから、しかもこの一月はサポートアイテムの調整に費やされている。入学前的基本となる図面は出来てただろうからある程度は時間をかけずに済んだだろうが、自分で使う訓練をする時間は足りなかつたんだろうな。』

逆に八百万は幼いころから“個性”で物を創る訓練を続け、創った物を使いこなす訓練も並行して行つていただろう。

初っ端こそ奇襲で優勢を取れたが、仕掛けがバレてこれまで積み重ねてきた物の差が出てくんなどよ』

努力は無才、環境に恵まれない者だけが行う物ではない。むしろ才能や環境に恵まれ

た者こそが効率よく行えるのが努力だ。赤谷の執念はその差を覆すにはまだ足りなかつた。

反撃を許されずじりじりと攻められ続け、順当に八百万が勝利して第五試合は幕を閉じた。

『とりあえずお疲れ！ ナイスファイトだつたぜ二人とも！』

『八百万は特に言うことないな。赤谷は来年が本番だ。どれだけ道具の扱いに慣れてるかが鍵になるだろう』

続く第六試合、常闇 VS 摸武。

中距離からの攻撃手段を持ち、ダークシャドウを盾にすることで防御もできる常闇。注目すべきモノが他にない状態ではモブキャラもメインキャラもないため“個性”が全く機能しない摸武。

何か波乱が起きる余地もなく、ダークシャドウが摸武を持ち上げて場外に置いて終わつた。最も盛り上がらない試合だつただろう。

そして第七試合、轟V.S 慄木。

『もうじき一回戦も終わる第七試合！』

第一種目は良かつたが、第二種目じやなんかパツとしねえ！ 親父も見に来てんだし
気張ろうぜ、ヒーロー科轟焦凍！

対するは第一学年一の強面！ ヒーローに成れりや 「ヴィランっぽいヒーローランキ
ング」 トップ10入り間違いなし、普通科慄木恐介！』

「……（黙つていれば言いたい放題言いやがつて！ 言われるまでもねえ、ここから全て
お母さんの力
氷だけで圧倒する！）

「……（俺の“個性”は物理的な攻撃性能が全くねえ！ 相手は遠距離攻撃持ちだし、大
技を空振りさせて一気に押し出す。それしか勝ち筋はねえ！）」

どちらも無表情だが考へてゐることは真逆だ。

慄木は相手を倒す算段を考えているが、轟は父親の鼻を明かすことばかり考へてい
た。

実力差を考慮すると仕方がない態度なのかもしれないが、油断、慢心が抜けきつてい
ない。試合直前に「言つた通り片方だけでは限界が来たな。いい加減子供染みた反抗は
やめろ」と父親に言われたことで完全に意固地になってしまっている。

「それではスタ——ト！」

真っ先に慄木が氷側に向かつて駆け出した。

「（普通にやりあつたらフィールド全体を氷で埋め尽くされかねない！　ならまずはこつちに走りながら最大出力で“恐怖”を叩き込む！　発動したら即解除して逆に跳べば、相手にはまだ左に進んでいると錯覚させられるはず！　んで過剰反応して盛大に空振つた所を場外まで運んでやる！）」

慄木の作戦は間違っていない。というより“個性”的攻撃性能でも身体能力でも技術でも負けている以上、これ以外に勝ち筋はなかつただろう。

「さすがにこれはマズイね」

フィールドを構成するコンクリートがせり上がり、轟と樅木を隔離する。一瞬遅れてフィールドが氷と炎で埋め尽くされた。

フィールドの半分を埋め尽くし、真上に伸びていく氷塊。残る半分を埋め尽くし、同じく真上に登つっていく炎。その中間点では水蒸気爆発が発生し、盛大に上空へと噴出していった。

「二人ともやり過ぎ。プレゼント・マイク先生は残虐ファイトなんて言つたけど、ヒーローの卵なんだがらもつと加減しなさい」

止めに入つたセメントスが二人をたしなめるが、恐怖に負けて全力で炎を使つてしまつた轟も、死にかけた慄木もそれどころではなかつた。

「はあっ、はあっ、はあっ！（使わねえつて決めてたのに……！） 気圧されて使わされた、こんなどこにでもいるような奴に！」

「（これが死の恐怖……！ すっげえなあオイ腰が抜けて立てねえや!! これを再現できるようになれば、俺はまだ強くなれる!!）」

片や自分の弱さに打ちひしがれ、片やこれから自分が獲得できるであろう恐怖に打ち震えて破顔していた。

しかしどちらもこれ以上戦えそうには変わりなく、教師たちは体育祭の進行させていく。

「ミッドナイト。二人とも戦えなさうですが、主審としてどう判定します？」

「なら救けられた慄木くんの負けとすべきでしょう。」

「と言うわけで、轟くん二回戦進出！」

こうして轟はまたも敗北感を抱いたまま勝ち進むこととなつた。

二回戦

『さあて次はいよいよ第二回戦！　ここからはタイマンでも強い奴しか残つてねえぞ！

今回の体育祭トップの成績！　ヒーロー科の爆殺王、爆豪勝己！

B組唯一の生き残り！　綺麗な花には棘がある、塩崎茨！』

「それではスタ——ト！」

試合が始まるも、展開は一方的な物になつた。

塩崎がツルを伸ばして壁を作つても爆破で焼き尽くされ数秒も持たず、迂回させて襲い掛かつても障害物が何もないフィールドでは不意を打てない。結果、勝己の常軌を逸した反応速度によつて全て焼かれ迎撃される。

また塩崎の“ツル”はデメリットもなく持久戦も可能な万能“個性”であり、凌ぎ続ければいずれ逆転できるという算段もあつた。だが勝己もまた過剰な火力を出さない限りデメリットがない“個性”であり、そのタフさは学年一である。相手が悪かつたというほかない。

じりじりと塩崎が押し込まれ続けていく中、実況のプレゼント・マイクが違和感を感じた。

『……なんかやたら時間がかかるってね？ 塩崎も一年としちやすげえハイレベルだがよ、爆豪ならドカンと場外に押し出せるんじや？』

『出来なくはないだろうが、塩崎の粘り方次第で加減を失敗する可能性もある。でもつてツルを焼き尽くして場外まで吹き飛ばす火力だと体操服じやあつという間に燃え尽きるぞ。』

体育祭が興行だつてのを理解してるからこそその振舞いだな。あいつは言動は荒っぽいが、空気を読んでやり過ぎないから担任としては楽で助かる』

「余計なこと言わねエでいいんだよ！！」

「この大舞台で手加減していたとは事実ですか？ 酷い侮辱です！」

「やらかしたら俺が社会的に死ぬだろうがふざけんじやねエぞクソアマアアアアアツ

!!!!

ハイレベルな攻防が一転、ただの言い争いになつた。特に勝己の表情は必死である。

全国放送の雄英体育祭で女子の服を焼き払つたなど記録に残れば、勝己にとつて大きな汚点となるだろう。体が火傷だらけになつていればさらに批判が増すことも想定できる。N.O. 1ヒーローになる為にそんな失態を犯すわけにはいかないのだ。

観客席ではプロヒーローの一部が「あるある」と笑い、頑固で融通の利かない対戦相手の時に解説されてしまつた勝己に同情していた。

「どうしても本気は出していただけないようですね。

では私はリタイアしますので、後日コスチュームを装備し再度試合を挑ませていただきます。敗れるにしてもあなたの全力を体感し糧とさせていただきたいので」
「……ああ、もうそれでいい！ 試合に関しちゃいつでも受けるが、他の奴の訓練相手とかもやれよクソが！」

「わかりました。ではそういうことでミッドナイト先生、お願ひします」

「塙崎さんリタイア！ 爆豪くん三回戦進出！」

『さつきはちょい締まんねえ終わり方だつたが次こそは！

“強個性”対決から一転、武術使い同士の対決だ！ 尾白ＶＳ結城！』

『超常黎明期以降、武術は一気に廃れたから結構レアな試合だ。派手さはないかもしないが、わかるやつには見物だぞ』

武術とは効率よく体を動かし相手を倒すための技術だ。

しかし超人社会な現代、体のサイズや手足の数、特殊能力が異なるなどよくあること。

効率のいい体の動かし方や制圧の仕方も、人によつて大きく異なる。そのせいで多くの武術は「実用性のない物」になつてしまつたのだ。『無個性』や異形要素の少ない『弱個性』向けにわざかに残つただけマシだろう。

そしてそんな「役に立たない物」を鍛えて大舞台に上つた者同士でのガチバトル。雄英体育祭でも早々見れない好カードだ。

「ではスタ——ト！」

双方合図と共に駆け出す。

先手を取つたのは尾白。友奈にはない巨大な尻尾で足元を薙ぎ払う。

身体能力は“ワン・フォー・オール”的分友奈の方が明らかに高いが、リーチと重量は尾白に分がある。転倒はしないものの、尾の強打で脚が止まる。

「（跳んで避ければ狙い目だつたけど、そううまくはいかないか！　それでも脚は止まつた、ここで畳みかける！）」

尾を戻すと同時に体を押し出し、拳で殴り、脚で蹴り、尾を叩きつける。一般入試の鉄製ロボットごときでは何度もスクランプになる攻撃だが、尾による攻撃以外では友奈に有効なダメージは見られない。呆れるほどの頑丈さだ。

逆に反撃で繰り出された友奈のパンチとキックを尾白は尾以外では完全には防げない。“個性”的差が大きすぎるためだが、それでも凌げている尾白を褒めるべきだろ

う。

初動こそリーチの差で尾白が制したものの、そこ以外は完全に友奈のペースで試合は進む。

そして遂に尾白が防御に使つた尾が友奈に掴まれてしまつた。

「勇者、投げつ!!」

腕力に任せて思い切り振り回し放り投げる。

尾白もヒーローの卵だけあり、空中で態勢を立て直しスタジアムの壁に器用に着地する。普通なら戦闘続行は十分可能だが、ルール的には決着だ。

「尾白くん場外！ 結城さん三回戦進出！」

『地味ながら見ごたえのある試合だつたぜ！』

『単純な身体能力強化の結城はともかく、尾白は完全な人型ではない分まだ粗削りだったな。来年はさらにいい試合をしてくれるだろう』

二回戦第三試合、八百万ＶＳ常闇。

二回戦第四試合、轟ＶＳ芦戸。

この二戦は「中・遠距離攻撃持ちが圧倒的に有利」という面がもうに出ることになる。

八百万は“創造”する間もないダークシャドウの連撃に倒れ、芦戸も溶解液を出す以上ので速度で凍らされリタイア。波乱を起こす余地を残さない速攻だった。

『これでベスト4が出揃つた！ これで受賞は確定だが、それで満足なやつあいねえよな？ 最高の試合を期待してるぜ!!』

準決勝戦 1

『さあさあいいよ準決勝！

今でも忘れられねえヘドロ事件の解決者！ コンビが分かれて対決だ！ 爆豪 VS 結城!!』

「（皆すつごく強かつた。たぶん“ワン・フォー・オール”じやなきや勝てなかつたと思う）」

友奈は才能ある少女だ。

“無個性”ゆえに身体能力で劣り目立つことはなかつたが、体を動かすセンスが特に高い。超常黎明期以前なら様々なスポーツで万能な選手として引っ張りだこだつただろう。

だが彼女がいるのは雄英高校、日本で最もレベルの高いヒーロー養成校だ。そこにいるのは才能あふれるヒーローの卵ばかりであり、友奈の才能でも霞んでしまう。

“個性”が“ワン・フォー・オール”ではなく、親から受け継いだ普通レベルの“個性”なら勝てなかつた、という自己分析に誤りはないだろう。

「（それでも勝ち上がつてここまで来れた。もう私だつて戦う力がないわけじやないん

だ。前は分担するしかできなかつたけど、今なら一緒に戦えるんだから」

雄英に入学して初見殺し“個性”的危険性を実感した。

今まで見えていた以外のヴィランの脅威について学んだ。

多くのヒーローに守られて見えなかつた現実を直視してみると、勝己と友奈では危険度が違ひ過ぎて「役割分担」だとはもう思えなかつた。

「(だからここでかつちやんに認めてほしい。私はかつちやんのサイドキックなんだつて胸を張つて言いたいから)」

「スタ——ト!!!」

ミッドナイトの合図と共に友奈が駆け出す。

友奈に空中戦を行える能力はない。勝己が頭上を取り、そこから爆撃を連打してきたらもう詰みだ。一方的に攻撃され、反撃しようと飛びあがれば場外に吹き飛ばされてお終いである。

「(戦つた後のことを考える余裕なんてない！　今出せる力、全部出し切る！)」

“ワン・フォー・オール”の出力を15%程度まで無理やり上げる。限界を超える出力を出した代償に体は軋み悲鳴を上げるが、感覚的に試合中は維持できそうだ。雄英体育祭は興行だということが影響しているのか、勝己が先手を取るも飛び上がることはせずに足元めがけて収束爆撃を放つ。友奈はそれを横飛びで躰しながら距離を

詰め、勢いを乗せた拳を振るう。

「温イんだよ」

爆破の反動で加速された裏拳が友奈の腕を弾いて逸らす。

そのまま腕を取られ投げられそうになるが、勝己相手に体が宙に浮けばそのまま着地することが出来ず負けることが確定する。友奈はとっさに腕を振り切りどうにか投げられずに済んだ。

だがそこへ追撃の足払いが繰り出される。跳んで避けることはできず、転倒こそしなかつたものの体勢が崩れた。

そこからはもう一方的だ。勝己が攻め続け、友奈は負けないように防ぐだけで手いっぱいであり、じりじりとフィールドの端に追い詰められていく。

グラントリノ直伝の先の先を取ることで相手に何もさせずに倒す格闘術だ。彼はコレで学生時代のオールマイトを完封し、一年に渡つてボコボコにし続けトラウマを植え付けた。

勝己はコレを「ズバ抜けた才能」「高すぎるほど高いモチベーション」「モチベーションの高さを空回りさせない環境」の三つに恵まれたことで自分用に調整、習得していた。体育祭直前に習得した走馬燈状態も合わさり、ただ速くてパワフルなだけなら最早敵ではない。

「かつちやんが強いのはよく知ってる！ 隙を窺つたりしてたら見つからぬまま押し切られる！ 強引にでも動いて隙を作らないとダメだ！」

勝己が友奈をよく知るよう、友奈も勝己をよく知っている。

勝己は大技の打ち合いでねじ伏せるような勝ち方も好きだが、相手の弱みを突いて何もさせずに圧倒する勝ち方も好きなのだ。今やっているのは後者であり、耐えているだけで隙など見付かりはしない。どうにか友奈の得意分野である力比べの流れに移す必要があつた。

「一瞬だけ „ワン・フォー・オール“ の出力をさらに上げる！ 負担は大きいけど、今は仕切り直ししなくちゃ！」

「あ、れ？」

そしてそういう強引な行動で生じる隙を狙うのがグラントリノ流だ。

友奈が力を入れるため呼吸を挟んだ瞬間、顎を裏拳が打ち抜いた。友奈の視界は歪んで揺れ、まっすぐ立つことすら出来ていない。

「これじゃ認められねえな。やつぱ友奈は人助けの方が向いてンだ。納得いつてねエみてえだが、危険性とかじやなくて重要性とか貢献度で考えてくれ」

勝己が友奈を突いて場外へと押し込んでいく。友奈は転ばないようにするのが精いっぱいだ。

「（まだ終わってない、早く立て直さないと！　じゃないとかつちやんが一人で行っちゃう、それは絶対嫌だ!!）

友奈は気合いを振り絞り立て直そうとするが、体は付いて来ない。

感覚を取り戻すことがないよう調整しながら勝己は友奈を押し出していき、ついにフィールドの端までやってきてしまった。もうほほ詰みだ。

それでも友奈は諦めない。必死に打開策を考え続け、不意に全てが停止した。

「ツ??」
!!

靄に包まれた人影達が友奈を見据える。なんとなくだが友奈には彼らが歴代の“ワ
ン・フォー・オール”継承者だと確信できた。

彼らの中から代表者らしき人影が前に出て、口元の靄が晴れ言葉を発した。

『偶然とはいえオール^人_日マイトも凄い後継を見つけたものだ。他者から授けられた力を扱
う適正が飛びぬけて高い。

力をストックし過ぎて至つてしまつた“個性”特異点も、君なら乗り越えられるだろ
う。大丈夫だ、僕たちも支える』

準決勝戦2

友奈から黒い何かが放たれる。

“ワン・フォー・オール”発動中に体から何かが漏れることも稀にあつたが、その場合は桜色の雷光のような光だ。どう見ても暴走していた。

「クソがツ！ 何が起きてやがる!?」

至近距離にいた勝己は一度光に弾き飛ばされるが、すぐに立て直して光を爆破する。爆風を受け黒い何かは撓み、一部だが弾き飛ばせた。感触からして常闇のダークシャドウ同様の不思議物体であり、物理攻撃は有効なようだ。

相澤アツ！
すぐに降りてこい！
俺がコレどけつから
"抹消"しろ！！
寝かして暴

走続いたら友奈がヤベエ!!!

『もう向かってる！

つーか対処は俺ら教師がやるから爆豪も退h――』

大丈夫ッ!!

勝己と教師たちが対処に動くが、友奈の声がそれを遮る。

「こんなので終わつたりしない……！」出来るのに人任せで守られてるだけなんて、

ヒーローじゃない！ 私も、ヒーローになるんだ!!」

友奈の叫びと共に黒い何かが元の桜色の輝きを取り戻していく。

そのまま友奈の背後で輪になり、巨大な腕を象る。

体に収まらず無秩序にあふれ出していたモノはすでになく、完全に制御下に置いたのが見て取れた。

「待たせてゴメン！ ここからが本番だよ!!」

「……はつ、言うじやねえか！ おい審判！ 続行すンが文句ねエな?!」

「制御はできてるみたいだし、視聴率ヤバいことになつてるらしいから止めらんないわ

！ イレイザーはこつちで止めとくから再開しなさい!!」

やけくそのように下された判決を聞いて、戦いが再開される。

先手を取つたのはまたも勝己。焼き直しのように収束爆撃が友奈の足元を狙うも、今度は空を飛んで回避された。

「勇者パーソンチツ！」

「真っ直ぐ過ぎンだよッ！」

唐突に得た飛行能力に周囲は驚くが、勝己は気にせず反撃する。

一発は巨腕の迎撃、もう一発は友奈への直接攻撃だ。

巨腕への攻撃は形を崩し威力を削ぎ落すも防ぎきるには至らず、友奈への攻撃は突如

現れたデフォルメされた牛っぽい謎生物が展開したバリアに弾かれた。

「硬工なオイツ！ ならこうだ!!」

爆撃の反動で距離を取つて友奈の攻撃を回避し、上を取つた。

そのまま爆撃を連打して勝己が上、友奈が下の状況を維持しつつ圧倒的な攻勢に出る。

友奈も当然やられるがままなんてことはなく、巨腕でラッシュを叩き込み自由な軌道で飛べる利点を活かして上を取ろうとする。

「オラアアアアアアアアアツ！」

「やあああああああああつ！」

爆撃と拳撃の応酬が繰り広げられる。

戦況は友奈の有利。じわじわと勝己は上へと押し上げられていく。飛行の自由度の差は勝己のセンスと先に上を取つたことで補われているが、『個性』の出力差がもろに出ていた。

「やつぱ起きてたみてエだな、『個性』の覚醒！ ジジイの話じや火事場の馬鹿力らしこれ、ここで起こせるたア予想外だ！」

個性因子誘発物質（ディオ・トリガ）——通称“トリガー”——という違法薬物がある。名前の通り投与することで“個性”を強化する薬物だ。

脳内麻薬の過剰分泌説や強い意志 자체が“個性”的活性剤として機能する説など諸説あるが、死に瀕してもなお諦めずヴィランを打倒し民衆を守ろうとするヒーローが同様の効果を起こすことが稀にある。これを“個性”的覚醒と言い、歴戦の大物ヴィランには「手負いのヒーローが最も恐ろしい」と感じる者もいる所以だ。

これによつて友奈は“ワン・フォー・オール”を「力をストックし譲渡できる」“個性”から「力をストックし、解放、譲渡できる」“個性”への成長をこの場でやつてのけた。自覚はないがコレで個人では制御不可能となる“個性”特異点を乗り越え、どれだけ引き継ごうと制御できる範囲で收められる“個性”になつたのだ。

なおどうやつて起こしたか友奈本人に聞けば「根性！」とか「なせば大抵なんとかなる！」などと言つた答えが返つてくるだろうが、そう簡単に起こせる現象ではない。本來なら死に掛けて後がなくなつてようやく出来ることなのだ。

「(コレが出来るくれ)強い決意なら俺にや止めね(エ)な。認めるしかねえ、俺の負けだ。

なら目標変更だ。友奈が戦場に出てもヴィラン共がアホなこと考えれねえくらい絶対のヒーローに俺がなりやいい。そのための手段だつて今示されてんだ問題ねエ。

友奈には出来た。オールマイトだつて出来たらしい。凡百なヒーローでも追い詰められりや出来たんだ。なら俺に出来ねエ理由は一つもねえ!!

自分の原点^{テメエ}思い出せ!^{オリジン} そんで気合いと根性と魂込めて、いつちゃん気に入つた言葉を叫べば今ならイケる!!」

勝己の原点。

友奈を助けようと思つた時、オールマイトの勝利する姿に憧れた時。どちらもスタート地点と呼べるだけの物だが、原点は違う。

友奈にヒーローだと言つてもらつたあの時だ。あの時から勝己の夢に芯が通つた。自分で目指し、友奈がヒーローと呼んでくれた在り方を貫くため、どんなに高く厚い壁でもぶち壊して夢に向かつて突き進むのみ。

「Plus Ultra!!」

「うわあっ!?」

いきなりの大爆発にたまらず友奈も押し戻される。

そして勝己の姿を見て、もう一度驚くことになつた。

「かつちやん大きくなつてない……？」

トリガーには使用者の肉体を異形化させ、同時に大きくするものがある。勝己の覚醒の仕方はそれに近かつた。

背丈も含めて体が一回りは大きくなり、体温は上昇し、手の甲に爆ぜる炎のような癌が浮かび上がつていた。そして何より大きいのは『個性』の出力上昇と、出力器官の追加だ。

「細けえ事気にしてる暇はねエぞ！」

勝己の足の裏で爆発が起きる。掌で起こすソレに比べれば劣るが、覚醒前の爆破に迫る火力は有つた。

その反動で急降下し、友奈に大爆発を叩きつける。

「ぐうつ……！」

牛のような謎生物がまたバリアを張つて防ぐも、防ぎきれず友奈にダメージが入り、下に押し込まれた。

勝己はと言うと爆発の反動でさらに高く飛び上がつていた。

おそらく次に勝負を決める大爆撃を放つためだ。回避できるように打つことはないだろうし、これで決着がつく。友奈としても大火力の打ち合いは望むところだ。

勝己は足の裏からの爆破と掌からの爆破で渦巻くように急降下してくる。

友奈もま

た迎え撃つべく拳に力を集めて上昇していき、ついに互いを射程に収めた。

「榴弾砲着弾!!!」

「勇者、パーソンチ!!!」

準決勝戦3

「……………はっ!? 試合は!?」

友奈が前触れもなく飛び起きた。

周囲を見渡すと、すぐ近くにオールマイトがいた。マツスルフオームではなくトゥルーフオームの八木さん形態だ。

「ああ、目が覚めたかい。リカバリーガール！ 結城少女が目を覚ました！」

「今行くよ」

「俺も行かせろやッ！」

「あんたは検査が済んでからだよ！ 大人しくしてな！」

勝己とリカバリーガールの怒声が響き、リカバリーガールだけが友奈のところにやつてきた。

「どこが痛むところはあるかい？ ザッと検査した感じじゃ問題なさそうだつたけど」「あ、はい！ 大丈夫です！ それで試合はどうなつたんでしょうか？」

「あんたと坊主の大技打ち合いは坊主の勝ちだつたよ。地の利を得てたのが大きかつたね。

それであんたはガス欠で気絶。坊主があんたを拾つて降りて決着だよ

「あう……負けちゃった……」

「まあ勝敗と認めるかどうかは別さ！ 爆豪少年！ 判定をどうぞ！」

「この状態で言わせる気か!? せめて拘束解けやコラアツ!!」

勝己の叫び声だけが響く。どうやら勝己は移動できない程度には拘束されているらしい。

「検査終わつてないのに解けるわけないだろう？ いいから早く言つたげな！」
「ぐぎぎ……ッ！」

……あんだけのことが出来たんだ。認めるしかねえ友奈の勝ちだ』

「H A H A H A H A H A ! 良かつたじやないか結城少女！ 君の意志が爆豪少年の決断を曲げさせたんだ！ これは誇つていひ——つてどうしたんだい結城少女!?」

「あ、いえ、ホツとしたら気が緩んじやつて……。良かつた、本当に嬉しいです」

力が抜けて友奈はベッドに倒れ込んだ。もう一度起き上がる元気はなさそうだ。

まあ“個性”的覺醒は死に掛けてようやく起こせる非常事態、一度落ち着けば動けなくなるのが普通であり、未だピンピンしている勝己のタフさが異常なだけだ。

「それであの、かつちゃんはなんで拘束されてるんですか？」

「それが試合が終わつても体が元の大きさに戻らなくてね。“個性”的發展は覺醒で感

覚掴んでいつでも使えるようになつたつてのもよく聞くんだけど、体格とかは落ち着いてら戻るのが普通なんだよ。レアケースだし体育祭続行するなら一応健康診断しておべきつてなつたのさ。

まあたぶん体力が有り余つてたせいでそのまで定着したとかだろうし、今のところ悪い所は見つかってないから問題ないと思うよ」

「そうですか」

待つことしばし、機械でデータを取り終わつたようで勝己も解放された。

改めて見てみるとやはり大きくなつてている。180cm前半くらいにはなつているだろうか。

「かつちやんとの差が大きくなつた……。やつぱり私ももうちょっと身長欲しいな」「友奈は中二の頃からあんまり背が伸びてねえしな。まあじわじわとは伸びてるし、これからだろ」

「爆豪少年、お疲れ。どうだい調子は?」

「もう違和感もねえし、戦う分には問題ないぜ。ただ癌は体が冷えたら消えてた。体温上がつて本調子になつた時だけ浮かび上がるつぽいな。後は腹減つてるくれえだ。

それよか体がデカくなつた分、『個性』や身体能力の伸び代もデカくなつたつて実感がある。トレーニングしてエ」

「試合は金の問題が絡むから許可するけど、特訓とかはデータの解析結果が出るまではやめときな。勝手にやつたら本気で怒るよ」

「……うつす」

リカバリーガールのガチ過ぎる目に思わず勝己も一瞬で落ち着かされた。

オールマイトは空気を入れ替えるべく、部屋の隅にあつたモニターを友奈も見れる場所に移動させた。

「ま、まあ試合でも見てイメトレでもしてよう。空中戦用カメラ設置とかで時間稼ぐとは言つてたけど、ここから会場に戻ると終わつてるかもしねないしね」

「？ ここスタジアムの出張保健所じやないんですか？」

「爆豪少年の検査が出来る設備があるの、校舎の保健室だけなんだよ。結城少女も連れてきたのはついでだね。起きた時、爆豪少年いた方がいいと思つたし」

雑談をしながらモニターのチャンネルを三年生の試合から一年生の準決勝第二試合に切り替える。

モニターには氷に埋め尽くされたフィールドと、その上で氷山に登りながら戦つている轟と常闇が映されていた。

「おおーーー派手！・見ごたえある試合だね！」

「上は常闇が取つてんな。観客からは轟有利に見えるかも知れねえが逆だなコリヤ」

「氷使いは寒さに耐性がある場合が多いしね。轟少年は片方だけだと逆だから、このままだと常闇少年が粘り勝ちそうだ」

ダークシャドウは影っぽい謎物体故に凍らない。周囲を氷で閉じ込められようと、伸縮自在なので隙間を作つて脱出も容易だ。大氷撃が繰り出されても、上に登つて乗り越え反撃に移つていた。

常闇はダークシャドウを上手く盾に使いながら、頭上から強打を叩きつけ続ける。轟がこの状況を打破できなければ、そのまま常闇が勝つだろう。

「しかしその割には常闇少年に苛立ちが見える。爆豪少年、結城少女、何か心当たりはないかい？」

「それは、えつと……」

「友奈は言いづれエみてエだから俺が言うが、本気で挑んで舐め普しての相手にギリギリで勝ててもクソほども嬉しかねエだろ。轟にも事情はあんただろうが、知つたこつちやねエムカつくだけだ」

他人と競うことなど碌にやつたことがないオールマイトには理解しづらい感情だつたが、勝己にはよく理解できた。相手が自分のことを無視したまま、形だけの勝利を恵まれても納得など出来はしない。怒り狂つて場外乱闘を始めかねないくらいの屈辱だ。

それは真摯にヒーローを目指す常闇にとつても同じであり、ついに苛立ちに耐えかね

たのか怒声をマイクが拾い始めた。

『ふざけた真似をするのもいい加減にしろッ！』

『炎も使えば俺など圧倒できるだろう！ なぜしない!?』

『氷だけで勝つならいい！ 俺が未熟だつただけだ!! だが負けなどしたら絶対に許さんぞ!!!』

『何のためにここに立っている!? 答えろ轟イツ!!!』

怒声と共にダークシャドウの攻撃がさらに苛烈になつていく。

と言うより轟の動きが鈍り防御に意識を割かなくてよくなつた分、積極的に攻めているだけだ。

もはや誰が見ても勢いは常闇にある。このまま勝負が決まるだろうと思つたその時、轟が最後の反撃に出た。

『黙れええええええええ!!!!』

今轟が打てる最大規模の氷撃が放たれる。

常闇は当然回避したが、氷がたくさん創られ過ぎているのがマズかった。ぶつかり、砕け、轟は勿論上を取つていた常闇も氷山の崩落に巻き込まれ押し潰された。

『セメントス！ 救助を!!』
『もうやつてます!!』

「ああっ!? 常闇君も轟君も大丈夫かな!?」

「最低限の防御や受け身はやつてんだろ。心配いらねエよ。それよかダブルノックダウンの場合はどうなんだ?」

「ダブルノックダウンの場合は後で簡単な勝負して決めるよ。とはいえあの二人は得意分野が噛み合わないし、じやんけんとかの運試しになるんじゃないかな?」

「延長戦は無しか。ならもういい」

「対戦相手は気にならないのかい?」

「どつちが相手でもねじ伏せて勝つだけだ。これ以上情報入らねえなら見てても変わんねえよ。

それより服がきついし腹減った。試合前に服調達してなんか食いてえんだよ。空きつ腹じや力が出ねえ」

連戦となると第二試合の勝者が不利過ぎるので決勝戦まで時間はあるが、万端の準備を行うには少ない。両方の対策をイメージしておけばいいだけだと勝己は保健室を出でていこうとする。

その勝己に友奈が最後のエールを送った。

「かつちやん。見てて楽しい試合、期待してるね!」

「ハツ、軽く面倒なこと言つてくれんな。まあいい任せとけ。ヒーローらしい完全勝

利つてやつを見せてやらア！」

準決勝戦 4

「えー両者とも目を覚ましたので、ただいまより延長戦を行います！」

開始前に言いたいことはあるかしら？」

「延長戦は必要ない。俺が辞退する」

轟が何かを言う前に、常闇が勝ち残りを辞退した。

轟はと言うとまた勝てないまま勝ち残ることになるのかと言う悔恨と困惑が表情に
出ている。

「へえ、ここまで勝ち上がつて辞退。なぜかしら？」

「あれだけ言つておいて炎も使わせられず、勝利も出来ずに勝ち残ろうとは思わん。そ
れより轟に挽回のチャンスをやつてほしい。級友を見放したくはない」

「そうことならオッケーよ！ 辞退を認めます！」

轟くん、次がラストチャンスよ。氷だけで挑むにしろ、両方使つて戦うにしろ、悔い
が残らないようにね。

ただし！ 雄英の教師としての助言よ！ ヒーローが負ければ民間人に被害が出る
わ！ そしてヴィランはヒーローの事情なんか考慮しない！ ヒーローとしてこだわ

りを貫きたいなら、まず勝ちなさい！ 以上よ!!』

『ミッドナイト先生のありがたい言葉も送つたし準決勝は終了～～ツ！
しばらく休憩を挟んで決勝戦を開始するぜ!!』

「どんな気分だ？」

俺以外からも散々言われていたようだが」

轟が無言で退場すると、またエンデヴア―が待ち構えていた。

轟も一回戦前と変わることなく恨みの籠つた目で睨みつけて黙り込む。いつもの反応といえばそれまでだが、さすがにエンデヴア―も困り顔になつた。

「黙つていてはわからんぞ。……まあ答えたくないなら答えなくとも構わん。俺が言つていたことは十分に体感出来たはずだ。

お前は誰よりも強い力を秘めてはいるが、現時点では決勝戦は敗色濃厚。それも全力を出してだ。片方だけなら惨敗だろう。

そういう年頃なのはわかるが、わけもなく反抗するのはもうやめろ。わかっただな?」「ツ、ふざけんなっ! 誰がお前の力なんか使うかッ!! お母さんを虐めたお前のなんかつ!!」

体育祭を通して今まで感じたことがない程のストレスを受けて、初めて轟が内心をぶちまけた。

それを聞いたエンデヴア―は困惑をさらに強めた。本当に反抗期で意味もなく反抗しているだけだと思つていたからだ。

「……それが反抗の理由なのか? てっきり焦凍はアレのことには関心などないと思つていたが」

「なんだと!? なんで俺がお母さんに関心がないって——」

「母^{アレ}さんの見舞いに行つたこと、一度もないだろう。子に意味もなく危害を加えるなど、親失格だと思われても仕方ない。だからそうだと思っていたが、違つたのか？」

エンデヴァーが轟焦凍の父、轟炎司として尋ねる。

彼からすれば、というか世間一般からすれば「夫婦喧嘩の八つ当たりで子供に熱湯を浴びせ、顔に消えない火傷痕を付けた」母親——轟冷は親失格だ。そして被害を受けた子は嫌つている様子もないが、関わろうとも一切しない。炎司が興味がないと判断したのも仕方ないだろう。

そんな炎司に、轟は怒りと共に言い返した。

「お前が言うのか！　お前なんかがお母さんのこと親失格だと!!」

「？　言いたくはないが、言うしかないだろう。冷は親としてやつてはならないことをした。

あんなことをした原因は俺なのだろうが、それなら俺に熱湯を浴びせれば良かつたのだ。それなら教育方針を巡る夫婦喧嘩で済んでいたものを」

「ツ、！」

母親のやつたことは事実なだけに、これには轟も言い返せず黙り込む。

一方炎司は焦凍を見て本当に冷を恨んでいるわけではないと理解し、和解策を提示した。

「だがお前が冷を恨んでいないのなら、俺も冷に歩み寄つてみよう。事ここに至つては喧嘩する理由ももうない」

「……機嫌取りのつもりかよ」

「違う。お前が冷を恨んでいるかもしれないと遠慮していたのをやめるだけだ。

冷とは夫婦として長年連れ添つてきたし、あれだけのことがあつても離婚はしなかつたんだぞ？ それなりに愛情はある」

具体的には初めて会つたばかりの頃、冷が一度だけ「あの花が好き」と言つたことすら今でもきつちり覚えているくらいには愛情を持つて接している。

どうしても譲れないところで意見が噛み合わなかつたばかりにああなつてしまつたが、アレは炎司としても不本意な結果だつたのだ。

「なんだよそれ……。俺が一体どんな気持ちで……！」

「言いたいことがあれば口に出せ。俺は器用な方ではない、言わんとわからんぞ」

炎司は少し轟の返事を待つたが、何も言つてこないので諦めてヒーローのエンデヴァーとして後継者に声をかけた。

「自分で気付くべきことだと思いこれまで言わなかつたが、もうそ者はいかん。この場で言つておこう。

焦凍、お前は誰より強い力を秘めている。俺と冷の最高傑作だ。

だが俺から受け継いだ炎と冷から受け継いだ氷。それらは他の誰のものでもない、お前の力だ。まずは己を受け入れろ。それがお前の始まりになる。以上だ。さつさと控え室に行け。試合までには心の整理を付けておくんだぞ』

決勝戦

『いよいよラスト！ 雄英一年の頂点がここで決まる！

雄英体育祭一年の部、決勝戦！！ 爆豪ＶＳ轟!!!』

「なんか表情変わつてんなア……？ 常闇との試合の後になんかあつたか？」

「……なんでそんなことを聞く？」

「俺ア学級委員長様だぞ？ クラスの問題児のことア多少は気に掛けとるわボケ」

試合開始直前の舌戦。

轟からすれば挑発に感じるだろうが、勝己にとつては真面目な採り合いだ。

友奈のリクエストは「見ていて楽しい試合」だ。

つまり勝己が一方的にボコるんじやダメだし、挑発して怒らせ無理矢理全力を出させるのもアウト。轟が自発的に全力を出したくなるように誘導しないといけない。己の道を突つ走り、周りはそれに付いて来いというタイプの勝己には難しい要望だ。

だがヒーローとしてオールマイトを超えんとするなら挑むべき問題でもあつた。夢へとさらに突き進むため、友奈が用意してくれた壁を避けて通るという選択肢はない。「（ま、凡俗どもを奮い立たせるよかマシだわな。あんだけ言われてまだここに立つてン

だ。なんかしら抱えてるモンはあるはずだし、今だつて燐ぶつてるだけですぐに燃え上がるに決まつてる)』

『両者準備は万端だなツ!! 待つたは無しだ! 審判、合図頼むぜ!!』

「スタ――ト!」

先手は轟、常闇戦、芦戸戦同様に大氷撃で勝己を氷漬けにしようとする。障害物がなく距離を取つて始める決闘での安定手だ。

だが勝己相手にこの程度で「距離を取つている」という認識は甘い。

事前に裸足になつて入場しており、手足四か所からの爆破で一気に氷を飛び越え間を詰める。

「相手見て手は選べバアカ!」

両手から爆撃を放ち轟を吹き飛ばす。右半身はギリギリ氷で覆つてガードしていたが、左はもうに入つた。それでもほほ熱がつていなああたり、熱に対する耐性はあるのだろう。

勝己はそのまま中空へと飛び上がり、爆音にも負けないよく通る声で轟に語り掛けれる。

「飛べるヤツに地を這う攻撃してどうすンだゴラアツ!? 常闇に言われたこと忘れてんのか!? それともただの間抜けか!?」

「忘れては、いねえ！」

「堂々と間抜け自白してんじゃねえツ！」

空から収束爆撃が連打される。

轟は氷の高速精製で回避するが、性質上右には移動しづらい。すぐに回避しきれず爆撃を浴びた。

「何がしたくて雄英に来た!? 何のために他の連中蹴落とした!? 何になりたくてここまで恥晒してきた!? この程度も言えねエのかこのクソカスが！」

「ツ、うるせえ！ ついさつき分かんなくなつたとこなんだよこつちは!!」

「知るかボケエツ！ 本気の夢がちよつとやそつとで分かんなくなるか!! そりやさつきまで目エ曇らせてただけだろオガ!!!」

勝己の攻撃が激しさを増す。

それを轟はギリギリのところで防ぎ続ける。反撃に移ることも出来ず、答えることもできないストレスから、子供のように言い返した。

「じゃあお前は何がしたい!? 何のために俺に話しかける!? 勝ちたいだけなら一気に押し出せばいいだろ!!」

「ガキかテメエは！ 言えねエとでも思つてんのかツ!?

俺はオールマイトをも超えるN.O. 1ヒーローになるツ！ そのためにやるべきこ

とやつてンだけだ!!

勝己は堂々と自身の目標を叫んでのけるが、轟は耳を疑い爆撃をもろに受け場外ギリギリまで吹き飛ばされた。

それを見て白けたとばかりに勝己は爆撃をやめフィールドに降りる。ぐるりと観客席を見渡すが、誰も彼もが似たような表情をしていた。

「俺がコレ言うとどいつもこいつも似たよおな反応しやがる。俺ごときがオールマイトを超えるわけねエってアホを見る目で見下しやがつてよオ！」

テメエらクソ共が決めた限界なんざ知るか！ 倘はそうなりたいって思つた！！ならそうなるために進み、叶える!!! そんだけだ!!!!

「……本気で言つてんのかよ？」

同じことを言い、同じ夢に向かつて突き進み、結果挫折した男を知るが故の疑問。

二十年以上不動のN.O.2であり、その他のヒーローとは隔絶した才覚を有する父ですらああなつたのだ。轟にとつてオールマイトは越えようと思つて超えられる程度の存在ではない。とてもではないが勝己の言葉は信じられなかつた。

「本気に決まつてんだろオガ！」

そりや一人じや迷走したり立ち止まることもあつたかもしけねエ！ 折れちまう可能性だつて当然ある！

だがな、俺にや本氣で肯定して支えてくれるヤツがインだよ！ こんなに心強いモンはねエ！！

だから俺はブレねえ曲がらねえ止まらねえ！ 夢を叶えて、その先に進む!! わかつたかッ?!』

勝己の叫びに観客席はどよめく。

そこにいるほとんどの観客はオールマイトという絶対の存在に慣れ切り、挑むという発想すら無くした大人達だ。彼らにとつて勝己の主張は狂人のソレに近く、理解できるものではなかつた。

理解できた大人は、同じ夢を追つたエンデヴァーくらいのものだ。

「ふん」

エンデヴァーは機嫌が悪そうに鼻を鳴らす。彼が夢を追つた時、応援してくれる者などいなかつた。そして周囲の想像通り夢は叶わず、それでも諦めきれずズルズルと迷走を続けた。拳句の果てに自身の上位互換焦凍が生まれたことで心が折れ「後継者がオールマイトを超え、一番になればいい」と妥協するに至つてしまつた。

そんな彼にとつて勝己はとても眩しく妬ましい。どうして自分はああなれなかつたという思いが沸々と湧いてくる。

「あの少年にもいつか限界が訪れる。頂きにたどり着けるのは焦凍のような特別な者

だけだ。だからこそN.O. 1になるのはお前の義務なんだ。負けるなよ焦凍)』

そんな風に負け惜しみも混じつたエールを息子に送った。

一方当の息子はと/orうと、大多数の観客同様困惑していた。才能が有り過ぎるせいでこれまで轟を支えようと思う人になんて会つたことがなかつたためだ。

「……わかるかよそんなもん。皆が皆、お前みたいに強かねえんだ」

「根性無しが。まあいい。試合開始前に言つた通り、俺アテメエのクラスの学級委員長様だ。余力でテメエのことも支えてやつからとりあえず動けや。壁いくつか越えりや強くなつてンだろ」

「ツ、どこまでも上から言いやがつてよ……！ どうなろうが、知らねえぞ!!」

轟の顔に引きつったような笑いが浮かぶ。大きな壁に挑むヒーローとして、まだ上手くは笑えないがそれでも一步踏み出した。

左から炎を纏いながら、水を勝己に向かつて伸ばしていく。ギリギリまで迫つたところで追い越すように炎を噴射し、冷えた空気や水分を一気に膨張させ大爆発を巻き起こした。

『一回戦の爆発再び!! こりや爆豪散々煽つて負けちまつたかツ!?』

『無いとは思うが、もしやと思つちまう威力だな。さてどうなつたか……』

観客席、実況席からは爆発で起きた蒸氣で何も見えない。

ようやく霧が晴れた時、フィールドはボロボロになつていたが両者とも健在だつた。

「威力は高エが狙いが難！　まさかこんなので俺を倒せるたア思つてねエだろオな？」

本人の言う通り、威力こそ高かつたもののそれをまき散らすだけ。火力は覚醒を果たした勝己をも上回つていたが、勝己に当たる分だけなら相殺も十分可能だつた。

自身の最大火力をあつさり凌がれ、挑む壁の高さに轟は笑みのぎこちなさを薄れさせていく。

「あわよくばつて思つたがそりやそうだよな。まだ手はある。行くぞ」

「ダラダラ喋つてねエでさつさと来いやアツ！」

炎がばらまかれ、氷が地を覆い、それらがまとめて爆破され吹き散らされていく。並みのプロでは乱入することすら不可能な大火力の打ち合いだ。

「ハツハ――ツ！」

「おおおおおおおつ！」

氷での防御や場外対策は有効だが、攻撃としては遅く届かない。アクセルベタ踏みしか出来ず試合で使つていい火力ではないが、勝己なら防ぐと信じて轟は炎をメインに攻め立てる。

勝己は高速機動を最低限に、期待通りの打ち合いに興じる。純粹な出力では明らかに劣るが、立ち回りと貫通力の高さでむしろ有利な状況を維持して見せた。

しばらく膠着状態が続いたが、ついに転機が訪れた。

「ツ!?」

体温上昇と疲れから凸凹になつたフィールドに轟が脚を取られた。

「ぐあつ!!」

「これで！ 僕の！ 勝ちだあああああツ!!」

空中で身動きの取れない轟に対し、勝己の爆破が追い打ちをかけた。

場外へ吹き飛ばされたなら小規模な水蒸気爆発で立て直す目もあつたが、それすら許さぬラッショウが叩き込まれる。

熱には耐性のある轟も爆破による衝撃は耐えきれず、ついに気を失つて地面に落ちた。

「轟くん戦闘不能！」

よつて爆豪くんの勝ち！！

以上で全ての競技が終了!! 今年度雄英体育祭一年優勝は、A組爆豪勝己!!!

表彰式

「それではこれより!!

表彰式に移ります！」

POM、POMと祝砲が上がる中、表彰式が始まった。

雄英体育祭では三位決定戦は行わない。そのため三位の選手用の台が二つある。友奈はまだ疲労でふらついているものの、リカバリーガールの尽力もあり全員が立て表彰式に臨んでいた。

それを見ている選手達はやることもないので雑談をしていた。

「静岡県民しかいねえな」

「地元お祭り騒ぎだろうねー」

「ウチ地元に帰りづらいんだけど。一人だけ第二種目脱落とかさー」

完全に偶然だが、今年度の体育祭で檀上に上がったものは全員静岡出身だ。しばらくの間は静岡名産の品が良く売れるだろう。

「あれ、そういうや飯田は？ 便所？」

「なんか急用出来たつて帰つたぞ。深刻そうな顔してたし、実家のヒーロー事務所でな

んかあつたんじゃないかな?」

「あー、体育祭の警備とかスカウトで大手が動いてるからどこも手薄になつてるとんね。
ここぞつて暴れるヴィランも出てくるか」

「怪我ならともかく、死人は出てねーといいけどなあ。無駄な心配であつてほしいぞ」
「はい、そろそろ静かにする!」

メダル授与を始めるわよ!!

今年メダルを贈呈するのは勿論この人!!!

「私が、メダルを持つて「我らがヒーロー、オールマイトオ!!!」

ミッドナイトの紹介とステージの外から飛び込んできたオールマイトの名乗りがか
ぶつた。

立場上ミッドナイトが謝つているが、セリフ的にオールマイトが飛び込んでくるタイ
ミングを間違えたのだろう。友奈はミッドナイトのフォローを、勝己はオールマイトの
弄りを後でやろうと思つた。

「気を取り直してメダル授与を始めるわ!

オールマイト! お願いします!!

「あ、ああ!

常闇少年、おめでとう！

強いな君は！」

「もつたいないお言葉」

常闇が頭を下げ、オールマイトがその首に銅メダルを掛ける。

「ヒーローの卵として素晴らしい心意気を見せてもらつた。

ただし！ 感情に振り回されてはいけないぞ！ ヒーローは守るモノが多い。民衆に街、仲間に己自身！ それら全てを守るには冷静さが不可欠だ！ 君のように制御が緩めば勝手に動く“個性”ならなおさらね！

君の力は便利で強力だ。それさえ出来れば安定感がさらに増すだろう

〔御意〕

掛けられた銅メダルを見つめながら答える。

オールマイトの言う通り、冷静さを保てば冰山の倒壊も十分凌げた。炎を使つてきても爆豪対策がそのまま使えただろうし、勝機はあつたのだ。

このメダルは傷として受け入れ、乗り越えて成長して見せると決意した。

〔結城少女、おめでとう！〕

「ありがとうございます！」

「君はいつも元気よく、何事にも全力だ。それは長所だが、時には立ち止まることも覚え

ような？

今回は上手くいったが、終わってから聞いて肝が冷えたぞ」

「あはは……出来るだけ気を付けます」

「断言はしてくれないのがウソが苦手な君らしいとは思うけど……仕方ない、ブレーキは爆豪少年に期待しよう」

苦笑いに苦笑いで返し、残った問題は勝己に丸投げすることで決まった。元々そつだつたし、これからもそれは変わらないだろう。

「轟少年、おめでとう」

「ありがとうございます」

「準決勝までは説教物だつたが、決勝戦は良かつたな！ やはり常闇少年や爆豪少年の言葉に思うところはあつたかな？」

「はい。俺もあなたののようなヒーローになりたかつた。それを思い出して、ようやく皆と同じスタートラインに立てました。二人には感謝しています。

……ここからです。俺はここから、目指したヒーローになつてみせます」

「うむ！ 頑張りなさい。君は一人じやない。競い合い、心の支えとなるライバルがたくさんいる。きつとなれるさ！」

轟は憧れた人からエールを受け、まず目を逸らしていた家庭の問題からぶつかつてみ

「ようと決めた。

「さて、大トリだ。

爆豪少年、伏線回収おめでとう。見事だつたよ」

「おう！ 俺としても一応満足のいく内容だつた。

出来りやガチバトルは総当たりで全勝したかつたが、無茶なンはわかつてゐるしな」

「そりや良かつた。来年も期待してゐよ」

「任せとけや。また優勝してやらア！」

金メダルを首にかけ、勝己はそれを選手たちに見せびらかす。

期待通り「また渡してなるものか」「来年こそはアレを自分が貰う」と選手たちが闘志を滾らせる。

オールマイトは決勝戦を見ても心の折れていらない卵たちを見て頼もしく感じながら、締めの言葉に移つた。

「さア！ 今回は彼らだつた!!

しかし皆さん！ この場の誰にもここに立つ可能性はあつた!!

ご覧いただいた通りだ！ 競い！ 高め合い！ さらに先へと上つていくその姿!!

次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!!

てな感じで最後に一言!! 皆さんご唱和下さい!! セーの」

「プル「P 「プルスウ 「おつかれさまでした!!」
「そこはプルスウルトラでしょオールマイト!」
「ああいや……疲れたろうなと思つて……」
「……締まらねえなア。打合せちゃんどしとけや
「あ、あははは。まあオールマイトらしいよね」
」

コードネーム考案1

体育祭から二日間、雄英生には休日が与えられていたが、勝己と友奈は専用の設備がある場所でリカバリーガールの検査を受け続けていた。

雄英の設備だけではわからない異常が体に発生していないか確認するためだ。

結果は問題なし。

途中、友奈は力のストックが溜まつたせいか牛っぽい謎生物——リカバリーガール命名、牛鬼——が現れて始めから検査し直しになつたりしたが、二人とも異常は検出されず検査は終了した。後日データを解析した結果が伝えられることになつていてる。

「下手な特訓よか疲れたなアリヤ」

「動けないって辛かつたね……」

まだ他の生徒は来ていらない時間帯、教室の清掃をしながら雑談を交わす。交通の便の関係上、予鈴間近かかなり早いかなのだが、勝己と友奈は早めの便で来る。他の生徒たちが来るまでのいつもの暇つぶしだ。

掃除を終え今日の授業に備えて予習をしていると、ポツポツとクラスメイトも登校し始めた。

「あ、乃子ちゃん！ おはよう！ A組になつたんだね！」

「おはよう結城さん。半々だつたんだけど、運良くね」

元普通科の摸武乃子もA組に登校してきた。

二日間の休日の間に編入先を教師たちが突貫で決めて、今朝職員室で通達を受けたらしい。

「他は誰が来んだ？」

「A組には黒田君と心操君、B組には慄木君と溜打君ためうちが編入するみたい。弾き出されたのが誰かは聞いてないけど」

「あいつらか。なら問題なく付いてけんな。手間がかんなくていい」

心操は元普通科で、"個性"は"洗脳"。声をかけ答えた相手を操ることが出来る。コレでB組の宍戸を操り普通科、サポー^トト科の生徒を複数人、障害物競走第三関門手前まで運んでいた。残念ながら体育祭前の特訓で手の内がバレている相手が大半だつたため、騎馬戦で目立つことはなかつた。それでも教師たちには十分アピール出来ていたということだろう。

溜打は元サポー^トト科で、"個性"は"チャージ"。予備動作——剣なら構える、銃なら引き金に指をかけるなど——を取つて、実際に行動に移すまでの時間が長い程威力が増すという"個性"だ。戦闘向けて強力なのだが、チャージし過ぎると武器が壊れ

る。一般入試ではロボットより頑丈な武器を準備出来なかつたため、ポイントを稼げず不合格だつた。体育祭では勝ち抜きを放棄して、障害物競走第一関門で自作のサポートアイテムを振るいロボット相手に無双。高い戦闘能力をアピールし、無事編入となつたらしい。

この五人が來た分A組からもB組からも各二人ずつ弾き出されたんだろうが、気にもして仕方がない。落とされた誰かの事より、登つてきた者がいたことを喜ぶとした。

「それはそうと、あなたたちは休日や登校中、声をかけられなかつた？ 私は慣れてなくて、つい逃げちやつただんだけど……」

「私たちは早い時間だつたからそういうのはなかつたかな。お休みの日もずっと検査受けてたし」

「俺は友奈ほど検査に時間食わんかつたが、新しい制服だのコスチュームの作り直しだの色々あつたからなア」

体が大きくなつてサイズが合わなくなつたのもあるが、足の裏でも爆破が出来るようになつたためコスチュームに構造の変更が必要だつた。

ひとまず掌と同じように爆破が使え、防刃性を持たせた素材を足の裏に使用。また柔軟な行動のために、靴ではなく足袋のような装備を要請した。

なおサポート科からの「再度の覚醒に備え伸縮性の高い素材を使う」と言う意見は通

したが、「本気モードの痣が見えるようなデザインにしたい」と意見は安全性を考慮して却下となつた。

「そうなの。なら私ももつと早く来るべきだつたかも。雄英体育祭の凄さ舐めてた」「まあ済んじやつたことは悔やんでもしようがないよ。それより乃子ちゃんも一緒に予習する?」

「…………いえ、自分でやるわ。結城さんと爆豪くんがセットの時、説明が擬音語ばかりでよくわからないし」

勝己も友奈もかなりの感覚派だ。勝己に普通に説明させると「ここをバーツとしてから、こつちをガーツとすりやいい」とかになるし、友奈だと「ババーンの後にキリツとしてパアアアつと」みたいになる。この一人だけなら意思疎通に問題は全くなないので、他人にはなかなか通じない。

一応勝己は小・中学校の九年間でクラスメイトに頼られるうちに、他人にわかるよう言い換えることも出来るようになつていて。それでも二人で話す時はコレなので、一緒に勉強していくとても気が散るのだ。

摸武が自身の席に着いた後も自習を続け、朝礼の開始時間が来た。

「おはよう」

「おはようございます!」「」

直前まで雑談をしていたのに、担任の相澤が入室する直前に皆席に着いて元気よく挨拶を返す。入学してからの短い時間でよく躊躇められているのが見て取れた。

「今日はお前らに連絡事項がある。3限からのヒーロー学だが、今日はちょっと特別だぞ」

「(ヒーロー関連の法律やらただでさえ苦手なのに……)」

「特別!? 拔き打ちテストか!? 体育祭ではどうにか除籍免れたつてのに連続は勘弁してくれよ!?!」

ここで悪い風にしか受け取られないのも相澤の、そして雄英の教育方針が現れていると言えるだろう。常に苦難を与え続け、生徒たちに警戒心と危機感を抱かせている。これには推薦したミッドナイトも、採用した校長もニッコリだ。

「ヒーロー名の考案だ」

「「「「胸ふくらむやつきたあああああ!!!!」」」

相澤に睨まれて一瞬で静まり返った。担任怖いなら初めから騒ぐな。

打ち切り

【職場体験編】

クラスで話をしている時、牛鬼にダークシャドウを齧らせ「外道メ！」って言わせたい。

→で牛鬼が力を食つてストックできるようになつてることが判明。人を齧つても同様に力を食える。

オールマイトの頼みで職場体験先はサーナイトアイヒーロー事務所に。ミリオもいる。

オールマイトは後継者について口下手で上手く説明できず、サーナイトアイを怒らせていた。

サーに「N.O. 1ヒーローとはどんな存在か」と聞かれ「最も強くて機動力のあるやつ」と答える。どんなヴィランも鎮圧できる最強の暴力装置がN.O. 1ヒーロー。

オールマイトはそれに「民衆の安心」「ヴィラン予備軍の諦観」をもたらし“平和の象徴”になつた。

勝己にとつては戦闘力と機動力でオールマイトを超えるのは前提。そこから社会に

もたらすモノでオールマイトを完全に超える。

何をもたらすかは現在勉強中だが、自分が引退した後も残るモノがいい。

オールマイトは本人が頑張ってるだけで、いなくなつたら何も残らない活躍の仕方だつたから。オールマイトが若いころ活躍したアメリカも、離れて時間が経つたら登場前と同じ状況に戻つてるし。

ここまで言つて「勝己の向上心だけだと荒々しくて不安。だけど友奈もいるなら大丈夫そう」とサーも二人を認める。

【サーの“個性”】

原作通り “予知”

1秒先の予知で先読み。一日一回、相手の行動を一日分読み取る予知。数年後の状況を見る予知。全部できる。

ただし変えられないのは予知の内容だけで、予知した内容がいつ起きるかは簡単にわかる。

遠い未来の予知ほど見た感じと実際に起きる時のタイミングが違う。5年先の予知なら10年先、15年先にズレてもおかしくない。

1秒先の未来でも勝己レベルの反射神経だと、1秒先に行うはずの動作を中断して行

動変更できる。そして10秒先くらいで予知通りの行動を取るとかもよくある。オールマイトが生きていられる時間を引き延ばしたくて、近くで補佐するんじやなく独自に動いていた。

【ヒーロー殺し編】

体育祭での「オールマイトを超える」発言で、勝己はステインの標的になつていた。自分の地位にこだわるとか偽物、らしい。

勝己が確認されたところに迅速に移動し殺すため、保須で適当なヒーロー4人殺害済み。

サーの“予知”で勝己の未来を確認。

路地裏に入つたところでステインが勝己の後ろから奇襲してきた所まで見て“予知”をやめる。

“予知”的内容はいじらなければ変わらないので、そのまま保須市周辺に行つてパトロール。

“予知”通りに襲つてきたステインを四人がかりで袋叩き。

「有能でスタッフにまでなつてオールマイトを支えたファン＝サーナイトアイ」が「出来の悪いコスプレイヤーは殺すタイプのオールマイトオタク＝ステイン」逮捕

復讐し損ねた飯田は教師陣のカウンセリングと兄の言葉で復帰。感情に振り回されないよう成長することを誓う。

【期末試験編】

出来がいい生徒が多いので、ロボ相手よりもっと実戦的なテストを行うことが決定。

勝己

峰田や青山、物間などの普通科送り組とヴィラン役の教師、パワーローダーと戦闘。パワーローダーは地中を移動できるため勝己でも戦いづらく、攻撃力も高くて土の散弾を飛ばして空へも攻撃できる。

普通科送り組は功績の奪い合いとして勝己の邪魔をかなりする。空中にはマスコミ役の無人ヘリも飛んでる。

同業者に恨みを買わず、マスコミや野次馬から怪我人も出さずにヴィランを倒す試験。

上手く普通科送り組の妨害を利用し、連携取つたように見せてどうにか確保。

友奈

クラスの女子たちと災害救助

重傷者その他に、恐怖からパニックになり「自分から救ってくれ」と泣きながらヒーロー

にしがみ付き続けたり、他の要救助者と争つたりする人たちの救助

やたらパワフルかつ元気なうえ、パニックになつてるので声をかけても聞いてもらえないという設定

深く考えず行動できる芦戸が筆記試験で普通科送りになつていたのが響き、対応が遅れる。

それでも「現場でこうなつた時は、事後処理はかつちやんに手伝つてもらう!」と友奈が決断。

牛鬼に要救助者を齧らせ、全員気絶させてから救助

観戦していた教師陣、勝己としては人命優先で正解。要救助者に攻撃したことについては勝己が「記者会見試験」で合格点を出したことで許された。

【林間合宿編】

普通科にも優秀な生徒がいるので参加させたいが、人数が多すぎる。
多めにヒーローを招いて学校で合宿をすることに。

B組柳レイ子の“個性”ポルターガイストが活躍。

なぜ念動力ではなくポルターガイストかと言うと、彼女の視点では幽霊が物を掴んで動かしているから

そして幽霊はレイ子から“活力”の供給を受けて物体に干渉できるようになつてい
る。

友奈はそれが見えていたので指摘。勇者部所属とかでも幽霊見えてたし。

ここから“個性”とは別に“活力”を運用することをプロも一緒になつて試みる。

友奈の擬音だらけな完璧な説明を受けて勝己が“活力”的扱いをマスター。

牛鬼に吸われている時の感覚で“活力”を放出、身に纏い“個性”による攻撃を防
御。

扱いはほぼハンターハンターの念、あるいは呪術廻戦の呪力。

脳に纏わせて“洗脳”を防いだり、“個性”に注ぎ込んで一時的に強化できるよう
に。

林間合宿で友奈が「やたらはりきつてる」と言われ「時間がない気がする。今のうち
にもつと強くならないと」と返す。

裏ではオール・フォー・ワンが死穢八斎會を壊滅させている。

元々は死柄木を探すための“個性”を探しだつたが、“オーバーホール”を得たことで
怪我も治して完全復活。

後継者に譲る必要はない、永遠に自分が魔王として君臨するんだと決意。

エリは怪我した体では扱いきれないと思い殺害。思つたより早く治せたので「もつた

「いないうことをした」と後悔。

魔王復活のイベントとして雄英高校文化祭で派手に暴れようと思う。ついでに弟も回収し、兄弟で共に征こうと決める。

【仮免試験編】

勝己、友奈、八百万、轟の四人だけが受験。

世間も荒れていないので、波乱もなく全員合格

【インターん編】

キンクリ。

色々なヒーロー事務所で運営ノウハウについて学んだり、チャリティーをやって楽しんだりする。

【文化祭編】

落伍者のユーチューバーは出番なし

A組はヒーローコスチューム着ての大道芸に決定

メインは普通科、サポート科、経営科なのであまり凝らない。

そしてオール・フォー・ワンが襲来
ギガントマキア、マスキュラー、ムーンファイツシユ、コンプレス、そして大量の脳無
軍団を連れている。

ギガントマキアをオールマイトが、マスキュラーはパワーローダー他数名が、ムーン
ファイツシユはプレゼントマイク他数名が、コンプレスはスナイプが倒すが、事態が終了
するまで足止めされる。

そうしている間に勝己と友奈は脳無によつて隔離されオール・フォー・ワンと対峙
勝己が前に出て覚醒しながら戦うも、オール・フォー・ワンは歴戦のヴィラン。
覚醒できる限界を見切つて詰将棋のように攻める。

が、それ以上の速度で勝己の技量が向上。

オール・フォー・ワン、驚愕し焦りつつもどうにか吹き飛ばして撃退

その後ろから友奈が潜んでおり、歴代継承者を全消費する『大満開』で攻撃
オール・フォー・ワン、普通の人間ではなく、自分同様「特別」な弟の後継者が追い
詰めてくる状況に安心しつつ本気で迎撃。

『大満開』が切れるまで完全に抑え込む。

「これで勝った、と思っていると、吹き飛ばされて助走距離を稼いだ勝己が飛んでくる。
『特別』な友奈は囮で、「凡庸」で一般家庭生まれの勝己が本命だつたことに恐怖しつつ

全力防衛。

防御を突き破り勝己の最大火力でオール・フォー・ワン撃破

【その後】

勝己

オール・フォー・ワン戦では覚醒連打で身長5m以上になるも、2mそこそこまで縮む

意識的に5mまで大きくなり、最大火力を打てるようになるのが目標

友奈

ストックした力を使い果たし“無個性”と大差ない状態に

それでも困ることはほぼないし、牛鬼が勝己を齧つていればすぐストックは溜まるので気にしてない

オールマイト

引退。自分の後継者にふさわしい者達は育っている、とコメントし、彼らがインター
ンに出ていると報道したことでのヴィラン犯罪発生率はそこまで上がらなかつた。

オール・フォー・ワン

逮捕。

彼からすれば凡庸なヒーロー候補に倒されたことで、ヒーロー自体にトラウマを負つた。

もうヒーローと争わなくていいよう、全ての“個性”因子が休眠状態になり、ほぼ“無個性”に。もうヴィランにはなれない。

裁判で罪を裁かれ、罰を受けてヒーローに追われる心配のない状態になれることう。それが死でも問題なし。

しばらく経つて雄英卒業、俺たちの戦いはこれからだエンド。